

仙台市文化財調査報告書第385集

川内B遺跡

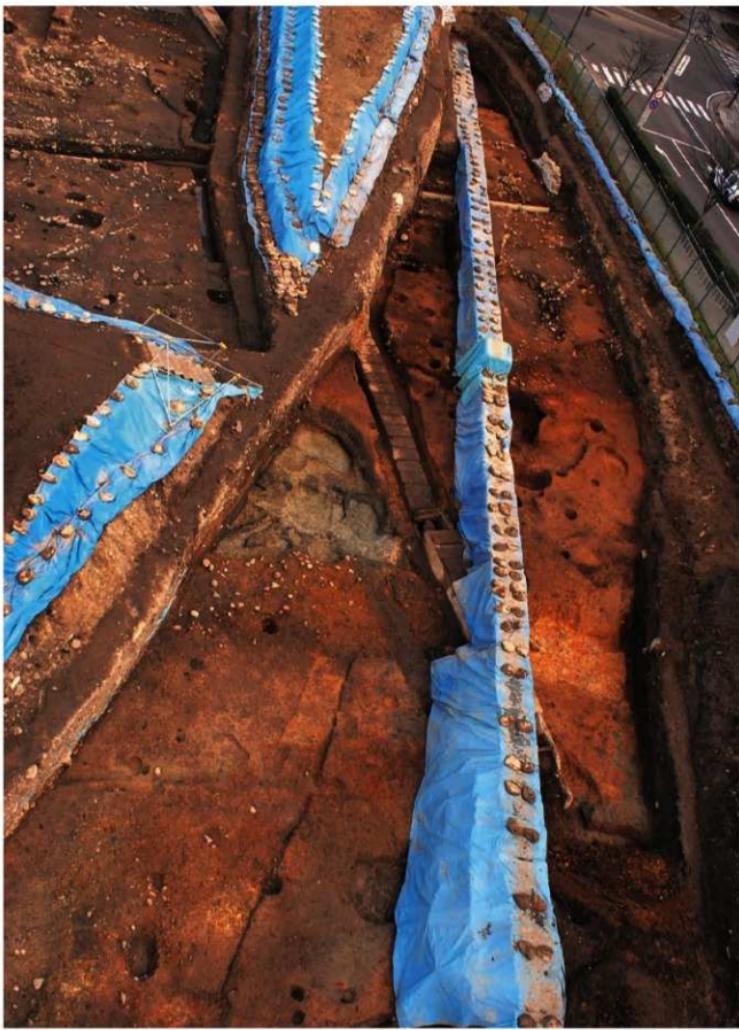
——仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書V——

2011年3月

仙台市教育委員会



路線部Ⅰ区 全景（南東から）



路線部II区 全景（西から）



路線部Ⅰ区 SA2柱跡（南東から）



路線部Ⅱ区 SD1溝跡遺物出土状況（南東から）



迂回路部 IV層上面全景（西から）



迂回路部 III層中より出土の石列（北から）



迂回路部 SX21 カマド跡（北から）



迂回路部 SD3 溝跡（北から）



迂回路部 SD4 溝跡（東から）



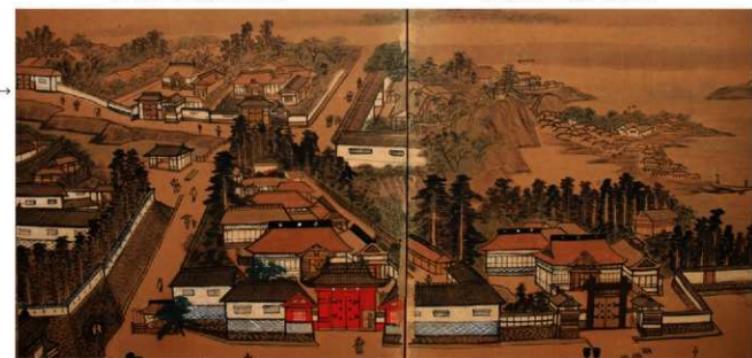
迂回路部 北西部版築状堆積（東から）



IV層遺物出土状況（陶磁器）



IV層遺物出土状況（蚊遣り）



慶応元年仙台城下図屏風（第5・6扇） 仙台市博物館所蔵

(→↑の交点付近が川内B道路)

序 文

仙台市の文化財保護行政につきまして、日頃から多大なご協力を賜り、まことに感謝にたえません。

さて、当市では、高速鉄道東西線建設事業を推進し、高速鉄道南北線や、JR、バスと連携した公共交通ネットワークを形成することにより、暮らしやすく環境にやさしい新しい都市づくりを進めております。

高速鉄道東西線の計画路線内には仙台城跡をはじめとした遺跡があり、さらに新しい遺跡が発見されることも予測されたことから、仙台市教育委員会では事業主体者の仙台市交通局と協議を重ね、平成16年度より確認・試掘調査を実施してまいりました。川内B遺跡は、仙台城二の丸跡の北側に位置し、平成16年から18年度にかけて実施した試掘調査により、仙台城の関連遺跡として平成20年度に新たに遺跡登録され、平成20年度に本格的な発掘調査を実施いたしました。調査の結果、仙台城をとりまく武家屋敷の様相を示す貴重な資料が得られております。本報告書はこの平成20年度の本発掘調査の成果をまとめたもので、高速鉄道東西線関係の本報告書の5冊目となります。

これまで、先人たちが残してきた貴重な文化遺産を保護し、活用しながら市民の宝として、次の世代に引き継いでいくことは、これから「まちづくり」に欠かせない大切なことであると考えております。ここに報告する調査成果が地域の歴史を解き明かしていくための貴重な資料となり、広く活用され、文化財に対するご理解と保護の一助になれば幸いです。最後になりましたが、発掘調査及び調査報告書の刊行に際しまして、多くの方々のご協力、ご助言をいただきましたことを深く感謝申し上げ、刊行の序といたします。

平成23年3月

仙台市教育委員会
教育長 青沼 一民

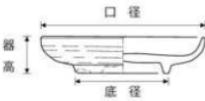
例 言

1. 本書は仙台市高速鉄道東西線建設に伴い実施した川内B遺跡の発掘調査報告書である。
 2. 発掘調査は、仙台市教育委員会が国際文化財株式会社へ委託して実施した。
 3. 本書の作成は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 原河英二・主濱光朗・結城慎一の監理のもとに、国際文化財株式会社 土 任隆・武田芳雅が担当した。
 4. 本書の第3・4図の絵図・地図の掲載にあたっては、所蔵機関の許可を得ている。
 5. 本調査の実施及び報告書の作成に際し、次の諸氏・機関よりご指導、ご教示、さまざまご協力を賜った。記して謝意を表す次第である（敬称略順不同）。
- 藤沢 敦（東北大学理蔵文化財調査室） 松本秀明（東北学院大学） 渡邊慎也（雑華文庫主宰）
斎藤報恩会 東北歴史資料館 宮城県図書館 東北大
仙台市博物館 仙台市歴史民俗資料館 仙台市交通局 仙台市建設局
6. 発掘調査に関わる一切の資料は、仙台市教育委員会が保管している。
 7. 遺物の墨書き等の確認は鶴岡幸子氏、倉橋真紀氏、栗原伸一郎氏、坂田美咲氏（仙台市博物館）のご教示を得た。
 8. 石製品の石材については、蟹沢聰史 東北大名誉教授（理学博士）に鑑定していただいた。
 9. 陶器の年代等の確認は、仙台市教育委員会生涯学習部文化財課 佐藤 洋の協力を得た。

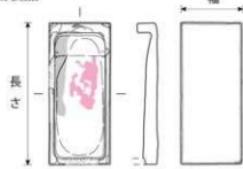
凡 例

1. 本書の土色は、新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局 1998年版）に準拠している。
2. 本書中の第1図は、国土地理院発行の5万分の1地形図「仙台」の一部と、1万分の1地形図「青葉山」「仙台駅」の一部を合成して使用した。
3. 図中の座標値は日本測地系（第X系）座標を使用した。
4. 本文図版等で使用した方位は真北を基準としている。
5. 標高値は、海拔高度（T.P.）を示している。
6. 遺構図は1/40縮尺を基本とした。その他については各図のスケールを参照されたい。
7. 基本層の表記は、表土層からローマ数字を用い、遺構堆積物についてはアラビア数字で表記した。
8. 遺構図において、■（トーン）は礫を示している。
9. 遺構・遺物の登録・整理及び報告書での表示には、以下の分類と略号を使用した。
SA：柱跡、SB：建物跡、SD：溝跡、SE：井戸跡、SK：土坑、P：ピット、SX：カマド跡・性格不明遺構
A：縄文土器、F：丸瓦・軒丸瓦、G：平瓦・軒平瓦、H：その他の瓦、I：陶器・瓦質土器・土師質土器
J：磁器、K：石器・石製品、N：金属製品、O：自然遺物、P：土製品、X：その他の遺物
10. 遺物実測図は原則として縮尺1/3としたが、瓦は1/4、土製品、石製品、金属製品は2/3、古銭は原寸で表示した。また、木製品は適宜縮尺を調整している。
11. 遺物実測図において、外形線・中心線・稜線は実線、推定線は破線で、釉薬部の境は一点鎖線で表した。中心線が一点鎖線のものは、展開し図上復元したものである。
12. 陶磁器類の遺物観察表には備考に「ロクロ成形」の記載は行ってない。また、法量の表示で（）書きの数値は残存値である。
13. 報告書内で使用している尺・寸の長さは「1 尺 = 30.3cm」、「1 寸 = 3.03cm」とした。
14. 遺物図のトーン及び法量の基準は次頁のとおりである。

陶磁器 土師質土器 瓦質土器



石製品

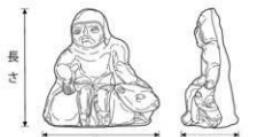


黒墨範囲

朱墨範囲

瓦・土製品・石製品 割れ

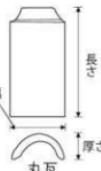
土製品



瓦



軒丸瓦



丸瓦



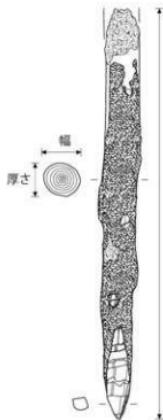
谷深
脇区幅
瓦当幅
周縁高
瓦当高
頭幅

平瓦 軒平瓦



棟瓦

木製品



漆器椀の計測部位は
陶磁器類に準じる



本文目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	1
第3節 調査概要	3
1 現地調査	3
2 整理作業	3
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査方法	9
第1節 調査方法	9
1 現地調査	9
2 整理作業	9
3 調査区名称について	9
4 遺構名称について	9
第2節 調査区グリッドの設定	10
第4章 基本層序	11
第5章 検出遺構と遺物	23
第1節 路線部I区	23
1 VII層上面検出遺構	23
2 VI層上面検出遺構	28
3 V層上面検出遺構とV層出土遺物	38
4 IV層上面検出遺構とIV層出土遺物	46
5 III層上面検出遺構とIII層出土遺物	52
6 II層出土遺物	62
第2節 路線部II区	64
1 VII層上面検出遺構	64
2 VI層上面検出遺構	73
3 V層上面検出遺構とV層出土遺物	75
4 IV層上面検出遺構とIV層出土遺物	81
5 II層出土遺物	92
第3節 迂回路部	93
1 VI層上面検出遺構とVI層出土遺物	93
2 V層上面検出遺構とV層出土遺物	102
3 IV層上面検出遺構とIV層出土遺物	110
<IV-2層上面の遺構>	110
<IV層上面の遺構>	116

4	Ⅲ層上面検出遺構とⅢ層出土遺物	182
5	Ⅱ層出土遺物	212
第6章	自然科学分析	214
第1節	川内B遺跡の植物化石群	214
第2節	川内B遺跡出土木材の樹種同定	225
第3節	川内B遺跡出土の動物遺体	232
第7章	出土遺物と検出遺構について	235
第1節	出土遺物について	235
1	陶磁器	235
2	瓦質土器	241
3	土師質土器	242
4	金属製品	242
5	土製品	243
6	木製品	244
7	瓦	245
8	出土遺物のまとめ	245
第2節	検出遺構について	246
1	盛土及び土留め工	246
2	建物跡（台所跡）	247
3	その他の建物跡	248
4	区画施設	250
5	検出遺構のまとめ	251
第8章	まとめ	253
引用・参考文献		254

挿 図 目 次

第 1 図	道路位置図	2
第 2 図	河岸段丘分布図	4
第 3 図	絵図(1)	6
第 4 図	絵図(2) 地図	7
第 5 図	周辺遺跡分布図	8
第 6 図	グリッド設置図	10
第 7 図	基本順序概念図	11
第 8 図	基本土層柱状図	12
第 9 図	路線部 I・II 区北壁断面図	13
第 10 図	路線部 II 区南壁断面図	15
第 11 図	迂回路部東壁断面図	17
第 12 図	迂回路部西壁断面図	17
第 13 図	迂回路部南壁断面図	19
第 14 図	迂回路部北壁断面図	21
第 15 図	VII層上面遺構配置図	23
第 16 図	SD11 溝路平面図・断面図	24
第 17 図	SD12 溝路平面図・断面図	25
第 18 図	SK2 土坑平面図・断面図	25
第 19 図	SK3 土坑平面図・断面図	26
第 20 図	SK4 土坑平面図・断面図	26
第 21 図	SK15 土坑平面図・断面図	27
第 22 図	SK17 土坑平面図・断面図	27
第 23 図	SK18 土坑平面図・断面図	27
第 24 図	VII層上面遺構配置図	28
第 25 図	SA3 柱列跡平面図・断面図	29
第 26 図	SA5 柱列跡平面図・断面図	30
第 27 図	SD8 溝路平面図・断面図・出土遺物	31
第 28 図	SK8 土坑平面図・断面図	31
第 29 図	SK9 土坑平面図・断面図	32
第 30 図	SK10 土坑平面図・断面図	32
第 31 図	SK12 土坑平面図・断面図	32
第 32 図	SK13 土坑平面図・断面図	33
第 33 図	SK16 土坑平面図・断面図	33
第 34 図	SX5 性格不明遺構平面図・断面図	33
第 35 図	SX8 性格不明遺構平面図・断面図	34
第 36 図	SX9 性格不明遺構平面図・断面図	34

第 37 図	SX10 性格不明遺構平面図	35
第 38 図	SX10 性格不明遺構断面図・盛土土留め部分 立面図・断面図	36
第 39 図	SX10 性格不明遺構出土遺物	37
第 40 図	SX11 性格不明遺構平面図・断面図	37
第 41 図	V層上面遺構配置図	38
第 42 図	SA4 柱列跡平面図・断面図	39
第 43 図	SZ2 溝跡平面図・断面図・出土遺物	40
第 44 図	SD3 溝跡平面図・断面図・出土遺物	41
第 45 図	SD7 溝跡平面図・断面図	42
第 46 図	SD10 溝跡平面図・断面図	42
第 47 図	SK11 土坑平面図・断面図	43
第 48 図	SX14 土坑平面図・断面図	43
第 49 図	SX4 性格不明遺構平面図・断面図	43
第 50 図	杭排列棟地点平面図・標高図	44
第 51 図	杭列出土遺物	45
第 52 図	V層出土遺物	45
第 53 図	IV層上面遺構配置図	46
第 54 図	SA2 柱列跡平面図・断面図・出土遺物	47
第 55 図	SD5 溝跡平面図・断面図	48
第 56 図	SE1 井干跡平面図・断面図	48
第 57 図	SX3 性格不明遺構平面図・断面図	49
第 58 図	SX3 性格不明遺構出土遺物	50
第 59 図	IV層出土遺物	51
第 60 図	III層上面遺構配置図	52
第 61 図	SA1 柱列跡平面図・断面図	53
第 62 図	SD1 溝跡平面図・立面図	54
第 63 図	SD1 溝跡断面図・出土遺物	55
第 64 図	SD6 溝跡平面図・断面図・出土遺物	56
第 65 図	SK1 土坑平面図・断面図	57
第 66 図	SK6 土坑平面図・断面図	57
第 67 図	SK7 土坑平面図・断面図	58
第 68 図	SX1 性格不明遺構平面図・断面図	58
第 69 図	SX2 性格不明遺構平面図・断面図	59
第 70 図	III層出土遺物（1）	60
第 71 図	III層出土遺物（2）	61
第 72 図	III層出土遺物（3）	62
第 73 図	II層出土遺物	63
第 74 図	V層上面遺構配置図	64
第 75 図	SAS5 柱列跡平面図・断面図	65
第 76 図	SE2 井干跡平面図・断面図・立面図	66
第 77 図	SE2 井干跡出土遺物	67
第 78 図	SK2 土坑平面図・断面図・出土遺物	68
第 79 図	SK3 土坑平面図・断面図	68
第 80 図	SK4 土坑平面図・断面図	69
第 81 図	SK5 土坑平面図・断面図	69
第 82 図	SK6 土坑平面図・断面図	70
第 83 図	SX16 性格不明遺構平面図・断面図	70
第 84 図	SX18 性格不明遺構平面図・断面図	71
第 85 図	SX19 性格不明遺構平面図・断面図	71
第 86 図	SX21 性格不明遺構平面図・断面図	72
第 87 図	VI層上面遺構配置図	73
第 88 図	SD2 溝跡平面図・断面図	73
第 89 図	SX9 性格不明遺構平面図・断面図	74
第 90 図	SX12 性格不明遺構平面図・断面図	74
第 91 図	V層上面遺構配置図	75
第 92 図	SA4 柱列跡平面図・断面図	75
第 93 図	SD1 溝跡平面図・断面図	76
第 94 図	SD1 溝跡出土遺物	77
第 95 図	SK1 土坑平面図・断面図・出土遺物	78
第 96 図	SX5 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	79
第 97 図	SX6 性格不明遺構平面図・断面図	80
第 98 図	V層出土遺物	80
第 99 図	IV層上面遺構配置図	81
第 100 図	SA1 柱列跡平面図・断面図	82
第 101 図	SA2 井干跡平面図・断面図	83
第 102 図	SA3 井干跡平面図・断面図	84
第 103 図	SE1 井干跡平面図・断面図	85
第 104 図	SX1 性格不明遺構平面図・断面図	86
第 105 図	SX2 性格不明遺構平面図・断面図	86
第 106 図	SX3 性格不明遺構平面図・断面図	87
第 107 図	SX4 性格不明遺構平面図・断面図	87
第 108 図	SX7 性格不明遺構平面図	88
第 109 図	SX7 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	89
第 110 図	IV層出土遺物（1）	90
第 111 図	IV層出土遺物（2）	91
第 112 図	II層出土遺物	92
第 113 図	VI層上面遺構配置図	93
第 114 図	SD4 溝跡平面図・断面図・出土遺物	94
第 115 図	SD5 溝跡平面図・断面図	95
第 116 図	SX33 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	96
第 117 図	SX41 性格不明遺構平面図・断面図	97
第 118 図	SX41 性格不明遺構出土遺物（1）	98
第 119 図	SX41 性格不明遺構出土遺物（2）	99
第 120 図	SX41 性格不明遺構出土遺物（3）	100
第 121 図	SX41 性格不明遺構出土遺物（4）	101
第 122 図	VI層出土遺物	101
第 123 図	V層上面遺構配置図	102
第 124 図	SA2 杭列跡平面図・断面図・出土遺物	103
第 125 図	SD3 溝跡平面図・断面図	104
第 126 図	SD3 溝跡出土遺物	105
第 127 図	SX30 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	106
第 128 図	V層出土遺物（1）	107
第 129 図	V層出土遺物（2）	108
第 130 図	V層出土遺物（3）	109
第 131 図	IV・-2層上面遺構配置図	110
第 132 図	SD4 溝跡平面図・断面図	111
第 133 図	SX40 性格不明遺構平面図・断面図	111
第 134 図	SX40 性格不明遺構出土遺物	112
第 135 図	SX43 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	113
第 136 図	SX45 性格不明遺構平面図・断面図	114
第 137 図	SX46 性格不明遺構平面図・断面図	114
第 138 図	IV・-2層出土遺物	115
第 139 図	IV層上面遺構配置図	116
第 140 図	SA1 柱列跡平面図・断面図	117
第 141 図	SBI 建物跡平面図・断面図	118
第 142 図	SBI 建物跡出土遺物	119
第 143 図	SD1 溝跡平面図・断面図	119
第 144 図	SD2 溝跡平面図・断面図	120
第 145 図	SD2 溝跡出土状況図・振り方平面図	121
第 146 図	SD2 溝跡出土遺物（1）	122
第 147 図	SD2 溝跡出土遺物（2）	123

第148図	SD7 溝跡平面図・断面図・出土遺物	124
第149図	SK5 土坑平面図・断面図・出土遺物	125
第150図	SK7 土坑平面図・断面図	125
第151図	SK7 土坑出土遺物	126
第152図	SK8 土坑平面図・断面図・出土遺物	127
第153図	SK2 カマド跡平面図・断面図	128
第154図	SK2 カマド跡出土遺物	129
第155図	SX4 カマド跡平面図・断面図	130
第156図	SX4 カマド跡出土遺物	131
第157図	SX5 カマド跡平面図	131
第158図	SX5 カマド跡断面図・出土遺物	132
第159図	SX6 カマド跡平面図	132
第160図	SX6 カマド跡断面図	133
第161図	SX13 カマド跡平面図・断面図	133
第162図	SX14 カマド跡平面図・断面図・出土遺物	134
第163図	SX21 カマド跡平面図	135
第164図	SX21 カマド跡平面図・断面図	136
第165図	SX21 カマド跡出土遺物	137
第166図	SX31 カマド跡平面図・断面図	138
第167図	SX35 カマド跡平面図	138
第168図	SX35 カマド跡断面図・出土遺物	139
第169図	SX36 カマド跡平面図	139
第170図	SX36 カマド跡断面図・出土遺物	140
第171図	SX38 カマド跡平面図・断面図	140
第172図	SX8 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	141
第173図	SX9 性格不明遺構平面図・断面図	142
第174図	SX9 性格不明遺構出土遺物 (1)	143
第175図	SX9 性格不明遺構出土遺物 (2)	144
第176図	SX9 性格不明遺構出土遺物 (3)	145
第177図	SX10 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	146
第178図	SX11 性格不明遺構平面図・断面図	147
第179図	SX11 性格不明遺構出土遺物	148
第180図	SX17 性格不明遺構平面図	150
第181図	SX17 性格不明遺構断面図・立面図	151
第182図	SX17 性格不明遺構出土遺物 (1)	152
第183図	SX17 性格不明遺構出土遺物 (2)	153
第184図	SX18 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	154
第185図	SX19 性格不明遺構平面図・断面図	155
第186図	SX19 性格不明遺構出土遺物	156
第187図	SX22 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物 (1)	157
第188図	SX22 性格不明遺構出土遺物 (2)	158
第189図	SX23 性格不明遺構平面図・断面図	158
第190図	SX23 性格不明遺構出土遺物	159
第191図	SX26 性格不明遺構平面図・断面図	159
第192図	SX27 性格不明遺構平面図・断面図	160
第193図	SX28 性格不明遺構平面図	160
第194図	SX28 性格不明遺構断面図・出土遺物	161
第195図	SX34 性格不明遺構平面図	161
第196図	SX34 性格不明遺構断面図	162
第197図	SX37 性格不明遺構平面図・断面図	162
第198図	IV層出土遺物 (1)	163
第199図	IV層出土遺物 (2)	164
第200図	IV層出土遺物 (3)	165
第201図	IV層出土遺物 (4)	166
第202図	IV層出土遺物 (5)	167
第203図	IV層出土遺物 (6)	168
第204図	IV層出土遺物 (7)	169
第205図	IV層出土遺物 (8)	170
第206図	IV層出土遺物 (9)	171
第207図	IV層出土遺物 (10)	172
第208図	IV層出土遺物 (11)	173
第209図	IV層出土遺物 (12)	174
第210図	IV層出土遺物 (13)	175
第211図	IV層出土遺物 (14)	176
第212図	IV層出土遺物 (15)	177
第213図	IV層出土遺物 (16)	178
第214図	IV層出土遺物 (17)	179
第215図	IV層出土遺物 (18)	180
第216図	IV層出土遺物 (19)	181
第217図	III層上面遺構配置図	182
第218図	SKI 土坑平面図・断面図・出土遺物	183
第219図	SK2 土坑平面図・断面図・出土遺物	183
第220図	SK3 土坑平面図・断面図・出土遺物	184
第221図	SK6 土坑平面図・断面図	184
第222図	SK1 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物 (1)	185
第223図	SK1 性格不明遺構出土遺物 (2)	186
第224図	SX7 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	187
第225図	SX12 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物	188
第226図	SX15 性格不明遺構平面図・断面図	188
第227図	石列遺構平面図・断面図	189
第228図	III層出土遺物 (1)	190
第229図	III層出土遺物 (2)	191
第230図	III層出土遺物 (3)	192
第231図	III層出土遺物 (4)	193
第232図	III層出土遺物 (5)	194
第233図	III層出土遺物 (6)	195
第234図	III層出土遺物 (7)	196
第235図	III層出土遺物 (8)	197
第236図	III層出土遺物 (9)	198
第237図	III層出土遺物 (10)	199
第238図	III層出土遺物 (11)	200
第239図	III層出土遺物 (12)	201
第240図	III層出土遺物 (13)	202
第241図	III層出土遺物 (14)	203
第242図	III層出土遺物 (15)	204
第243図	III層出土遺物 (16)	205
第244図	III層出土遺物 (17)	206
第245図	III層出土遺物 (18)	207
第246図	III層出土遺物 (19)	208
第247図	III層出土遺物 (20)	209
第248図	III層出土遺物 (21)	210
第249図	III層出土遺物 (22)	211
第250図	III層出土遺物 (23)	212
第251図	II層出土遺物	213
第252図	川内B遺跡の主要花粉分布図	216
第253図	川内B遺跡の主要珪藻分布図	219
第254図	No.11 (SX21) 試料の状況と構成粒子の顕微鏡写真	219
第255図	川内B遺跡で検出した花粉化石とパリノモルフ	223
第256図	川内B遺跡で検出した珪藻化石	224
第257図	川内B遺跡出土木材の顕微鏡写真 (1)	228
第258図	川内B遺跡出土木材の顕微鏡写真 (2)	229
第259図	川内B遺跡出土木材の顕微鏡写真 (3)	230

第 260 図 川内B遺跡出土木材の顕微鏡写真(4).....	231
第 261 図 川内B遺跡出土種実の顕微鏡写真.....	231
第 262 図 川内B遺跡出土の動物の遺体.....	234
第 263 図 川内B遺跡出土陶器類別産地別割合.....	236
第 264 図 器種・機能別層位毎の陶磁器産地割合.....	239
第 265 図 高台内に文字が見られる焼縁底のある磁器と 漆縁底の漆器.....	240
第 266 図 瓦質土器 火鉢 蚊遣り 火消壺.....	241
第 267 図 焼塗.....	242
第 268 図 各段階の煙管.....	242
第 269 図 川内B遺跡出土の錢貨.....	243
第 270 図 川内B遺跡で出土した漆器椀.....	244
第 271 図 川内B遺跡出土瓦の瓦文様.....	245
第 272 図 版榮式の埋積が見られた範囲.....	247
第 273 図 迂回路部北西部台所跡構造構置図.....	248
第 274 図 各面で提出された柱跡跡跡.....	249
第 275 図 区画建設と思われる遺構の変遷.....	250
第 276 図 川内B遺跡候出遺構時期別変遷模式図.....	252

表 目 次

第 1 表 道跡地名表.....	8
第 2 表 路線部I・II区北壁土層觀察表.....	12
第 3 表 川内B遺跡の分析試料と項目.....	214
第 4 表 川内B遺跡の層分析試料と堆積物特性(重相%)	215
第 5 表 川内B遺跡で検出した花粉化石一覧表.....	217
第 6 表 川内B遺跡の珪藻分析結果一覧表.....	218
第 7 表 川内B遺跡出土大型植物化石一覧表.....	220
第 8 表 川内B遺跡の木製品及び炭化材の樹種.....	226
第 9 表 川内B遺跡出土木製品及び加工材の種類別出土数	227
第 10 表 川内B遺跡出土動物遺体種名表.....	232
第 11 表 動物遺体構別出土遺物數表.....	233
第 12 表 動物遺体觀察表.....	233
第 13 表 川内B遺跡出土遺物数量一覧表.....	235
第 14 表 川内B遺跡出土陶器類別産地別数量一覧表	236
第 15 表 出土陶磁器産地別機能別数量表.....	237
第 16 表 器種・機能・層位別陶磁器集計表.....	238

写 真 目 次

写 真 1 SD1溝路上の岩盤.....	54
写 真 2 迂回路部IV層土層断面.....	246

写 真 図 版 目 次

圖 版 1 路線部I区裏面(1).....	257
圖 版 2 路線部I区裏面(2) 路線部II区裏面(1).....	258
圖 版 3 路線部II区裏面(2).....	259
圖 版 4 路線部II区裏面(3).....	260
圖 版 5 路線部II区裏面(4) 迂回路部裏面(1).....	261
圖 版 6 迂回路部裏面(2).....	262
圖 版 7 迂回路部裏面(3).....	263
圖 版 8 迂回路部裏面(4).....	264
圖 版 9 迂回路部裏面(5).....	265
圖 版 10 迂回路部裏面(6).....	266
圖 版 11 路線部I区VI層(1).....	267
圖 版 12 路線部I区VI層(2).....	268
圖 版 13 路線部I区VI層(3) VI層(1).....	269
圖 版 14 路線部I区VI層(2).....	270
圖 版 15 路線部I区VI層(3).....	271
圖 版 16 路線部I区VI層(4).....	272
圖 版 17 路線部I区VI層(5).....	273
圖 版 18 路線部I区VI層(6).....	274
圖 版 19 路線部I区VI層(7).....	275
圖 版 20 路線部I区VI層(1).....	276
圖 版 21 路線部I区VI層(2).....	277
圖 版 22 路線部I区VI層(3).....	278
圖 版 23 路線部I区VI層(4).....	279
圖 版 24 路線部I区VI層(5).....	280
圖 版 25 路線部I区VI層(1).....	281
圖 版 26 路線部I区VI層(2).....	282
圖 版 27 路線部I区VI層(3).....	283
圖 版 28 路線部I区VI層(4).....	284
圖 版 29 路線部I区IV層(5).....	285
圖 版 30 路線部I区III層(1).....	286
圖 版 31 路線部I区III層(2).....	287
圖 版 32 路線部I区III層(3).....	288
圖 版 33 路線部I区III層(4).....	289
圖 版 34 路線部I区III層(5).....	290
圖 版 35 路線部I区III層(6).....	291
圖 版 36 路線部II区III層(1).....	292
圖 版 37 路線部II区III層(2).....	293
圖 版 38 路線部II区III層(3).....	294
圖 版 39 路線部II区III層(4).....	295
圖 版 40 路線部II区III層(5).....	296
圖 版 41 路線部II区VI層(1).....	297
圖 版 42 路線部II区VI層(2).....	298
圖 版 43 路線部II区VI層(1).....	299
圖 版 44 路線部II区VI層(2).....	300
圖 版 45 路線部II区VI層(3).....	301
圖 版 46 路線部II区VI層(4).....	302
圖 版 47 路線部II区VI層(5).....	303
圖 版 48 路線部II区VI層(1).....	304
圖 版 49 路線部II区VI層(2).....	305
圖 版 50 路線部II区VI層(3).....	306
圖 版 51 路線部II区VI層(4).....	307
圖 版 52 路線部II区VI層(5).....	308
圖 版 53 路線部II区VI層(6).....	309
圖 版 54 路線部II区VI層(7).....	310
圖 版 55 迂回路部VI層(1).....	311
圖 版 56 迂回路部VI層(2).....	312

图 版 57	迂回路部VI层 (3).....	313	图 版 105	迂回路部出土遗物 (7).....	361
图 版 58	迂回路部V层 (1).....	314	图 版 106	迂回路部出土遗物 (8).....	362
图 版 59	迂回路部V层 (2).....	315	图 版 107	迂回路部出土遗物 (9).....	363
图 版 60	迂回路部V层 (3).....	316	图 版 108	迂回路部出土遗物 (10).....	364
图 版 61	迂回路部IV -2 层 (1).....	317	图 版 109	迂回路部出土遗物 (11).....	365
图 版 62	迂回路部IV -2 层 (2).....	318	图 版 110	迂回路部出土遗物 (12).....	366
图 版 63	迂回路部IV -2 层 (3).....	319	图 版 111	迂回路部出土遗物 (13).....	367
图 版 64	迂回路部IV -2 层 (4) IV层 (1).....	320	图 版 112	迂回路部出土遗物 (14).....	368
图 版 65	迂回路部IV层 (2).....	321	图 版 113	迂回路部出土遗物 (15).....	369
图 版 66	迂回路部IV层 (3).....	322	图 版 114	迂回路部出土遗物 (16).....	370
图 版 67	迂回路部IV层 (4).....	323	图 版 115	迂回路部出土遗物 (17).....	371
图 版 68	迂回路部IV层 (5).....	324	图 版 116	迂回路部出土遗物 (18).....	372
图 版 69	迂回路部IV层 (6).....	325	图 版 117	迂回路部出土遗物 (19).....	373
图 版 70	迂回路部IV层 (7).....	326	图 版 118	迂回路部出土遗物 (20).....	374
图 版 71	迂回路部IV层 (8).....	327	图 版 119	迂回路部出土遗物 (21).....	375
图 版 72	迂回路部IV层 (9).....	328	图 版 120	迂回路部出土遗物 (22).....	376
图 版 73	迂回路部IV层 (10).....	329	图 版 121	迂回路部出土遗物 (23).....	377
图 版 74	迂回路部IV层 (11).....	330	图 版 122	迂回路部出土遗物 (24).....	378
图 版 75	迂回路部IV层 (12).....	331	图 版 123	迂回路部出土遗物 (25).....	379
图 版 76	迂回路部IV层 (13).....	332	图 版 124	迂回路部出土遗物 (26).....	380
图 版 77	迂回路部IV层 (14).....	333	图 版 125	迂回路部出土遗物 (27).....	381
图 版 78	迂回路部IV层 (15).....	334	图 版 126	迂回路部出土遗物 (28).....	382
图 版 79	迂回路部IV层 (16).....	335	图 版 127	迂回路部出土遗物 (29).....	383
图 版 80	迂回路部IV层 (17).....	336	图 版 128	迂回路部出土遗物 (30).....	384
图 版 81	迂回路部IV层 (18).....	337	图 版 129	迂回路部出土遗物 (31).....	385
图 版 82	迂回路部IV层 (19).....	338	图 版 130	迂回路部出土遗物 (32).....	386
图 版 83	迂回路部IV层 (20).....	339	图 版 131	迂回路部出土遗物 (33).....	387
图 版 84	迂回路部IV层 (21).....	340	图 版 132	迂回路部出土遗物 (34).....	388
图 版 85	迂回路部IV层 (1).....	341	图 版 133	迂回路部出土遗物 (35).....	389
图 版 86	迂回路部IV层 (2).....	342	图 版 134	迂回路部出土遗物 (36).....	390
图 版 87	路綫部 I 区出土遺物 (1).....	343	图 版 135	迂回路部出土遺物 (37).....	391
图 版 88	路綫部 I 区出土遺物 (2).....	344	图 版 136	迂回路部出土遺物 (38).....	392
图 版 89	路綫部 I 区出土遺物 (3).....	345	图 版 137	迂回路部出土遺物 (39).....	393
图 版 90	路綫部 I 区出土遺物 (4).....	346	图 版 138	迂回路部出土遺物 (40).....	394
图 版 91	路綫部 I 区出土遺物 (5).....	347	图 版 139	迂回路部出土遺物 (41).....	395
图 版 92	路綫部 I 区出土遺物 (6).....	348	图 版 140	迂回路部出土遺物 (42).....	396
图 版 93	路綫部 I 区出土遺物 (7).....	349	图 版 141	迂回路部出土遺物 (43).....	397
图 版 94	路綫部 I 区出土遺物 (8) 路綫部 II 区出土遺物(1) 350		图 版 142	迂回路部出土遺物 (44).....	398
图 版 95	路綫部 II 区出土遺物 (2).....	351	图 版 143	迂回路部出土遺物 (45).....	399
图 版 96	路綫部 II 区出土遺物 (3).....	352	图 版 144	迂回路部出土遺物 (46).....	400
图 版 97	路綫部 II 区出土遺物 (4).....	353	图 版 145	迂回路部出土遺物 (47).....	401
图 版 98	路綫部 II 区出土遺物 (5).....	354	图 版 146	迂回路部出土遺物 (48).....	402
图 版 99	迂回路部出土遺物 (1).....	355	图 版 147	迂回路部出土遺物 (49).....	403
图 版 100	迂回路部出土遺物 (2).....	356	图 版 148	迂回路部出土遺物 (50).....	404
图 版 101	迂回路部出土遺物 (3).....	357	图 版 149	迂回路部出土遺物 (51).....	405
图 版 102	迂回路部出土遺物 (4).....	358	图 版 150	迂回路部出土遺物 (52).....	406
图 版 103	迂回路部出土遺物 (5).....	359	图 版 151	迂回路部出土遺物 (53).....	407
图 版 104	迂回路部出土遺物 (6).....	360			

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯

平成11年5月、仙台市教育委員会と当事業主管局であった仙台市都市整備局との間で、高速鉄道東西線建設事業に伴う遺跡の取り扱いについての第1回目の協議が持たれた。その後、事業主管局は仙台市交通局に移され、平成15年度より仙台市教育委員会との本格的な協議が行われた。その結果、高速鉄道東西線事業計画予定路線内における周知の遺跡及び遺跡範囲外の状況把握のため、先ず確認調査及び試掘調査を実施し、その結果を踏まえて本調査を実施する箇所を決定し、これを基に発掘調査を順次、事業計画に沿いながら進めていくことが両者間で確認された。

以上の協議事項に基づき、平成16年度より確認調査及び試掘調査を開始した。平成16年度の対象地域は、高速鉄道東西線西部の川内地区、青葉山地区、西公園地区で18箇所の調査区を設定し、総面積448m²の調査を実施した。平成17年度の調査対象地域は仙台城跡及びその周辺地区、川内A遺跡隣接地区、西公園地区で、22箇所の調査区を設定し、総面積421m²の調査を実施した。そのうち扇坂トンネル下段部（この試掘調査での便宜的区割りのB区）は、平成16年8月24日から8月27日の間、6箇所（180m²）の試掘調査が行われ、その翌年、平成17年8月22日から9月2日の間、3箇所（72m²）の試掘調査が実施された。その結果、近世の遺構面が確認されたことから、仙台市教育委員会はこの部分を「川内B遺跡」として新規に遺跡登録し、仙台市交通局と協議を行った。その結果平成20年度に本調査を実施することとなり、平成19年8月に確認調査を行ったうえで、平成20年7月1日より本調査を開始した。

第2節 調査要項

調査要項

遺跡名称：川内B遺跡（宮城県遺跡登録番号01565）

所 在 地：仙台市青葉区川内41・43地内

調査原因：仙台市高速鉄道東西線路線建設工事に伴う
埋蔵文化財の事前調査

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：文化財課調査係主査 原河英二

文化財課調査係文化財教諭 志賀雄一

調査組織：国際文化財株式会社

主任調査員 土 任隆

調査員 守谷健吾

調査補助員 朝日向忠久

調査面積：2390m²

調査期間：平成20年7月1日～

平成21年2月27日

報告書作成要項

調査主体：仙台市教育委員会

調査担当：文化財課調査係主査 原河英二（平成21年度）

文化財課調査指導係主査 主濱光朗（平成22年度）

文化財課調査指導係専門員 結城慎一（平成22年度）

調査組織：国際文化財株式会社

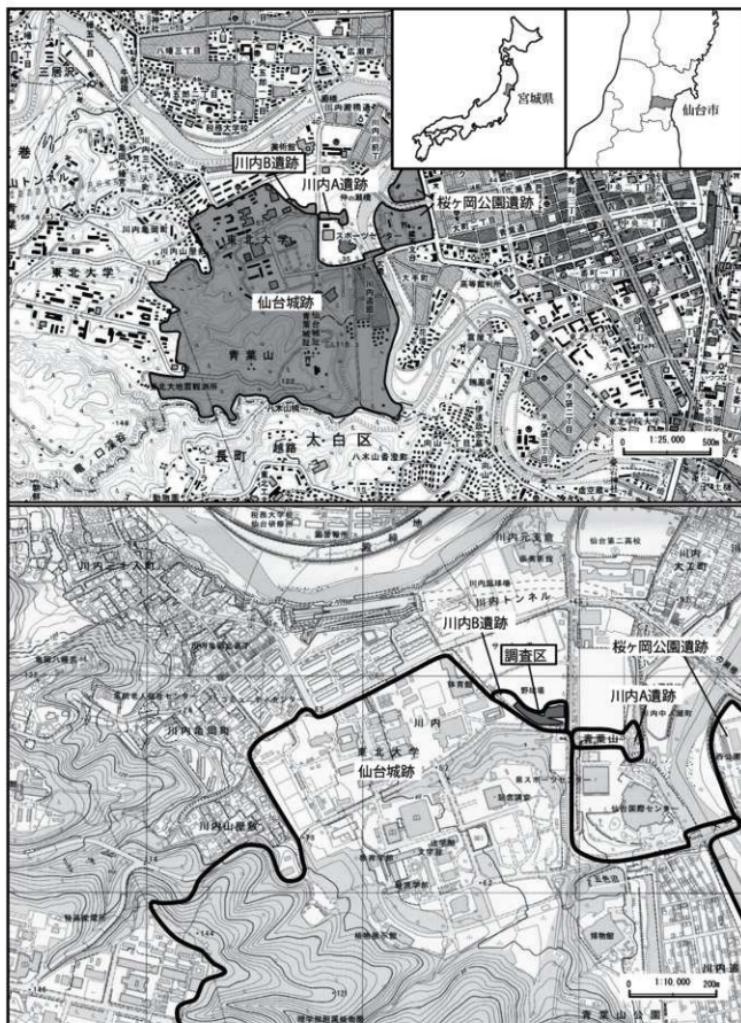
主任調査員 土 任隆

調査補助員 武田芳雅

作成期間：平成21年4月1日～平成22年3月23日

平成22年5月1日～平成23年3月11日

第2節 調査要項



第1図 遺跡位置図

第3節 調査概要

1 現地調査

現地調査は、平成16年から19年にかけて行われた試掘調査の結果を受けて、平成20年7月1日から平成21年2月17日までの期間で実施した。調査は、路線部I区、迂回路部、路線部II区の順に着手し、調査日数は160日、調査面積は2,390m²である。

平成20年7月1日、前年度の試掘調査区域の一部を掘削して遺構検出面の高さを確認した後、重機による路線部I区の表土除去を開始した。現地表であるグラウンドの盛土の下に、レンガ片や金属・コンクリートガラ等を大量に含む進駐米軍総司令部(GHQ)による盛土層が厚く堆積し、掘削深度は遺構検出面まで2mを超えた。GHQ盛土層の下に日本陸軍第二師団当時の地表面である砂利層が確認され、その砂利層を取り除いたところで、人力掘削を開始し近世の盛土層を検出した。路線部I区・路線部II区のほぼ中央を、GHQが設置したコンクリート製の暗渠が継続していることが判明したが、暗渠内部に設置されている配管にアスベストによる被覆がなされており、撤去するには、アスベストの飛散の危険性が想定されたため、これらの撤去を行わずに、飛散防止の為の養生を行い、安全を確保したうえで調査を実施することとした。

路線部I区は、西側及び南側において第二師団による削平を受けているものの、中央から東側では近世の盛土層が遺存しており、近世から近代の時期の柵列と思われる柱跡や溝跡、池跡と思われる遺構等が検出された。路線部I区の調査と平行して、9月23日から10月22日まで迂回路部の表土掘削除去をおこない、引き続き人力掘削による調査を開始した。迂回路部は、仮設道路の建設に伴う調査という位置づけであったため、調査は、仮設道路建設に伴い破壊される深度(迂回路部西側(W5グリッド列以西)標高:43.909m 中央(W6-7グリッド列)標高:42.614m 東側(W5グリッド列以東)標高:42.115m)までを対象とすることとした。

迂回路部は、第二師団による削平の影響が少なく、近世末期の建物跡の一部が良好に遺存しており、複数の竪造構や礎石、屋敷境を示すものと思われる溝跡等が検出された。10月23日、路線部I区西側の調査終了とともに路線部II区の表土掘削除去を開始した。以後、迂回路部と平行して路線部II区の調査を行い、調査区西側で柱穴列や井戸跡、東側で屋敷境の溝と考えられる遺構等が検出された。

平成21年1月7日に路線部I区の一部と路線部II区の調査を終了し、翌月の2月17日に迂回路部の調査を終了した。引き続き埋め戻し作業を行い、平成21年2月27日に現場撤収を完了した。

2 整理作業

整理作業及び報告書作成作業は、平成21年4月から2ヵ年にわたって実施した。平成21年度は出土遺物の1次・2次整理及び遺構図面の編集・調整を行い、22年度に版組して報告書の作成を実施した。

出土遺物は内法54.5 × 33.6 × 15cmの平箱に250箱程である。大部分を近世～近代の陶磁器が占め、その他に瓦、土師質土器、瓦質土器等や漆器椀・杭・柱根等の木製品等が見られる。また少量であるが、縄文土器の破片等も見られる。出土遺物は水洗い・注記した後、取り上げ番号毎に内容を確認し、遺物台帳に記載した。陶磁器・土師質土器・瓦質土器・瓦等は、器種・器形・文様等により分類し、接合を行った。接合した後さらに產地別に分類し、取り上げ番号毎に、それぞれの破片数をカウントした。また、產地・時期が判別でき、遺構や土層の性格が判断できるもの等について抽出し、実測・写真撮影に耐えられるよう破損箇所に樹脂を充填して補強・復元を行った。金属製品等は付着している泥土や鏽を落とし、陶磁器類と同様に分類・カウント・抽出を実施した。木製品は、洗浄後水漬けして保存し、器種、形状等で分類し、加工痕が見られるものについて抽出した。

抽出遺物については、それぞれ、種別ごとに登録し、実測・デジタルトレイスによる遺物図作成及び写真撮影を行い、遺物観察表を作成した。また、遺構についても現場で計測・作成された遺構図面を確認し、検出面・堆積土・出土遺物等を確認して、その帰属年代・性格を検討し、遺構図の作成を行った。

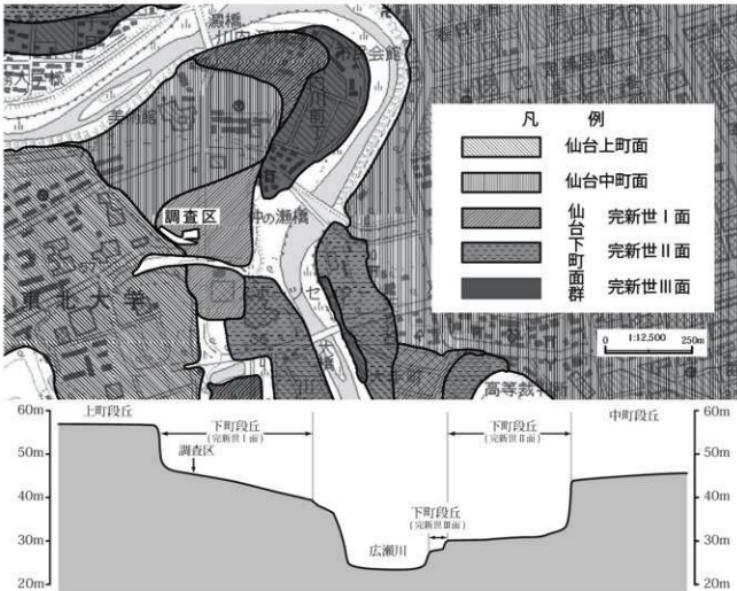
第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

川内B遺跡は、仙台市青葉区川内地内に所在する。周辺は仙台市西側に広がる青葉山と広瀬川に挟まれ、広瀬川が形成した河岸段丘・仙台下町面群完新世Ⅰ面上に位置する。現状は東北大大学川内キャンパスのグラウンドで、標高44.9～47.0mである。

広瀬川が形成した河岸段丘は、上位より青葉山面群・台ノ原面・仙台上町面・仙台中町面・仙台下町面群（完新世Ⅰ面）・仙台下町面群（完新世Ⅱ面）・仙台下町面群（完新世Ⅲ面）の7面に区分される。各段丘面の形成時期は、それぞれ、台ノ原面：約10万年前、仙台上町面：約2.6万年前、仙台中町面：約1.6万年前、仙台下町面（完新世Ⅰ面）：9500～9100年前、仙台下町面（完新世Ⅱ面）：約2010年前とされている。また、仙台下町面（完新世Ⅲ面）の形成時期については完新世Ⅱ面の形成から近世期の間に形成されたものと考えられる（松本・熊谷2010）。

川内B遺跡の位置する仙台下町面（完新世Ⅰ面）は、広瀬川がおおきく蛇行する右岸の縁辺に広がっている。調査区のすぐ西側は、仙台上町面との境をなす段丘崖にあたり、現在は高さ10mあまりの石垣が北西から南東方向に延びている。この石垣は陸軍第二師団が築いたものとされており、石垣の上には東北大大学川内キャンパスの建物が連なっている。調査区の南側では、段丘崖の縁辺が、仙台城二の丸に沿って広瀬川へ流下する千貫沢へ



第2図 河岸段丘分布図（松本・熊谷2010の図を一部改変して使用した）

と落ち込む。また、調査区南側は仙台中町面が北東方向へ延びている。そのため、調査区付近は、東方向への緩やかな傾斜と、千貫沢への傾斜、仙台上町段丘や仙台中町段丘からの傾斜等が重なり、複雑な様相を呈する地形となっている。

調査区の東側は緩やかな斜面地が広がり、約300mで広瀬川に至る。

第2節 歴史的環境

川内B遺跡は「仙台城跡」の北側に隣接し、「武家屋敷」として登録されており、仙台城本丸跡から北へ800m、二の丸跡から南東に370mの標高44.9～47.0mの河岸段丘に位置する。周囲には仙台城・伊達家に係わる近世の遺跡が点在し、川内B遺跡の東側には同じく武家屋敷跡である川内A遺跡が、広瀬川の対岸には桜ヶ岡公園遺跡が所在する。

周辺の中世以前の遺跡は、広瀬川右岸の青葉山丘陵上に点在しており、青葉山B遺跡や同E遺跡など旧石器から縄文時代、弥生時代～奈良・平安時代の遺物包含地や遺物散布地が見られ、古墳時代末期には、青葉山丘陵の中腹に横穴墓群が点在する。中世の遺跡としては板碑群や、14世紀頃に名取郡を支配し、後に伊達氏に臣従した栗野氏の居城であった茂ヶ崎城が大年寺山に位置する。

近世にはいって、仙台藩初代藩主伊達政宗によって仙台城が築かれ、一帯は仙台藩の中心となった。仙台城は、廃城となっていた国分氏の旧城「千代城」を利用して築かれた。慶長5年（1600）12月伊達政宗は仙台城の繩張始を行い、翌、慶長6年（1601）1月には普請が開始された。仙台城の普請が開始された同日、政宗は、城下の屋敷割りを行い、城下建設に着手した。同年4月に政宗は、それまでの居城であった岩出山城から仙台城へ居を移しており、岩出山城下の土民には、翌年の慶長7年（1602）2月1日から5月5日までに仙台に移るよう命令したとされ、家臣團・町方・寺方・農民等数万人規模の移住が行われたものと見られる（仙台市史編さん委員会2002）。

寛永15年（1638）二代藩主伊達忠宗により、それまで伊達宗泰の屋敷があったとされる場所に、二の丸の築造を開始し、数年で完成しており、以後、本丸に代わって二の丸は、藩の政務のほとんどが執り行われ、政府として機能とともに、藩主の居館ともなる。その後四代藩主伊達綱村によって拡張され、また、幾度かの災害や火災を被るが、その都度再建され、幕末まで仙台の中枢として機能していた。

明治2年（1869）版籍奉還を受けて、二の丸には勤政庁が置かれ、明治4年（1871）7月の廢藩置県により仙台城は明治政府兵部省の管轄下に移り、同年8月には東北鎮台が仙台城二の丸に置かれた。また、明治15年（1882）9月7日の大火で二の丸建物群のほとんどを焼失した。明治21年（1888）には陸軍第二師団と改められ、その頃には川内地区のほとんどの区域に軍関係の施設がおかれていた。

川内B遺跡が位置する仙台城二の丸北側の区域は、仙台城築城と同時期に武家屋敷地として建設されたものと考えられる。現存する絵図で見ると、正保2・3年（1645・1646）の「奥州仙台城絵図」（第3図-1）では、侍屋敷と記されており、17世紀中葉には一帯は武家屋敷地が広がっていたものと考えられる。

近隣では、東北大が1995年に今回調査区の東側（BK4地点）を、また、西側に位置する川内A遺跡を仙台市教育委員会が2005年に調査を行っている。BK4地点では縄文時代～古代の遺物と、17～19世紀の柱列跡や建物跡、溝跡、池跡等が遺物とともに検出され、屋敷地の範囲を推定している（東北大埋蔵文化財調査センター2000）。川内A遺跡も17～19世紀の遺構と遺物が検出されている（仙台市教育委員会2007）。

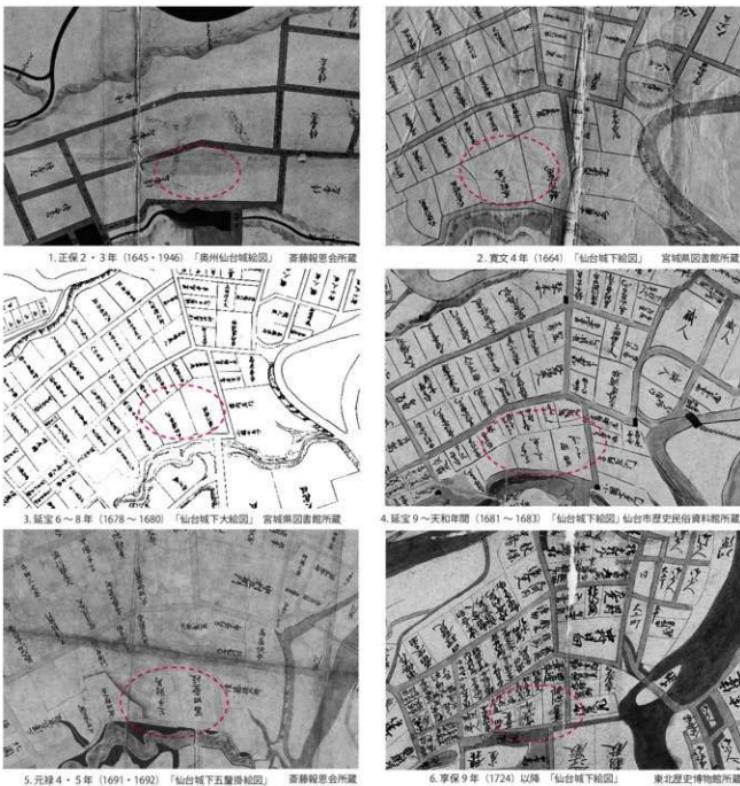
今回の調査区は、絵図では、大手門前から北へ延びる通りの西側で、千貫沢の北側にあたる付近と推定されるが、寛文4年（1664）及び寛文8・9年（1668・1669）の仙台城下絵図（第3図-2・3）では双方とも屋敷割と居住者名が記されており、調査区推定範囲に木村久馬・鶴田次右衛門の名前が見られる。木村久馬は扶持高83貫321文・

第2節 歴史的環境

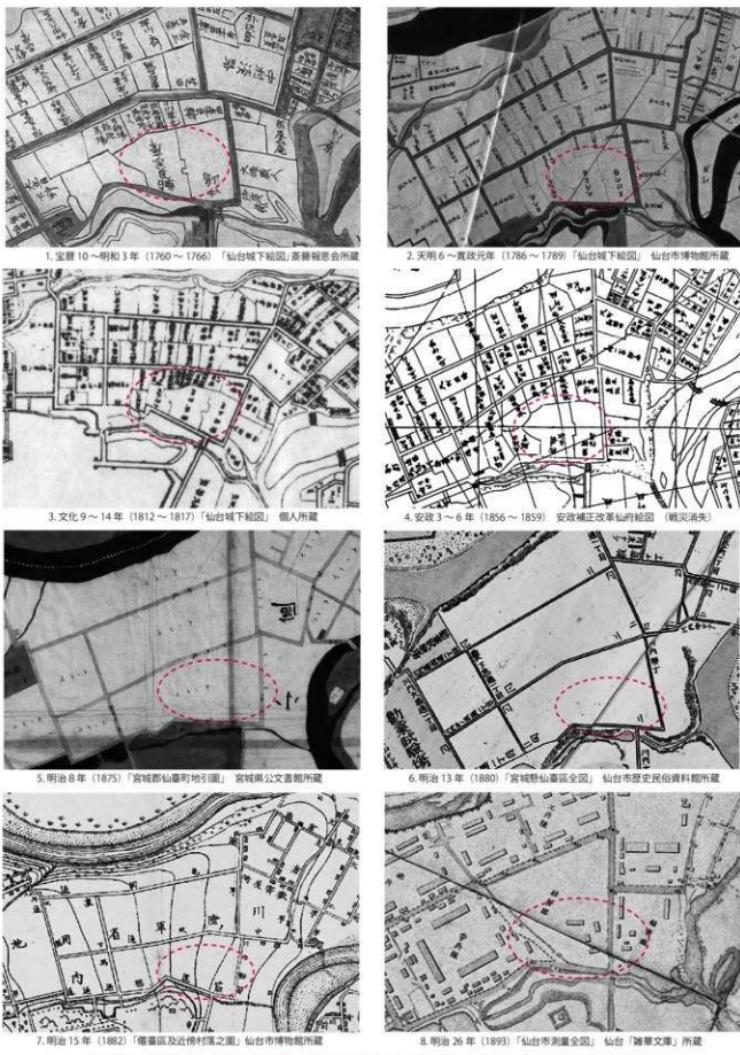
家格召出、鶴田次右衛門は扶持高 70 貢 658 文・家格虎の間（坂田 1995）といずれも仙台藩の比較的上級の家臣である。以降当該地区は、江戸時代を通じて仙台藩の上級武士が住まう武家屋敷として利用されたものと考えられる（第3図-4～6、第4図-1～4）。

明治 8 年（1875）「宮城郡仙臺町地図」（第4図-5）から明治 15 年（1882）「櫻臺區及近傍村落之圖」（第4図-7）では屋敷塁などの描画は無いが、それ以前の絵図と街区筋に変化は見られない。明治 26 年（1893）「仙台市測量全國」（第4図-8）では、周辺の街区形が大幅に変わってほぼ現在の街区線と同様になり、この頃一帯で大掛かりな工事が行われたことが読み取れる。

以降第二次大戦終了まで、陸軍第二師団の川内倉庫として使用されており、戦後は GHQ が駐留し、昭和 32 年（1957）に返還され、東北大大学川内キャンパスとなり現在に至っている。



第3図 絵図（①が調査区推定範囲）（阿刀田 1936、高倉ほか 1994、2005）



第4図 絵図（2）地図（（-----）が調査区推定範囲）（阿刀田 1936・高倉ほか 1994・2005）

第2節 歴史的環境



第5図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	時代	所在地	性格	
1	川内B道路	縄文・近世	青葉区川内	武家屋敷	
2	仙台城跡	中世・近世	青葉区川内・荒巣	城跡	
3	川内A遺跡	縄文・近世	青葉区青葉山2丁目	武家屋敷・散布地	
4	桜ヶ岡公園遺跡	縄文・近世	青葉区桜ヶ岡公園	武家屋敷・散布地	
5	絆ヶ峯伊達家廬所	近世	青葉区御影下	廬所	
6	大年寺跡	近世	太白区茂ヶ崎1丁目	廬所	
7	長徳寺地碑	中世	青葉区向山2丁目	板碑	
8	川内古墳群	中世	青葉区川内・荒巣	板碑	
9	片平船形大神宮の板碑	中世	青葉区片平1丁目	板碑	
10	銘不動尊文永十年板碑	中世	青葉区広瀬町	板碑	
11	茂ヶ崎城跡	中世	太白区茂ヶ崎1丁目他	城跡	
12	青山二丁目遺跡	奈良・平安	太白区青山2丁目	散布地	
13	茂ヶ崎横穴墓群	古墳	太白区二ツ沢	横穴墓	
14	二ツ沢横穴墓群	古墳	太白区二ツ沢	横穴墓	
15	愛宕山横穴墓群A地点	古墳	太白区向山4丁目他	横穴墓	
16	愛宕山横穴墓群B・C地点	古墳	奈良	太白区向山4丁目他	横穴墓
17	大年寺山横穴墓群	古墳		太白区向山4丁目	横穴墓
18	八木山山町遺跡	弥生・奈良・平安	太白区八木山山町	散布地	
19	萩ヶ丘遺跡	平安		太白区萩ヶ丘1丁目	散布地
20	十種遺跡	縄文		青葉区土浦1丁目	散布地
21	山山高畠遺跡	縄文中期		太白区八木山山町	散布地
22	青葉山山遺跡	縄文早・中・晩		青葉区荒巣字青葉	包含地
23	青葉山山遺跡	縄文早・中		青葉区荒巣字青葉	包含地
24	桜ヶ丘遺跡	縄文		太白区八木山山町1丁目	散布地
25	二ツ沢遺跡	縄文		太白区八木山山町2丁目	散布地
26	萩ヶ丘B遺跡	縄文		太白区萩ヶ丘1・長瀬	散布地
27	青山二丁目B遺跡	旧石器・縄文		太白区青山2丁目	散布地
28	杉手土手	近世		太白区茂ヶ崎3丁目他	礫防け土手

第1表 遺跡地名表

第3章 調査方法

第1節 調査方法

1 現地調査

掘削作業は、現地表である東北大学のグラウンド盛土とその下にある第二次大戦以降の盛土層（Ⅰ層）及び第二師団による盛土層及び整地層（Ⅱ層）を重機で除去し、以下は人力掘削にて調査を実施した。調査は作業工程上3地区に分けられ、それぞれの調査区を、当初部・拡張部・迂回路部と呼称した。

計測作業は、日本測地系座標に基づいて設置された基準点から、今回の調査に使用可能な位置に新点を設置し、グリッドの設定及び、遺構の計測・遺物出土地点の計測を行った。使用機材はトータルステーション：TOPCON社 GPT7000、電子平板：福井コンピュータ社ブルートレンドVを使用し、必要に応じてクラボウ社製の三次元写真計測システム：KuravesGを使用して図面の作成を実施した。

写真撮影は、作業開始前、遺構検出状況、土層断面、遺物出土状況、遺構完掘状況、全景写真を35mm一眼レフカメラを使用して、カラーリバーサル及びモノクロの2種類のフィルムで撮影した。また、補助として500万画素以上のデジタルカメラで、調査写真と同一カットのほか、作業状況等を撮影し、日々変化する遺跡の状況を記録した。また、調査区の全景撮影は、遺構検出状況及び完掘状況を20mの高所作業車を使用して行った。

出土遺物は、調査区毎に1番から取り上げ番号を付し、遺物カードに調査区・出土地点（グリッド・遺構No.）・層位・内容・出土年月日等の情報を記載した。

2 整理作業

整理作業では出土遺物は水洗し十分乾燥させた後、遺物カードの内容を注記し、接合を行った。注記の内容は、遺跡番号（01565）- 調査次数（1）- 調査区略号（ト：当初部 カ：拡張部 ウ：迂回路部）- 出土地点（遺構名）- 取り上げ番号の順に記載した。破片の接合にはセメダインC及びバラロイドB72を使用した。接合作業後、遺物の器種、産地等を分類しながら破片数を数え、出土遺構や土層の性格を判断できる主要遺物を抽出し、遺物の登録を実施した。欠損部の充填・復元が必要なものは、エレホン・モビニール・マーライト混合の樹脂を用いた。遺物写真は1000万画素級のデジタル一眼レフカメラを用いて、正面、見込み、高台内文様等必要に応じて数方向からの撮影を実施した。遺物実測は、外形及び断面を從来手法で実測し、デジタルトレースする際に、並行してオルソイメージヤー（完全正射影・深焦点撮影システム）を使用して得られた文様等を画像処理して重ね合わせ、遺物図を作成した。遺物のデジタルトレース及び編集にはAdobe社の「Illustrator」を、画像処理には同社の「Photoshop」を使用した。遺構平面図・断面図は、現場で計測・描画した図面データをAdobe社「Illustrator」で編集・調整を行い作成した。また、報告書の編集作業にはAdobe社「InDesign」を使用した。

3 調査区名称について

調査区の名称は、現地での調査の際は、当初部・拡張部・迂回路部と呼称したが、当初部・拡張部については、報告書作成段階で以下の呼称に改めた。

当初部 → 路線部Ⅰ区 拡張部 → 路線部Ⅱ区

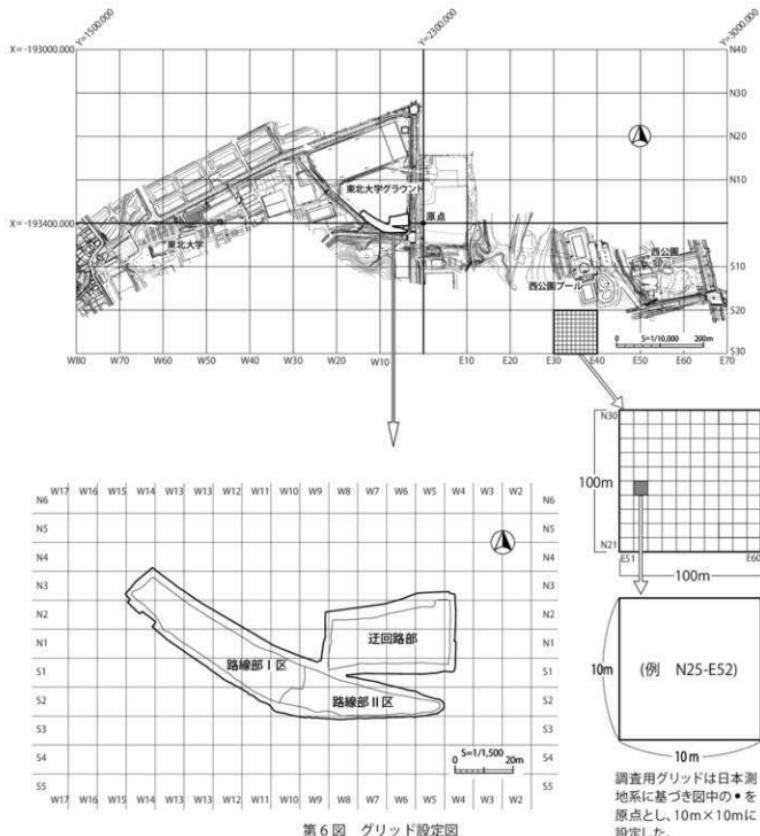
4 遺構名称について

遺構番号は調査区毎・遺構種別毎に、検出順に1番から通し番号を付した。遺構の種類を表す略号は凡例に示したとおりである。

第2節 調査区グリッドの設定

第2節 調査区グリッドの設定

高速鉄道東西線計画路線に係わる青葉山地区、川内地区、西公園地区の全域を網羅するグリッドが既に設定されており、今回の調査でもそのグリッドに準拠して調査を実施した。日本測地系：X=-193400 m, Y=2300 mの座標点を原点として、10m単位の方眼を設定し、東西南北それぞれの方向へ E1・W2・S3・N4 というように方位記号と番号を付した。そのうえで S-N 方向の番号と E-W 方向の番号を組み合わせ、N1-W6といったようなグリッド名とした。調査時、特に遺物の出土位置については、さらに 4 分割して左上から時計回りに a・b・c・d として、N1-W6a グリッド等と呼称し、この小グリッド毎に遺物を取り上げた。



第6図 グリッド設定図

調査用グリッドは日本測地系に基づき図中の●を原点とし、10m×10mに設定した。

第4章 基本層序

基本層序は、路線部Ⅰ区・路線部Ⅱ区・迂回路部の3調査区共通で、表土から自然堆積層までを7層に大別したうえで、各調査区毎にそれぞれの土層を細分した。Ⅰ層は現代に、Ⅱ層は近代に帰属する。Ⅱ層より下で検出された近世～近代初頭の盛土層・整地層を4層に分けⅢ層・Ⅳ層・Ⅴ層・Ⅵ層とし、その下の自然堆積層をⅦ層とした。

Ⅰ層は第二次大戦後の盛土層であり、陸軍第二師団の瓦礫を埋め立て、その上に整地してGHQが施設を建てていた1c層、GHQが撤収後東北大學が盛土・整地した1a・1b層に細別される。なお、Ⅰ層については、路線部Ⅰ区北壁で細別したが、路線部Ⅱ区・迂回路部では、崩落防止のため壁面をブルーシートで覆っていたため、分層は行わなかった。

Ⅱ層は、明治以降、第二師団が切り土や削平、盛土して整地し、川内倉庫として利用されていた時期の土層で、4層に細別される。当時の地表面で小礫が堆積するⅡa層、その下層の整地層で砂質シルト層であるⅡb層と、盛土層でいぶい黄褐色砂質シルトを主体とするⅡc層、幕末明治期のⅢ層上面に大規模に盛土したⅡd層の4層に細分される。Ⅱa・Ⅱb層は調査区全域で見ることができ、調査区全域でわずかに傾斜しながら東側へ広がっている。Ⅱc層・Ⅱd層は路線部Ⅰ区中央以東で確認された。特にⅡd層は迂回路部東側で厚く、南東方向へ傾斜しながら堆積しているのが観察された。

Ⅲ層～Ⅵ層の4層は近世の盛土層である。近世の盛土層については、屋敷境の溝と考えられる溝跡、迂回路部SD3・SD4及び路線部Ⅱ区SD1を中心に、その他の遺構の検出面と土層の関係を基に4層に大別し、路線部Ⅰ区・Ⅱ区の土層との連続性を確認して基本層序を設定した（第7図）。

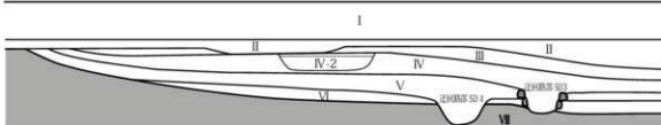
Ⅲ層は黒褐色砂質シルトを中心として、黒褐色の繊細砂や中粒砂、オリーブ黒色砂質シルト等の土層に細分され、土層中に円礫を大量に含む。路線部Ⅰ区東側・路線部Ⅱ区北側・迂回路部東側で確認され、北西側では、第二師団の造成工事等により削平されており、確認されなかった。土層中より18世紀後半～19世紀代の陶磁器や、土師質土器、瓦質土器等の破片が大量に出土した。迂回路部東側で南東方向へ傾斜する。

Ⅳ層は路線部Ⅰ区南西部を除いてほぼ全面で堆積が確認された。土層が不安定しておらず、黒褐色、黄褐色、暗灰黄色等様々な色の比較的小規模な土層が重なり合い、多量の礫が含まれるもので、比較的短時間の間に盛土されたものと考えられる。迂回路部SD3を埋めており、上面では多くの遺構が検出された。出土遺物は18世紀中葉～後葉を下限としており、Ⅳ層は18世紀後葉に盛り上されたものと考えられる。また、迂回路部北西側及び南側で、部分的に版築状の水平堆積が見られた。このうち、迂回路部北西側で、遺構が検出された版築状の土層の下層をIV-2層とした。

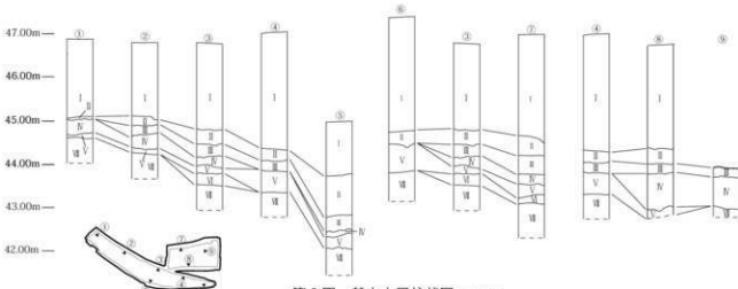
Ⅴ層は路線部Ⅰ区南西部を除いてほぼ全面で堆積が確認された。黒褐色砂質シルトを主体とし、Ⅳ層に比して安定している。迂回路部SD4を埋めており、上面は迂回路部SD3が機能していた当時の面と理解される。また、比較的水分を多く含み、Ⅴ層以下で柱根や杭等の木製品が多く出土した。

Ⅵ層は路線部Ⅰ区東側、路線部Ⅱ区北西部及び迂回路部の一部で確認された。黒褐色砂質シルトを主体とする。上面は迂回路部SD4が機能していた当時の面と考えられる。

Ⅶ層は自然堆積層である。疊層・砂質シルト・中粒砂を主体とした3層に細分される。路線部Ⅰ区・路線部Ⅱ区で確認された。迂回路部では掘削深度の制限があり、一部で確認されたのみである。Ⅶ層上面は、概ね西から東へ傾斜し、調査区東端でさらに一段下がる。また、北東方向へも緩やかに落ち込み、迂回路部北壁付近で再び上がっている。Ⅶ層が堆積する以前は、浅い谷地形を呈していた可能性が考えられる。



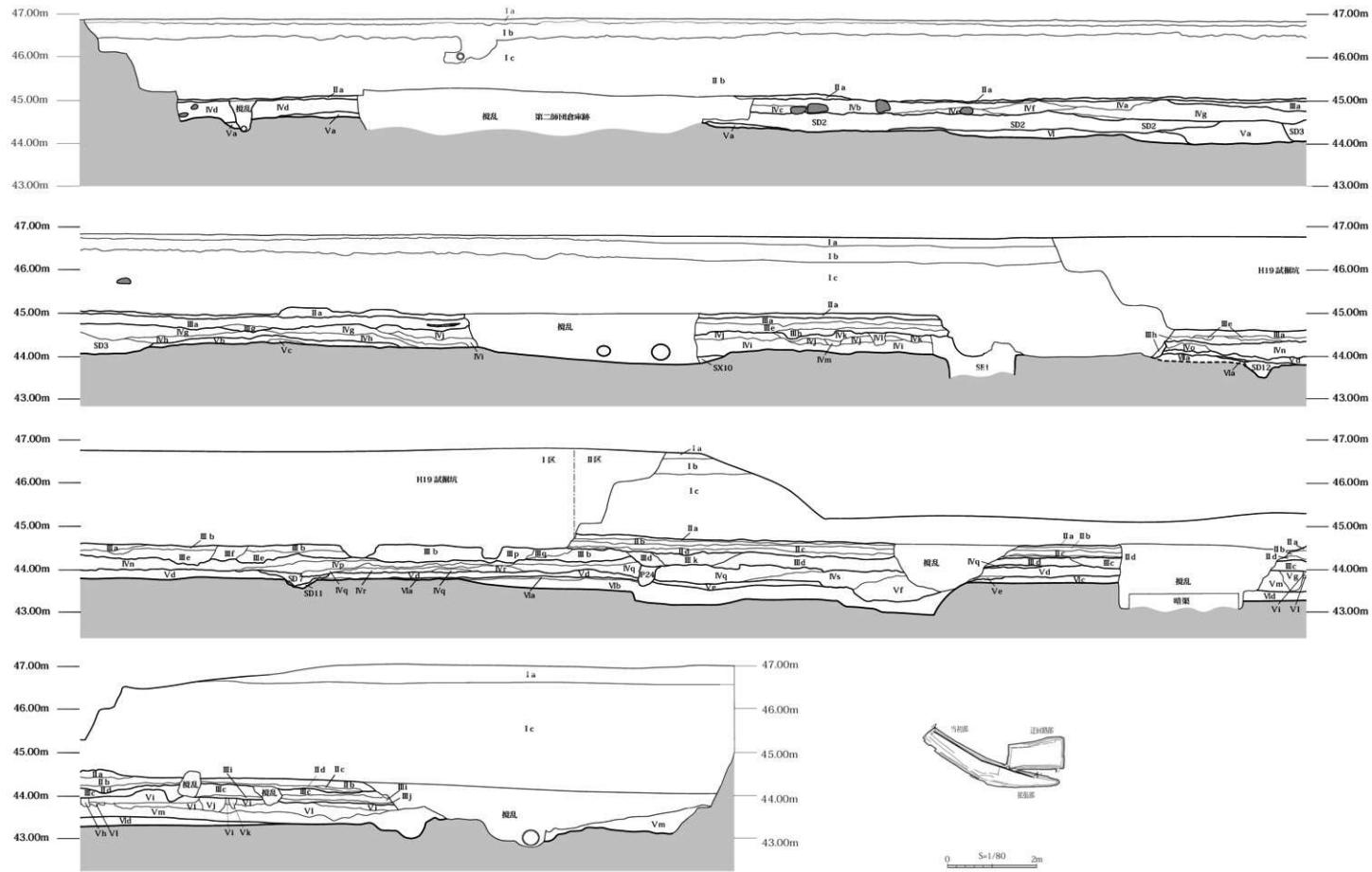
第7図 基本層序概念図



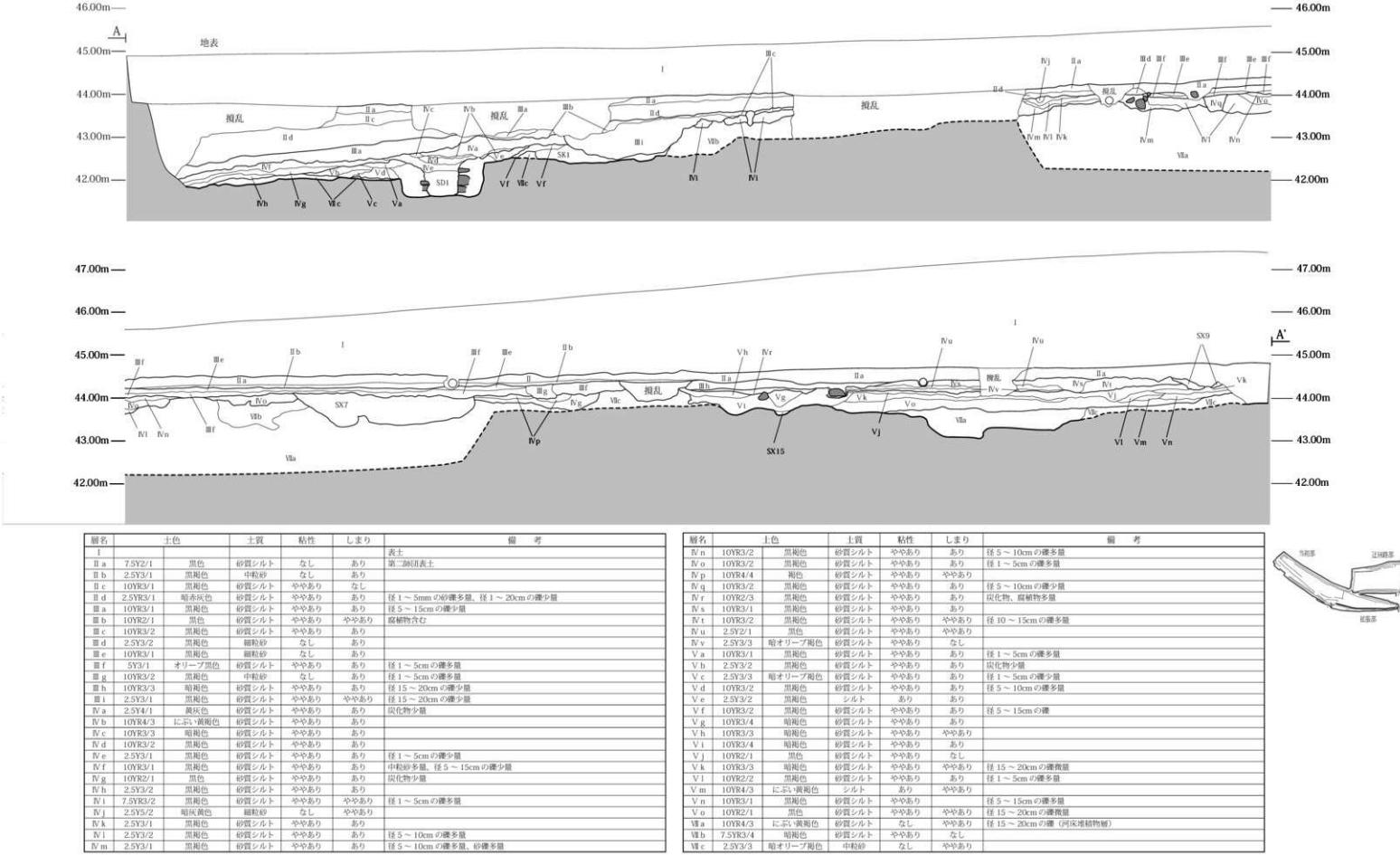
第8図 基本土層柱状図 5-1:100

番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
I a	2.5SY5/2	暗灰褐色	中粒砂	なし	グラウンド砂
I b	2.5Y4/1	黄灰色	中粒砂	なし	グラウンド砂、粗粒砂
I c	2.5Y4/1	黄灰色	砂質シルト	ややあり	あり
II a	5V3/1	オリーブー黒色	砂質シルト	ややあり	あり
II b	5V2/1	黒色	砂質シルト	あり	地化物少量
II c	10W4/3	灰ふく黄色	砂質シルト	あり	あり
II d	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~15cmの円礫多量
III a	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	径5~20cmの円礫多量
III b	7.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~15cmの円礫多量
III c	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
III d	10W4/1	褐灰色	砂質シルト	ややあり	径2~10cmの円礫少量
III e	7.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	砂礫少量
III f	10W5/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり	径5~20cmの円礫多量
III g	5V3/2	オリーブー黒色	砂質シルト	ややあり	あり
III h	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	径2~5cmの円礫少量
III i	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~20cmの円礫多量
III j	2.5Y2/1	黒色	砂質シルト	あり	あり
III k	2.5Y4/3	オリーブー褐色	砂質シルト	あり	砂礫少量
IV a	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
IV b	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
IV c	2.5Y3/2	暗オリーブー褐色	砂質シルト	ややあり	あり
IV d	5V3/1	オリーブー黒色	砂質シルト	ややあり	シルトと径1~5cmの砂礫層の互層
IV e	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
IV f	2.5Y3/1	黒褐色	中粒砂	なし	径5~20cmの円礫少量
IV g	10W4/2	灰黄褐色	細粒砂	なし	あり
IV h	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	径5~20cmの円礫多量
IV i	5Y2/2	オリーブー黒色	砂質シルト	ややあり	あり
IV j	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~20cmの円礫多量
IV k	2.5Y4/3	オリーブー褐色	砂質シルト	ややあり	あり
IV l	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	径2~5cmの円礫少量
IV m	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂質シルト	ややあり	あり
IV n	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	径1~5cmの砂礫少量
IV o	10W2/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
IV p	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~20cmの円礫多量
IV q	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂質シルト	ややあり	あり
IV r	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	径2~10cmの砂礫少量
IV s	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
V a	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	2.5Y4/3 オリーブー褐色砂質シルトとの互層 砂礫多量
V b	5V3/2	オリーブー黒色	砂質シルト	ややあり	あり
V c	5V4/2	暗オリーブー色	砂質シルト	ややあり	径5~20cmの円礫少量
V d	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
V e	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
V f	10W2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	細粒砂少量
V g	2.5Y4/3	オリーブー褐色	砂質シルト	あり	あり
V h	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
V i	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
V j	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	なし
V k	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	なし
V l	10W2/1	黒色	砂質シルト	あり	腐植物多量
V m	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
V n	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
V b	10W3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
V c	10W2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	径5~10mmの10YR4/4 褐色砂質シルトブロック少量
V d	10W4/3	灰ふく黄色	砂質シルト	あり	あり
V e	5V5/2	暗オリーブー色	砂質シルト	なし	腐植物多量

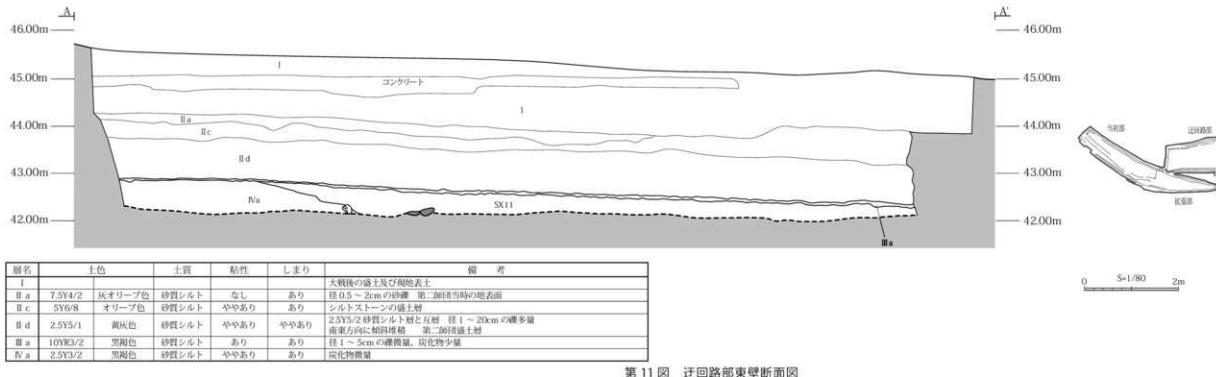
第2表 路線部 I・II 区壁土層観察表



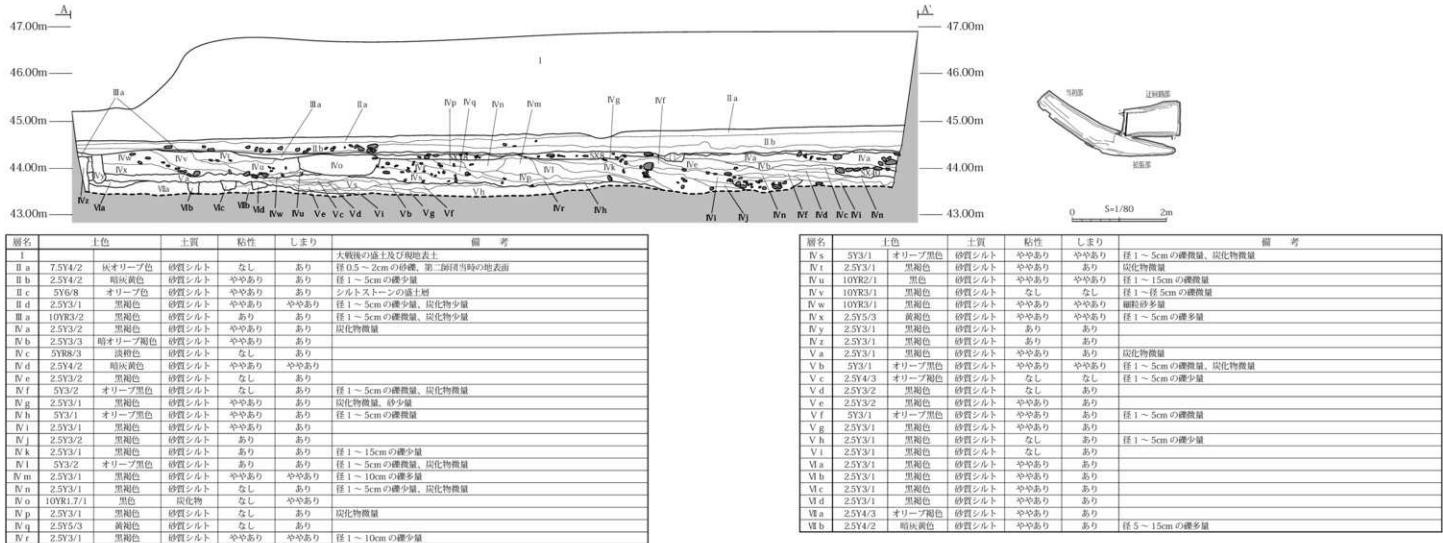
第9図 路線部Ⅰ・Ⅱ区北壁断面図



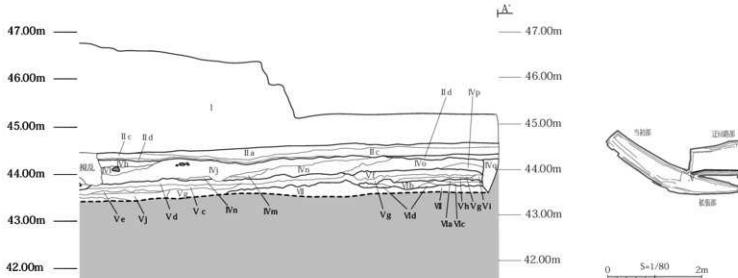
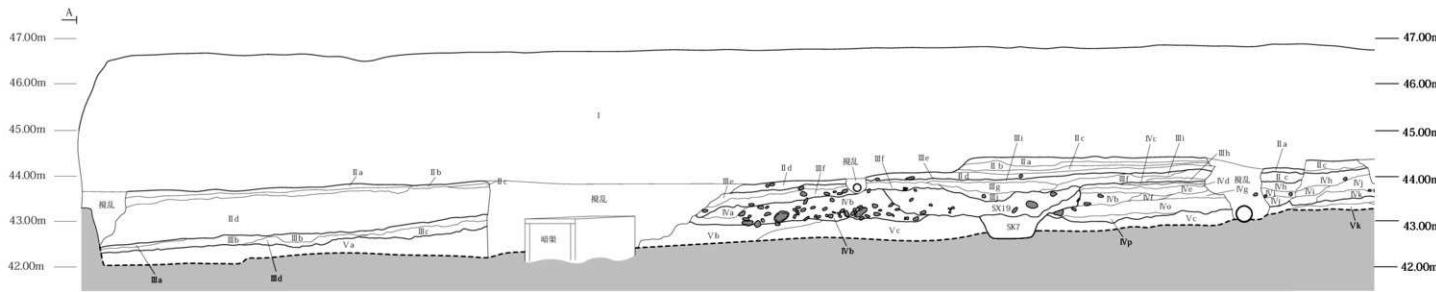
第10図 路線部II区南壁断面図



第11図 遷回路部東壁断面図

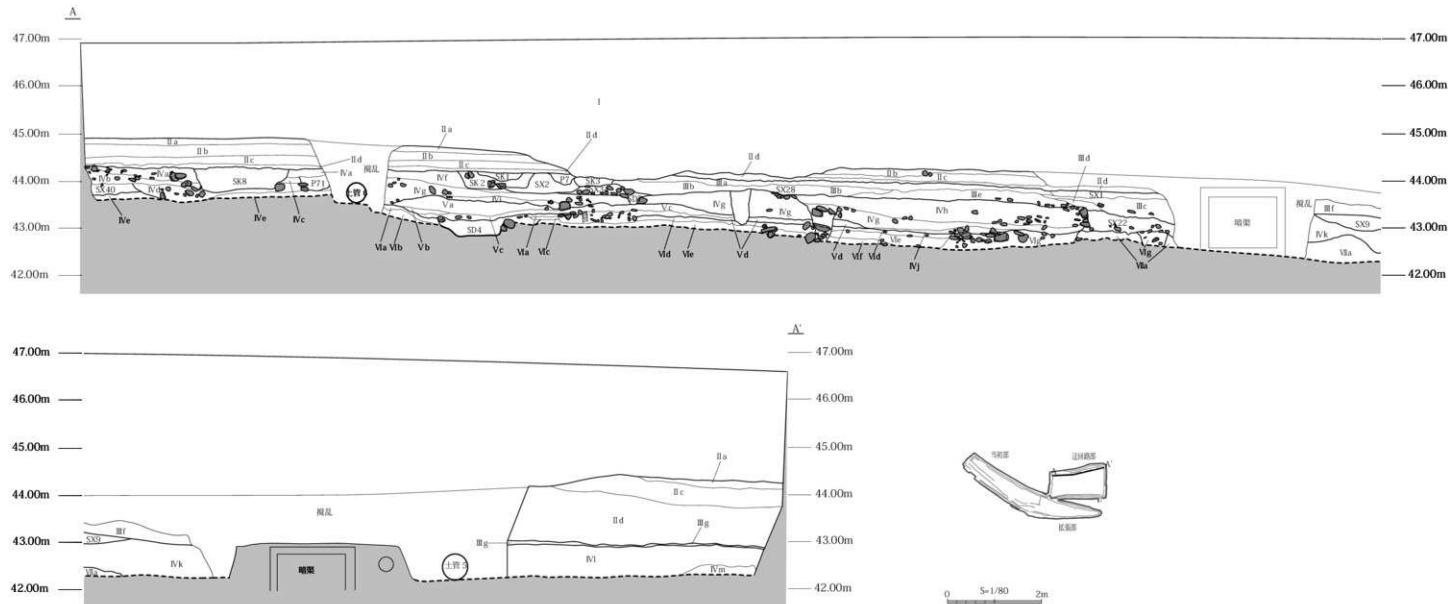


第12図 遷回路部西壁断面図



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
I					大戦後の盛土及び現地表土
II a	10YRA/2 2.5YR/1	灰褐色 砂質シルト	ややあり あり	あり	柱径1~5cmの疊多量、炭化物少量
II b	2.5YR/1 3.5YR/3	褐色 シルト質粘土	ややあり なし	あり	柱径1~5cmの疊多量、炭化物少量
III a	3.5YR/0 3.5YR/3	褐色 砂質シルト	なし	なし	柱径1~15cmの疊多量、炭化物少量
II d	10YRA/3 3.5YR/3	灰褐色 砂質シルト	ややあり なし	あり	柱径1~20cmの疊多量、炭化物少量
III b	2.5YR/1	黄褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~5cmの疊多量、炭化物少量
III c	2.5YR/1	黄褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊多量、炭化物少量
III d	10YRA/1	褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊多量、炭化物少量
III e	10YRA/1	褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~5cmの疊少量、炭化物少量
III f	10YRA/4 3.5YR/3	褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊多量、炭化物少量
III g	10YRA/2 3.5YR/3	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~5cmの疊少量、炭化物少量
III h	10YRA/2	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~5cmの疊多量、炭化物少量
III i	10YRA/2 3.5YR/3	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊多量、炭化物少量
III j	10YRA/3 3.5YR/3	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~5cmの疊多量、炭化物少量
IV a	10YRA/2 2.5YR/3	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径5~15cmの疊薄層
IV b	10YRA/6 2.5YR/3	褐黃褐色 砂質シルト	ややあり あり	あり	柱径1~20cmの疊多量、炭化物少量
IV c	2.5YR/3 3.5YR/3	褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~5cmの疊薄層
IV d	3.5YR/3	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊薄層、炭化物少量
IV e	10YRA/4 3.5YR/3	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~5cmの疊薄層
IV f	10YRA/5 2.5YR/2	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊薄層、炭化物少量
IV g	10YRA/4 3.5YR/3	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊少量、炭化物少量
IV h	10YRA/3 1.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊少量、炭化物少量
IV i	10YRA/3 2.5YR/2	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊少量、炭化物少量
IV j	10YRA/5 2.5YR/3	黃褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~20cmの疊多量
IV k	10YRA/3 2.5YR/2	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~5cmの疊薄層、炭化物少量
IV l	10YRA/3 2.5YR/3	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊薄層、炭化物少量
IV m	10YRA/4 2.5YR/3	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊多量、炭化物少量
IV n	10YRA/2 2.5YR/2	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~20cmの疊少量、炭化物少量
IV o	10YRA/2 2.5YR/2	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊少量、炭化物少量
IV p	10YRA/2 2.5YR/2	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊多量
IV q	2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~15cmの疊多量
V a	2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~20cmの疊多量、炭化物少量
V b	10YRA/2 2.5YR/2	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	柱径1~20cmの疊多量、炭化物少量
V c	10YRA/2 2.5YR/2	灰褐色 砂質シルト	あり	あり	炭化物少量
V d	2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	炭化物少量
V e	10YRA/3 2.5YR/2	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	炭化物少量
V f	2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	炭化物少量
V g	2.5YR/2	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	10YRA/3にぶく黄褐色砂質シルトブロック少量 炭化物少量
V h	2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	10YRA/3にぶく黄褐色砂質シルトブロック少量 炭化物少量
V i	2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	ややあり	あり	炭化物少量
V j	2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	炭化物少量
V k	2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	炭化物少量
V l	10YRA/3 2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	炭化物少量
V m	2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	炭化物少量
V n	2.5YR/1	黒褐色 砂質シルト	あり	あり	炭化物少量
V o	2.5YR/1	オリーブ褐色 砂質シルト	ややあり	あり	炭化物少量

第13図 回路部南壁断面図



層名	上色	土質	粘性	しまり	備考
I					大戦後の盛土及び現地表土
II a	7.5V4/2	灰オリーブ	砂礫	なし	あり
	2.5V4/2	暗灰黄色	砂質シルト	ややあり	あり 径0.3~2cmの砂礫、第二防護堤時の地表面
II c	1.0V4/3	にじみ黄褐色	砂質シルト	あり	あり 径1~5cmの礫多量、炭化物少量
II d	1.0V3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径1~20cmの礫多量
III a	1.0V3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	あり 炭化物少量
III b	1.0V3/2	にじみ黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~5cmの礫多量、炭化物少量
III c	1.0V4/1	暗灰黄色	砂質シルト	あり	あり 径1~5cmの礫多量、炭化物少量
III d	1.0V3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径1~5cmの礫多量、炭化物少量
III e	1.0V3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~5cmの礫多量、炭化物少量
III f	2.5V3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径1~5cmの礫多量、炭化物少量
III g	1.0V3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径1~5cmの礫多量、炭化物少量
IV a	2.5V3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径5~15cmの礫多量、炭化物微量
IV b	2.5V3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり 炭化物微量
IV c	1.0V4/3	にじみ黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~15cmの礫多量、炭化物少量
IV d	1.0V3/3	にじみ黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~20cmの礫多量
N e	1.0V2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径1~15cmの礫多量、炭化物少量
N f	1.0V3/4	にじみ黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~20cmの礫多量
N g	1.0V4/3	にじみ黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~15cmの礫多量

層名	上色	土質	粘性	しまり	備考
層名	上色	土質	粘性	しまり	備考
IV h	10YR4/2	にじみ黄褐色	砂質シルト	あり	あり 径1~15cmの礫多量、炭化物少量
IV i	10YR4/3	にじみ黄褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり 径1~20cmの礫多量、炭化物少量
IV j	10YR4/3	にじみ黄褐色	砂質シルト	ややあり	あり
IV k	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり 炭化物微量
IV l	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 炭化物微量
IV m	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径1~15cmの礫多量、炭化物微量、植物遺体少量
V a	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径1~5cmの礫多量、木質微量
V b	10YR3/2	暗褐色	砂質シルト	あり	あり 径1~5cmの礫多量
V c	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径5~15cmの礫多量
V d	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり あり 径1~15cmの礫多量、炭化物少量
Vl a	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 炭化物微量
Vl b	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 炭化物微量
Vl c	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	ややあり ややあり あり 径5~15cmの礫微量
Vl d	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径5~15cmの礫微量
Vl e	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
Vl f	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
Vl g	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 径10~30cmの礫多量
Vl h	10YR7/2	にじみ黄褐色	砂質シルト	あり	あり

第14図 迂回路部北壁断面図

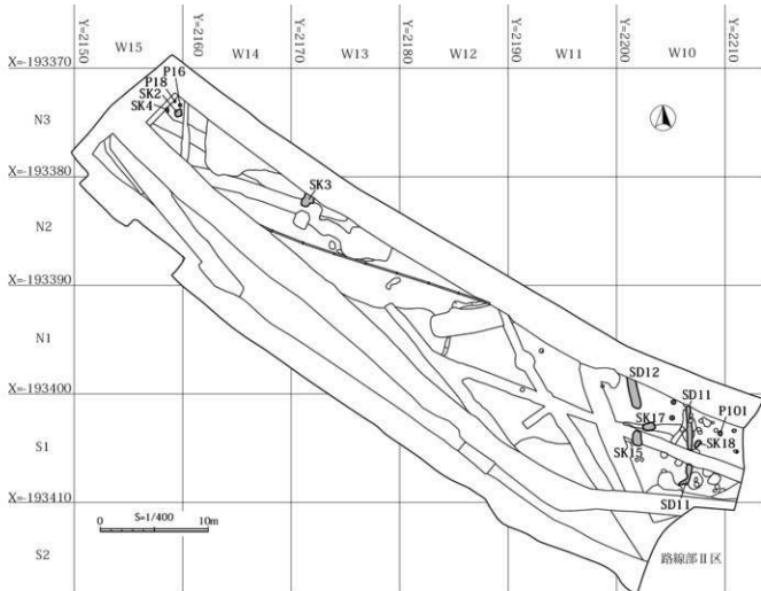
第5章 検出遺構と遺物

第1節 路線部Ⅰ区

1 VII層上面検出遺構

第4章調査区基本層序において述べたように、川内B遺跡では、Ⅲ層～VI層までが近世の盛土層及び整地層である。VII層は自然堆積層で、VI層とVII層の間に、近世以前の人为的な堆積層は確認できなかった。当調査区の盛土される前のVII層上面の地形は、全体的に南西から北東方向へ傾斜しており、調査区中央では東側へ舌状に伸びる地形が見られる。VII層は砂質シルト及び旧河床堆積物と思われる疊層と中粒砂である。

VII層上面で検出された遺構は、溝跡2条、土坑6基、柱穴3基である。



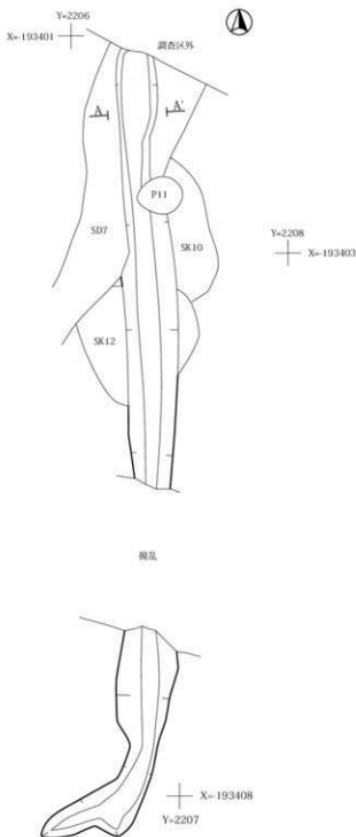
第15図 VII層上面遺構配置図

第1節 路線部Ⅰ区

(1) 溝跡

1) SD11溝跡（第16図、図版11-2）

S1-W11 グリッドに位置し、南北に走る素掘りの溝状を呈する遺構である。北端は調査区外へ延びる。中央南寄りを近代の擾乱によって削平され、北側では上層の遺構 SD7、SK10、SK12、P11 と重複関係にあり、SD11 がいずれの遺構よりも古い。確認した規模は、長さ 7.68m、上端幅 34～50cm、下端幅 10～26cm、深さ最大 12cm を測る。平面形は、主軸方向 N-1°-W、南端で N-58°-E に屈曲する J 字形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層である。底面はやや凹凸があるが概ね平坦で、壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は逆台形である。底面のレベルは両端と中央がほとんど変わらず、傾斜方向は不明である。遺物は出土していない。

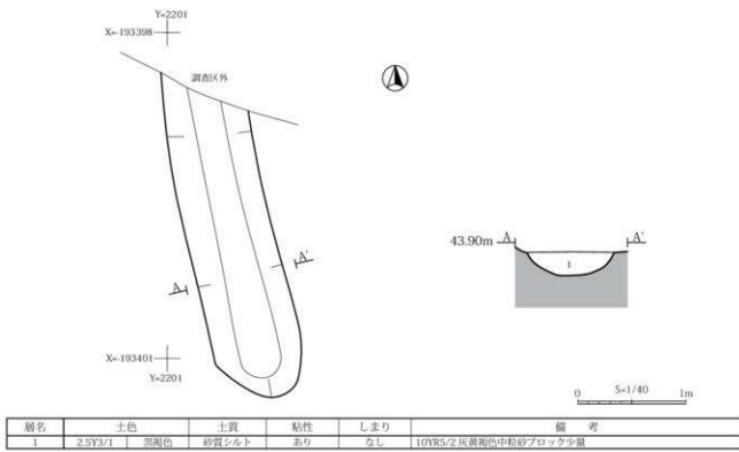


層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
I	IOYK2/3 黒褐色	砂質シルト	あり	少々あり ほ約 2cm の礫少量	ロームブロック少量

第16図 SD11溝跡平面図・断面図

2) SD12溝跡（第17図、図版11-3）

N1-W10～S1-W10グリッドに位置する、素振りの溝跡である。北端は調査区外へ延び、南端は自然に収束する。確認した規模は、長さ2.8m、上端幅78～83cm、下端幅28～38cm、深さ最大22cmを測る。平面形は主軸方向N-13°-Wを示す直線状である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、VII層由来の灰黄褐色砂質シルトブロックを含む。底面はなだらかで、緩やかに起伏しながら北へわずかに傾斜する。壁面は内湾しながら立ち上がり、断面形は皿形を呈する。遺物は出土していない。



第17図 SD12溝跡平面図・断面図

(2) 土坑

1) SK2土坑（第18図、図版12-1・2）

N2-W15グリッドに位置する。規模は、長辺67cm、短辺59cm、深さ10cmを測る。平面形は方形で、断面形は、底部が平坦な皿状である。堆積土は褐色砂質シルトを主体とし、VII層由来のオリーブ灰色や、にい黄褐色の砂質シルトブロックを少量含む。遺物は出土していない。

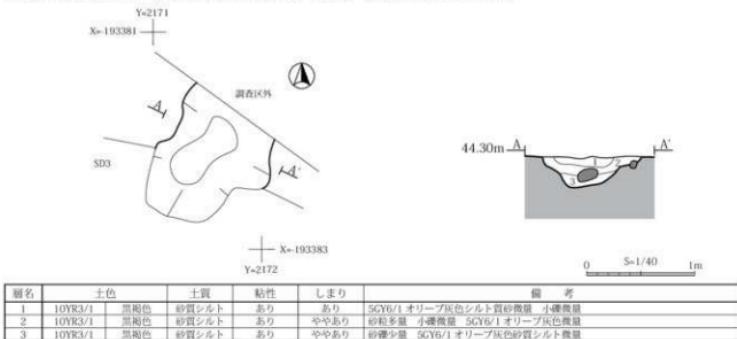


第18図 SK2土坑平面図・断面図

第1節 路線部Ⅰ区

2) SK3 土坑 (第19図、図版12-3・4)

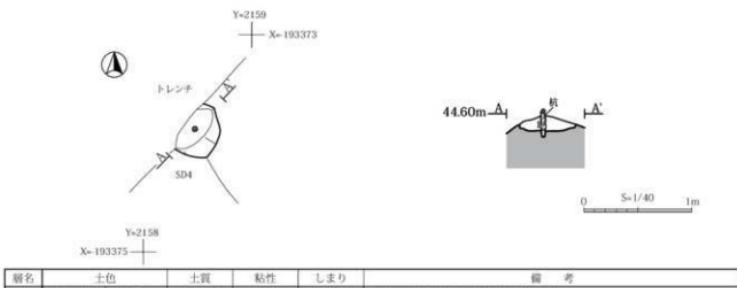
N2-W13 グリッドに位置する。SD3 と重複し SD3 より古い。南側は削平され、北端は調査区外へ広がる。確認した規模は、長軸 1.11m、短軸 98cm、深さ 28cm を測る。平面形は不整形であり、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とし、3 層に分けられる。遺物は出土していない。



第19図 SK3 土坑平面図・断面図

3) SK4 土坑 (第20図、図版12-5・6)

N3-W15 グリッドに位置する。西侧をサブトレンチ掘削の際に欠損し、平面形は判然としない。確認した規模は、長軸 54cm、短軸 34cm、深さ 14cm を測る。断面形は底が平坦な皿形である。堆積土は褐灰色砂質シルトを主体とし、中央付近で杭が直立して検出された。杭は残存長約 25.7cm であるが、表面の損傷が激しく、加工痕等確認できなかつたため図示しなかった。



第20図 SK4 土坑平面図・断面図

4) SK15 土坑 (第21図、図版12-7・8)

S1-W10 グリッドに位置する。遺構上端の大半を近代の擾乱により削平されている。規模は、長軸 1.45m、短軸 81cm、深さ 20cm を測る。平面形は主軸方向 N-8°-W を示す梢円形である。

堆積土は黒褐色砂質シルトの単層である。底面は中央がわずかに隆起するがほぼ平坦で、壁面は急角度で立ち上がり、断面形は逆台形である。遺物は出土していない。



第21図 SK15 土坑平面図・断面図

5) SK17 土坑 (第22図、図版13-1・2)

S1-W10 グリッドに位置する。規模は、長軸 1.12m、短軸 66cm、深さ 38cm を測る。平面形は、主軸方向 N-82°-E を示す梢円形である。堆積土は黒色シルトを主体とし、2 層に分けられる。底面は中央がくぼみ、壁面は外反しながら立ち上がり、断面形は逆台形である。遺物は出土していない。



第22図 SK17 土坑平面図・断面図

6) SK18 土坑 (第23図、図版13-3・4)

S1-W10 グリッドに位置する。規模は、長軸 77cm、短軸 42cm、深さ 15cm を測る。平面形は主軸方向 N-40°-E を示す梢円形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層である。底面はほぼ平坦で中央がわずかに窪む。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。遺物は出土していない。

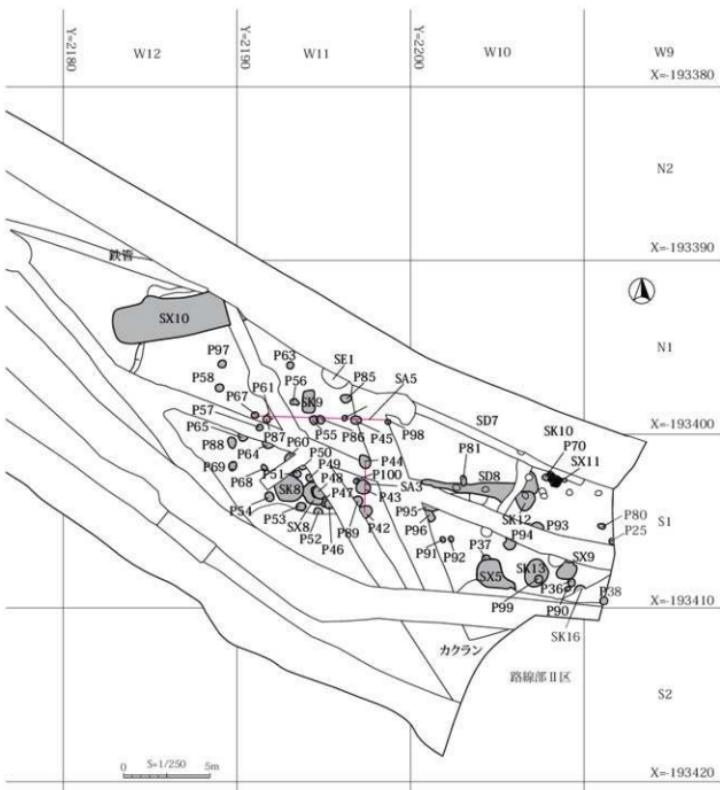


第23図 SK18 土坑平面図・断面図

第1節 路線部Ⅰ区

2 VI層上面検出遺構

VI層は路線部Ⅰ区では調査区東寄りで検出される。VII層上面がW12 グリッド列あたりから東へ向かって傾斜しており、VI層はN1-W10～S1-W10 グリッド及びS1-W9 グリッドで検出されている。土質はシルトで礫を多量に含む。VI層上面では多数の遺構を検出しており、その内訳は、柱列跡2条、溝跡1条、土坑6基、性格不明遺構5基、柱列跡に含まれない柱穴が42基である。なお、N1-W11～S1-W11 グリッド周辺では、VI層は検出されておらず、VII層上面で遺構を検出したが、他のVI層上面検出遺構と同様な堆積土である遺構については、同じ生活面のものと理解し、VI層上面検出遺構として本項で記述することとする。

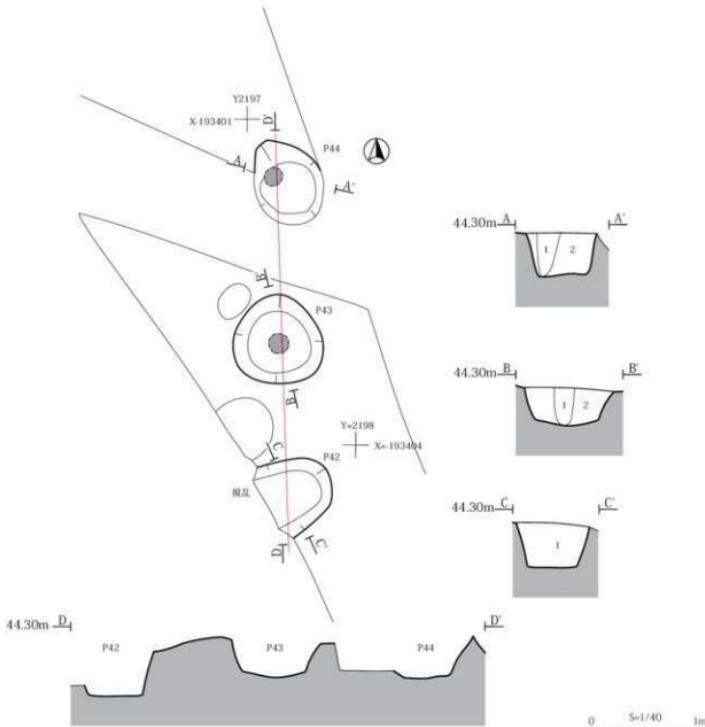


第24図 VI層上面遺構配置図

(1) 柱列跡

1) SA3 柱列跡(第25図、図版13-5~8)

S1-W11 グリッドに位置する、南北方向に並ぶ柱列跡である。P42・P43・P44 の3基の柱穴で構成され、両端は搅乱により確認できない。確認した規模は、長さ2.3m、柱間寸法は南から1.16m(3尺8寸)、1.12m(3尺7寸)を測り、主軸方向はN-0.7°-Eを示す。各柱穴は長径78~83cmの楕円形であり、それぞれ径10cm程の柱痕が確認された。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色粘土質シルトで、灰黄褐色ロームブロック等を含む。遺物は出土していない。



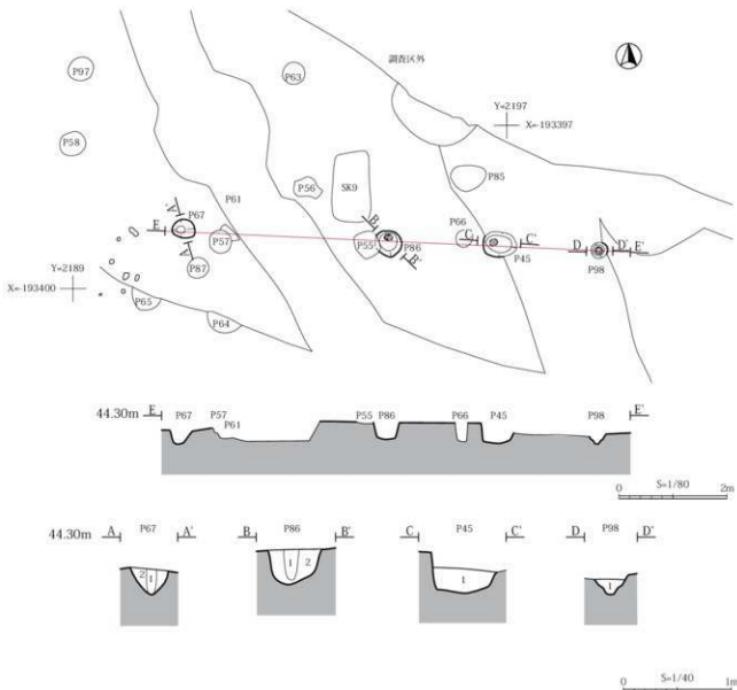
遺構名	列名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P42	1	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	径1~5mmの10YR4/2灰黄褐色ロームブロック多量
P43	1	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり	径1~5mmの10YR4/2灰黄褐色ロームブロック多量
P44	1	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり	径1~5mmの10YR4/2灰黄褐色ロームブロック多量 径約10cmの擦少量
	2	10YR3/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	径3mm以下の褐色多量 下部に径10~15cmの1個多量

第25図 SA3 柱列跡平面図・断面図

第1節 路線部Ⅰ区

2) SA5 柱列跡 (第26図、図版14-1~14-8)

N1-W11・W12グリッドに位置する。東西方向に並ぶP67・P86・P45・P98の4基の柱穴で構成される柱列跡である。P67とP86の間を擾乱により欠損しているが、4間以上の柱列跡であろうと考えられる。確認した規模は、長さ7.75m、柱間寸法は凡そ1.93m(6尺3寸)を測る。各柱穴の規模は、長軸32~62cm、短軸31~48cm、深さ36~56cmを測り、平面形はそれぞれ、円形ないし楕円形を、断面形は、U字形または逆台形である。主軸方向はN-87°Wを示し、SA3とほぼ直交する。各柱穴には径10~14cm程の柱痕が確認された。堆積土は黒色または黒褐色のシルトを主体とし、径約5cmの小礫を多く含む。遺物は出土していない。



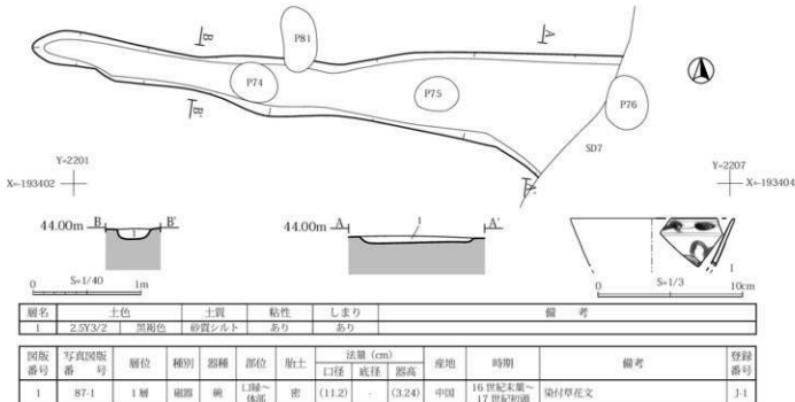
遺構名	剖面名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P67	1	10YR2/1	黑色	粘土質シルト	あり	なし
	2	10YR2/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	径5~6cmの礫少量、径3mm以下の砂礫多量
P86	1	10YR3/1	黒褐色	粘土質シルト	あり	なし
	2	7.5YR2/1	黑色	シルト	あり	径約5cmの礫多量、径3mm以下の砂礫多量
P45	1	7.5YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	径約3cmの礫多量、径1~3mmの砂質少量
P98	1	5Y2/1	黑色	砂質シルト	あり	径3cmのシルトストーンブロック少量 径2~5cmの礫少量、5Y6/3オリーブ色砂質シルト微量

第26図 SA5 柱列跡平面図・断面図

(2) 溝跡

1) SD8 溝跡（第27図、図版15-1～4）

S1-W10 グリッドに位置する。東西に走る溝跡で、東端で上層のSD7と、また、中心線に沿って、上層のSA4の柱穴と重複し、SD8がいずれの遺構よりも古い。確認した規模は、長さ 5.1m、上端幅 0.3～1.1m、下端幅 24～96cm、深さ最大 10cm を測る。平面形は主軸方向 N-83°W を示す直線状で、東へ向かって次第に幅を広げ、断面形は皿形である。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とし、礫を少量含む。遺物は堆積土中より 16世紀末葉～17世紀初頭の中国産の磁器の破片が 1点出土したので図示した。

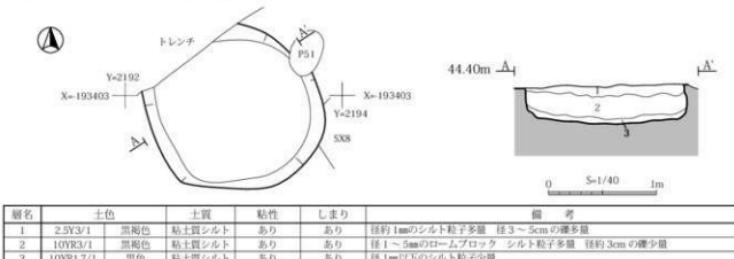


第27図 SD8 溝跡平面図・断面図・出土遺物

(3) 土坑

1) SK8 土坑（第28図、図版16-1・2）

S1-W11 グリッドに位置しており、北西側を土層観察用トレンチにより欠損する。また北東側でP51と、東側でSX8と重複し、P51より古く、SX8より新しい。確認した規模は、長軸 1.7m、短軸 1.52m、深さ 37cm を測る。平面形は円形で、断面形は方形である。堆積土は黒色及び黒褐色粘土質シルトで 3 層に分けられる。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は出土していない。

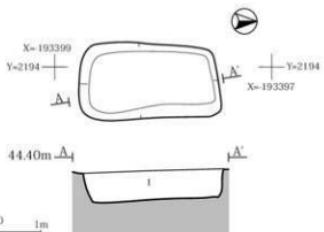


第28図 SK8 土坑平面図・断面図

第1節 路線部Ⅰ区

2) SK9 土坑 (第29図、図版16-3)

N1-W11 グリッドに位置する。規模は、長軸 1.28m、短軸 72cm、深さ 31cm を測る。平面形は、主軸方向 N2°-W を示す開丸長方形である。堆積土は黒褐色粘土質シルトの単層である。底面は平坦で、壁面はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は逆台形である。遺物は出土していない。

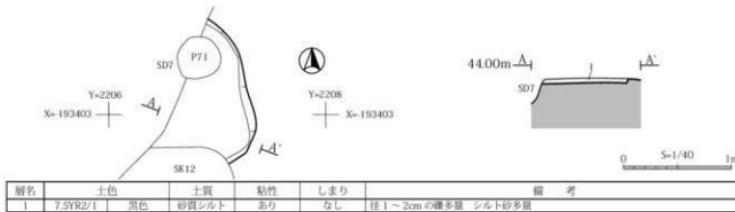


層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1 7.SYR2/2	黒褐色	粘土質シルト	あり	あり 延約 1mm のシルト粒子多量 従 0.5 ~ 1cm のシルトストーン微量	

第29図 SK9 土坑平面図・断面図

3) SK10 土坑 (第30図、図版16-4・6)

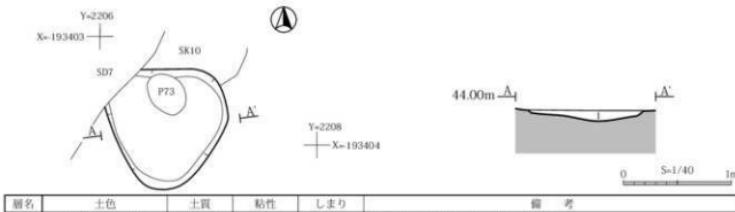
S1-W10 グリッドに位置する。西側で SD7 と P71、南側で SK12 と重複し、SK10 がいずれの遺構よりも古く、削平されている為、全体の形状は判然としない。確認した規模は、長さ 1.35m、幅 98cm、深さ 6cm を測る。底面は平坦で、断面形は皿形である。堆積土は黑色砂質シルトで、小礫が多量に含まれる。遺物は出土していない。



第30図 SK10 土坑平面図・断面図

4) SK12 土坑 (第31図、図版16-5・6)

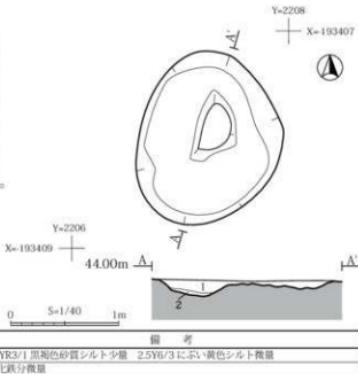
S1-W10 グリッドに位置する。西側で SD7、北側で P73、SK10 と重複し、SD7、P73 より古く、SK10 より新しい。確認した規模は、長軸 1.14m、短軸 1.11m、深さ 10cm を測る。平面形は開丸の三角形である。堆積土は黒色砂質シルトで、小礫を多く含む。底面はほぼ平坦で、中央が緩やかに落ち込み、断面形は皿形である。遺物は出土していない。



第31図 SK12 土坑平面図・断面図

5) SK13 土坑 (第32図、図版16-7・8)

S1-W10 グリッドに位置する。規模は、長軸 1.61m、短軸 1.31m、深さ 16cm を測る。平面形は楕円形で、底面は中央部がやや盛り上がる環状を成し、断面形は W 字形である。主軸方向は N-19°-E を示す。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とし、2層に分けられる。その形状から植栽痕と推測されるが、堆積土に腐植物等は見られなかった。遺物は出土していない。



第32図 SK13 土坑平面図・断面図

6) SK16 土坑 (第33図、図版17-1・2)

S1-W9 + 10 グリッドに位置する。南側を近代の擾乱により削平されており、平面形は不明である。確認した規模は、長さ 68cm、深さ 11cm を測る。断面形は皿形であり、堆積土は黒褐色砂質シルト主体で小礫を含む。遺物は出土していない。

剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	あり	ややあり	10YR3/2 黒褐色シルト多量 径 1~3cm の小礫少量

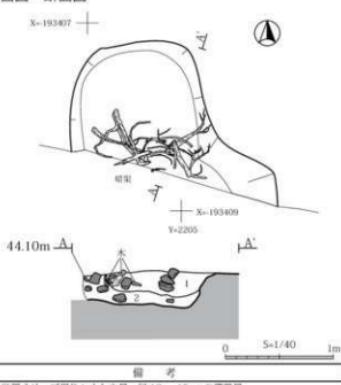
第33図 SK16 土坑平面図・断面図

(4) 性格不明遺構

1) SX5 性格不明遺構 (第34図、図版17-3・4)

S1-W10 グリッドに位置する植栽痕と考えられる遺構である。確認した規模は、長軸 2.1m を測り、平面形は不整形で、南側に GHQ による暗渠が設置されており、全体の平面形は不明である。遺構中央で樹木の根が出土した。断面形は逆台形である。堆積土は砂質シルトで黒色及び黒褐色の 2 層に分けられ、径 3 ~ 15cm の礫が含まれる。

出土した樹木の根は、樹種同定の結果トウヒ属の一種と判明した。検出時には 6 本の根茎が確認され、最大径 10cm を測り 1.5m ほどの範囲で広がっていた。



第34図 SX5 性格不明遺構平面図・断面図

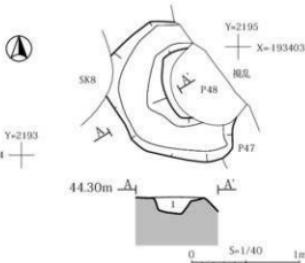
第1節 路線部Ⅰ区

2) SX8 性格不明遺構 (第35図、図版17-5・6)

S1-W11 グリッドに位置する。西側でSK8と、北東側でP48、東側でP47と重複し SK8、P48より古く、P47より新しい。北東側は擾乱により削平される。確認した規模は、長軸 1.41m、短軸 91cm を測る。平面形は環状であり、幅 33 ~ 40cm、深さ 15cm 程の溝が廻る。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、小礫を少量含む。当遺構は、その形状から植栽痕と考えられ、地山の土が土壤化したものと推測される。遺物は出土していない。

剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト			あり	ややあり 2.5Y6/6砂質シルトブロック 径 5 ~ 10mm の小礫少 一部グライ化	

第35図 SX8 性格不明遺構平面図・断面図

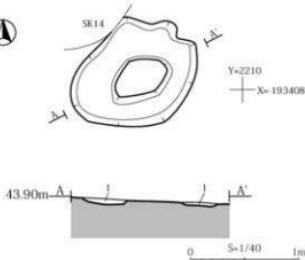


3) SX9 性格不明遺構 (第36図、図版17-7・8)

S1-W10 グリッドに位置する。規模は、長軸 1.27m、短軸 97cm を測る。平面形は不整形の環状であり、幅 28 ~ 40cm、深さ 4 ~ 6cm の溝が廻る。断面形は W 字形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、明黄褐色シルトブロックを少量含む。当遺構は、その形状から植栽痕と考えられる。遺物は出土していない。

剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1 10YR3/2 黒褐色 砂質シルト			あり	ややあり 2.5Y6/6明黄褐色シルトブロック少 量	

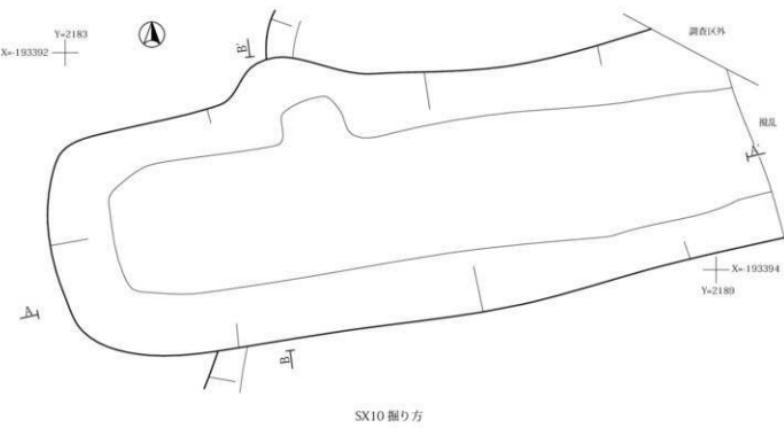
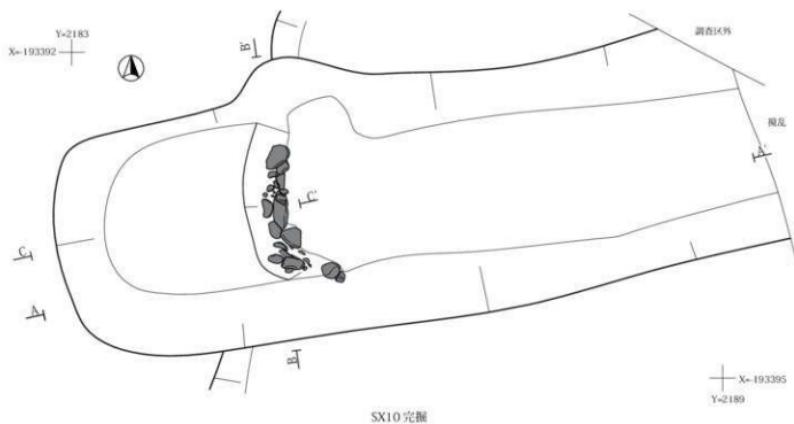
第36図 SX9 性格不明遺構平面図・断面図



4) SX10 性格不明遺構 (第37 ~ 39図、図版18-2・3 19-1 ~ 3)

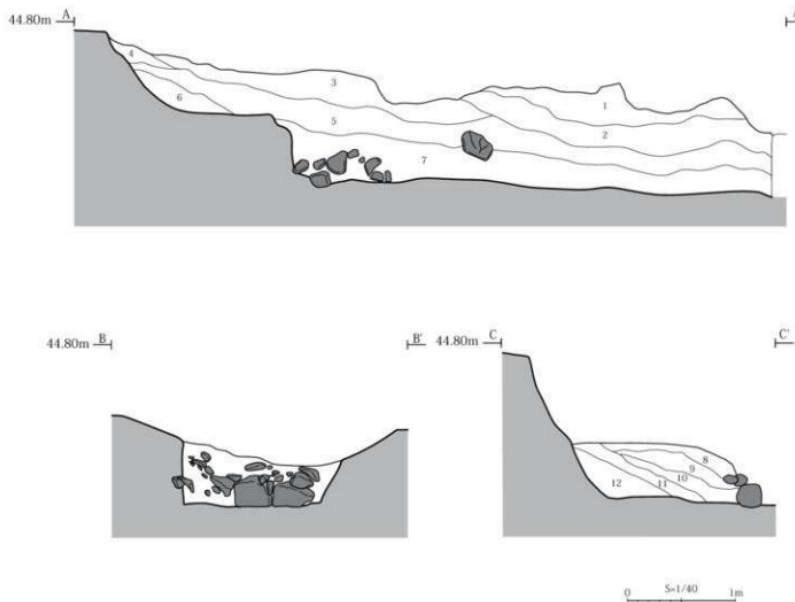
N1-W12 グリッドに位置する溝状の遺構である。周辺の地形は西から東へ向かって階段状に下がっているが、その傾斜に沿って東西方向へ走る。東端は、近代の擾乱で確認できなかったが、そのまま調査区外へ延びるものと思われる。確認した規模は、長さ 6.72m、上端幅 2.0 ~ 2.6m、下端幅 1.0 ~ 1.2m、深さ 1.4m を測る。平面形は、主軸方向 N-79°-E を示す概ね隅角長方形と考えられ、北側へ突出する部分がある。堆積土は黒色砂質シルトを主体とし 7 層に分けられる。

西側は幅 1m 程盛土され、テラス状になっており、長さ 40cm、幅 30cm、厚さ 30cm と長さ 40cm、幅 30cm、厚さ 20cm の円碟 2 個を基礎に、長径 20 ~ 30cm の円碟が積まれて、石組の土留め状を呈する。盛土は 5 層に分けられる。底面はほぼ平坦で、わずかに起伏しながら東へ傾斜する。壁面は外傾しながらほぼ直線的に立ち上がり、断面形は逆台形である。



第37図 SX10 性格不明遺構平面図

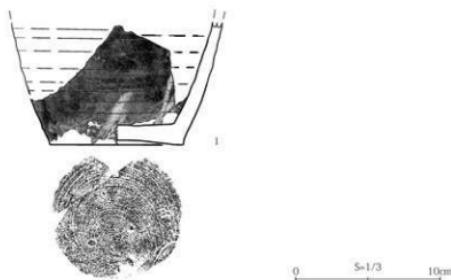
第1節 路線部Ⅰ区



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2SY2/1	黒色	砂質シルト	ややあり	あり 径0.5～5cmの砂礫及び小礫多量
2	5Y2/1	黒色	砂質シルト	ややあり	あり 径0.5～5cmの砂礫及び小礫多量
3	2SY3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径0.5～5cmの砂礫及び小礫多量
4	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径0.5～5cmの砂礫及び小礫多量
5	2SY2/1	黒色	砂質シルト	ややあり	あり 径2～10cmの礫多量
6	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり 径2～10cmの礫多量
7	10Y2/1	黒色	砂質シルト	ややあり	あり 径5～20cmの中礫多量
8	2SY4/1	黄灰色	砂質シルト	あり	あり 砂礫多量
9	2SY4/2	暗灰黄色	砂礫	なし	あり 径2～10cmの礫多量
10	5Y3/2	オリーブ黑色	砂礫	なし	あり 砂径10～20cmの大礫多量
11	2SY4/3	オリーブ褐色	砂質シルト	ややあり	あり 砂礫多量
12	2SY4/1	黄灰色	砂質シルト	あり	あり 砂礫多量

第38図 SX10 性格不明遭構断面図・盛土土留め部分立面図・断面図

出土遺物は、盛土部分石組み裏込め付近から17世紀代の岸窯産の甕胴下半部が1点出土したので、図示した。本遺構の性格は不明であるが、時期は出土遺物及び基本層との関係から、17世紀後葉に掘削され、比較的短期間のうちに埋まったのではないかと推測される。

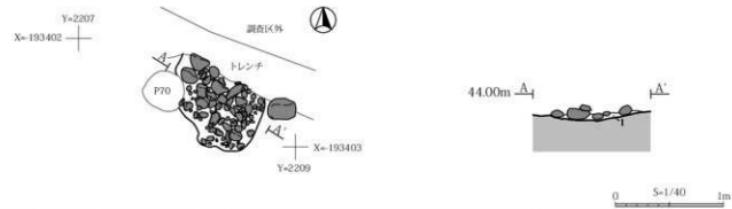


図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法縦(cm)	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	産地	時期	備考	登録番号
1	87-2	8	陶器	甕	体部～底部	半火照	(14.6)	9.18	(8.5)		岸窯	17世紀代	鉄輪 回転系切痕	1-1

第39図 SX10 性格不明遺構出土遺物

5) SX11 性格不明遺構（第40図、図版 19-4・5）

S1-W10 グリッドに位置する集石遺構である。北側を調査区壁面及びトレンチによって欠損し、東側でP70と重複しP70が新しい。確認した規模は、長さ92cm、幅66cmを測る。平面形は不整形である。遺構内に径5～20cm程の円礫がやや乱雑に詰められている。礫の隙間を埋める堆積土は黒褐色砂質シルトの單層である。根固め石の可能性も考えられるが、礎板石や柱痕等は確認されなかった。遺物は出土していない。



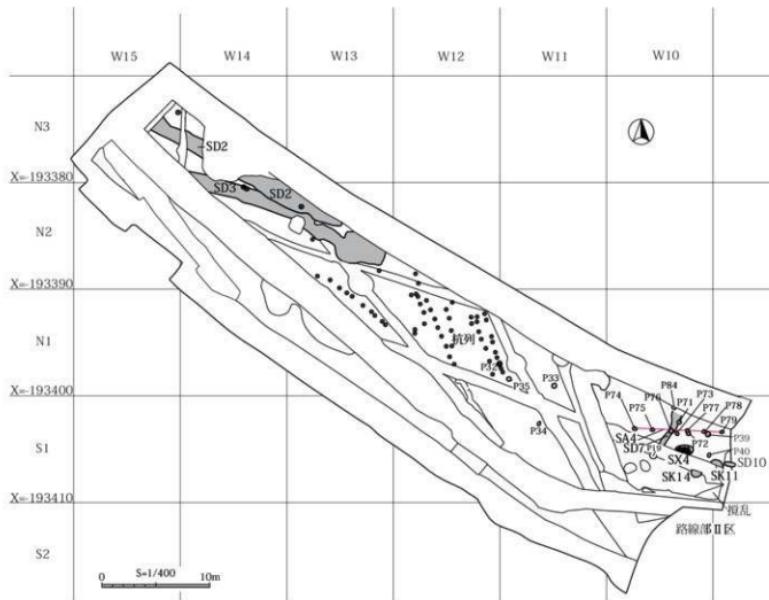
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	径5～25cmの円礫多量

第40図 SX11 性格不明遺構平面図・断面図

第1節 路線部Ⅰ区

3 V層上面検出遺構とV層出土遺物

V層は路線部Ⅰ区北東側に堆積する。黒色及び黒褐色砂質シルト主体で、ところどころで礫を多量に含む。また、土中に水分を多く含み、杭や柱根等木製品も出土している。V層上面で検出した遺構は、柱列跡1条、溝跡4条、土坑2基、性格不明遺構1基、土留めと考えられる杭列6条、柱穴10基である。



第41図 V層上面遺構配置図

(1) 柱列跡

1) SA4 柱列跡（第42図、図版20-1～5 21-1～8）

S1-W10・W11グリッドに位置する東西方向に並ぶ柱列跡である。P74・P75・P76・P77・P78・P79の6基の柱穴で構成される。SD7及び下層のSD8と重複しSA4が新しい。またP77がP72と重複し、P72より古い。西端は途切れるが、東端は調査区外へ延びるものと思われる。確認した規模は、長さ8.10m、柱間寸法は西から1.55m(5尺1寸)、1.75m(5尺7寸)、1.53m(5尺)、1.65m(5尺4寸)、1.60m(5尺2寸)を測る。各柱穴の規模は、長軸36～49cm、短軸29～34cm、深さ16～88cmを測り、平面形は梢円形、断面形は不整形である。各柱穴には、径19～26cmの柱痕が確認される。主軸方向はN-88°Wを示し、堆積土は黒色または黒褐色砂質シルトで、径2～3cmの礫を多く含む。P75において根固め石と考えられる礫が出土している他は、根固め石や礫板石は見られなかった。P77が、P72に削平されるが、柱の付け替えに伴うものである可能性もある。遺物は出土していない。

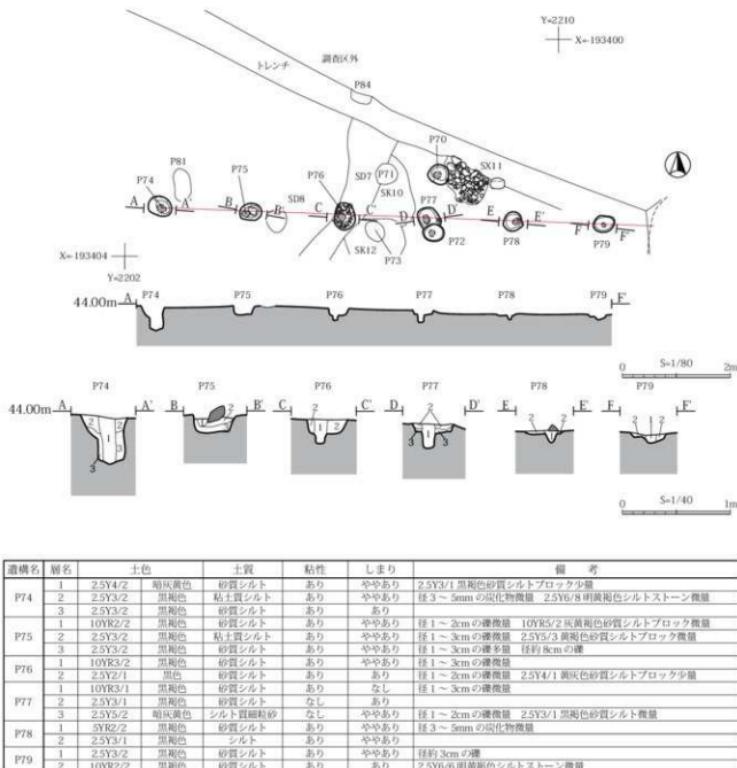


図42 図 SA4柱跡平面図・断面図

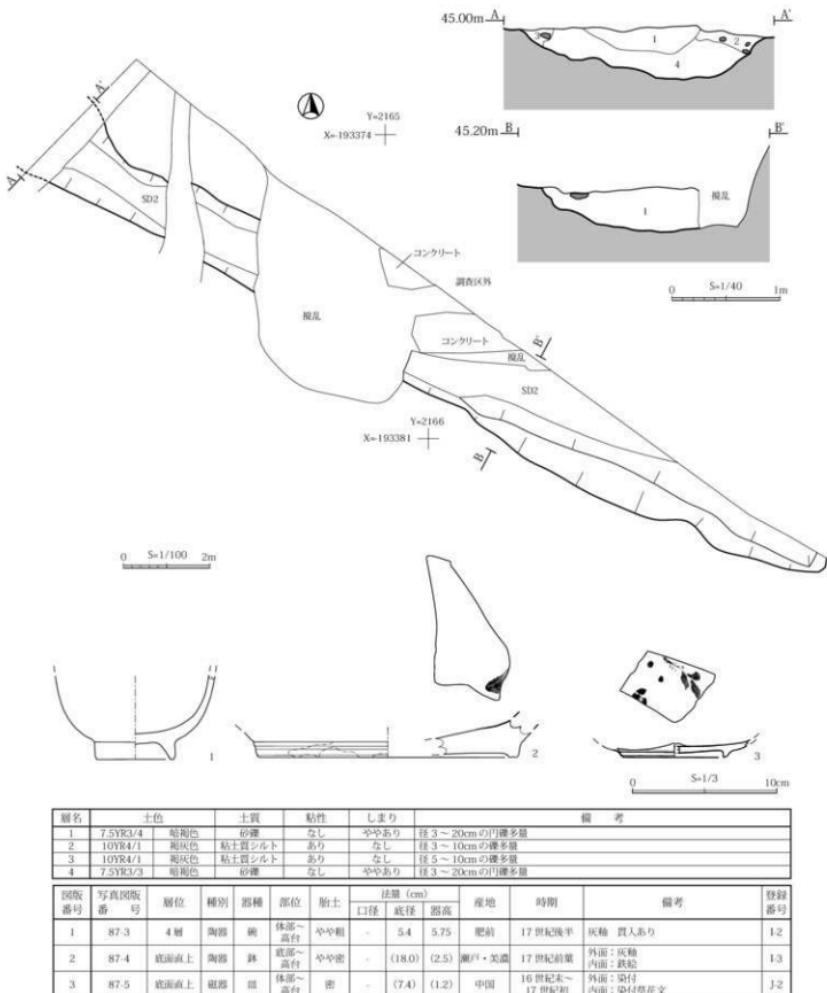
(2) 溝跡

1) SD2溝跡(第43図、図版22-1・2)

N2-W13 ~ N3-W15 グリッドに位置し、東西へ走る素掘りの溝跡である。南側のSD3と重複し、SD3より新しい。西端及び東端は、それぞれ調査区外へ延びる。確認した規模は、長さ 19.8m、上端幅 79 ~ 201cm、下端幅 39 ~ 152cm、深さ最大 84cm を測る。平面形はわずかに南西へむき弧を描き、断面形は皿形である。主軸方向は N-W を示す。底面は起伏しながら西から東へ緩やかに傾斜する。堆積土は暗褐色砂質及び褐灰色粘土質シルトで 4 層に分けられる。

遺物は底面付近から、16世紀末～17世紀初頭の中国産の磁器皿、17世紀の瀬戸・美濃産の鉢、肥前産の陶器碗が出土し、図示した。

第1節 路線部Ⅰ区

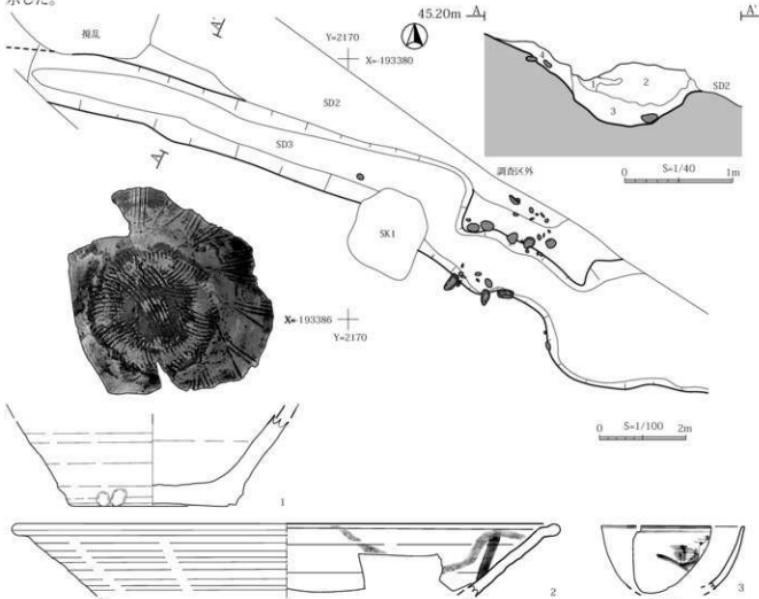


第43図 SD2溝跡平面図・断面図・出土遺物

2) SD3溝跡（第44図、図版22-3・4）

N2-W13～N3-W15 グリッドに位置する素掘りの溝跡である。SD2と重複し SD2より古い。また中央で SK1と重複し SK1より古い。西端は GHQによる暗渠によって削平され、東端は調査区外へ延びる。確認した規模は、長さ 19.2m、上端幅 1.24～2.97m、下端幅 0.59～2.65m、深さは最大 78cm を測る。平面形は、西側は直線状で、東側でクランク状に屈曲し、再度北側へ屈曲する。主軸方向は N-72°-W を示す。断面形はやや深い皿形で、堆積土は黒褐色シルト・暗褐色砂礫・褐色灰色粘土質シルト・暗青灰色粘土質シルトの4層に分けられ、2層の砂礫層は SD2 の堆積土層と酷似している。

遺物は3層から17世紀の瀬戸・美濃産の鉢、肥前産の磁器碗が、また2層上面で堤産の捕鉢が出土したので図示した。



番号	土色	土質	粘性	しまり	備考			
					層別	種別	器種	部位
1	2.SY3/1	黒褐色	シルト	あり				
2	7.5YR3/3	暗褐色	粘土	なし				
3	10YR4/1	褐色	粘土質シルト	あり				
4	5PB3/1	暗青灰色	粘土質シルト	ややあり				

写真図版 番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			備考	登録 番号
						口径	底径	器高		
1	87-6	2層	陶器	鉢	体部～底部	やや粗	-	11.7 (6.32)	堤	19世紀
2	87-7	3層	陶器	鉢	口縁～底部	やや粗	(34.3)	(5.05)	外側：灰釉 内側：美濃	17世紀前半
3	87-8	3層	磁器	鉢	口縁～底部	密	(9.9)	(4.40)	外側：灰釉 内側：鐵船、銀鏡	18世紀代

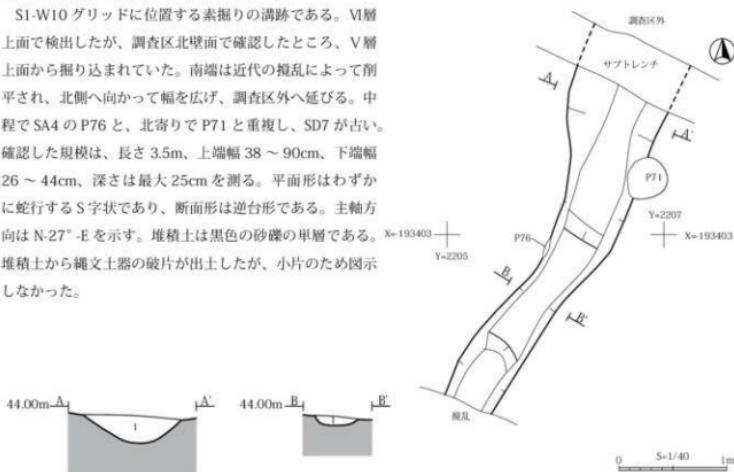
第44図 SD3溝跡平面図・断面図、出土遺物

第1節 路線部Ⅰ区

3) SD7溝跡（第45図、図版23-1・2）

S1-W10グリッドに位置する素掘りの溝跡である。VI層上面で検出したが、調査区北壁面で確認したところ、V層上面から掘り込まれていた。南端は近代の擾乱によって削平され、北側へ向かって幅を広げ、調査区外へ延びる。中程でSA4のP76と、北寄りでP71と重複し、SD7が古い。確認した規模は、長さ3.5m、上端幅38～90cm、下端幅26～44cm、深さは最大25cmを測る。平面形はわずかに蛇行する5字状であり、断面形は逆台形である。主軸方向はN-27°-Eを示す。堆積土は黒色の砂礫の単層である。

堆積土から縄文土器の破片が出土したが、小片のため図示しなかった。



剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
I	7.5YR2/1 黒色	砂礫	なし	なし	

第45図 SD7溝跡平面図・断面図

4) SD10溝跡（第46図、図版23-3・4）

S1-W9グリッドに位置する。規模は、長さ90cm、幅41cm、深さ22cmを測り、断面形は皿形である。底面は東側へ向かって階段状に落ち込み、東側で最も深くなっている。主軸方向はN-81°-Wを示す。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、最も深い東側部分に礫が多く含まれる。その規模や形状から、柱穴ないし土坑の可能性も考えられる。遺物は出土していない。



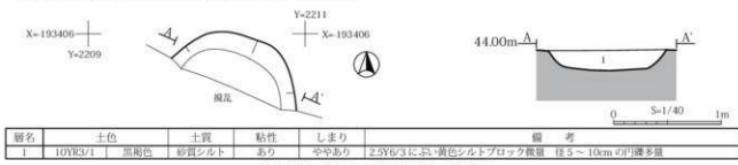
剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
I	10YR3/1 黒褐色	砂質シルト	あり	ややあり	酸化鉄分微量 ほ3～5cmの礫層 10YR3/2 黒褐色砂質シルト少量 10YR6/4 に 入り 黄褐色シルト微量 2.5Y6/6明 黄褐色シルトストーン微量

第46図 SD10溝跡平面図・断面図

(3) 土坑

1) SK11 土坑 (第47図、図版23-5・6)

S1-W9・W10グリッドに位置し、南側を近代の擾乱により削平されている。確認した規模は、東西1.24m、南北50cm、深さ20cmを測る。平面形は不明で、断面形は皿形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、径5～10cmの円礫を多量に含む。遺物は出土していない。



2) SK14 土坑 (第48図、図版24-1・2)

S1-W10グリッドに位置する。北側を近代の擾乱により削平されている。確認した規模は、東西100cm、南北62cm、深さ20cmを測る。平面形は不明で、西側側面に幅15cm程のテラス状に段が形成されるが、擾乱壁面で確認すると、隣接する別遺構の底面の可能性も考えられる。堆積土は黒色、黒褐色、黄褐色の砂質シルトの3層に分けられる。このうち1・2層はIV層堆積土に酷似する。遺物は出土していない。

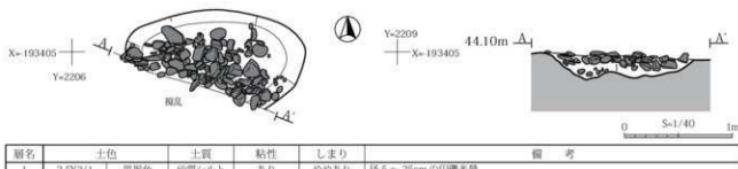


第48図 SK14 土坑平面図・断面図

(4) 性格不明遺構

1) SX4 性格不明遺構 (第49図、図版24-3・4)

S1-W10グリッドに位置する。南側を近代の擾乱により削平される。確認した規模は、長軸1.66m、短軸93cm、深さ24cmを測る。平面形は楕円形である。掘り方底面は中央が隆起し、断面形はW字状である。遺構内に径5～25cmの円礫が多量に詰められている。礫の隙間に埋める堆積土は黒褐色砂質シルトの単層である。根固め石の可能性も考えられるが礎板石や柱根等は確認できなかった。遺物は出土していない。



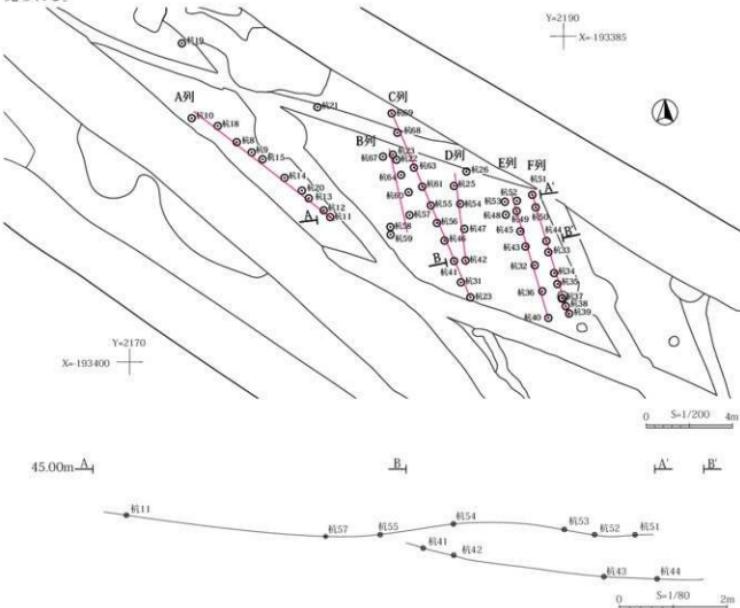
第49図 SX4 性格不明遺構平面図・断面図

第1節 路線部 I 区

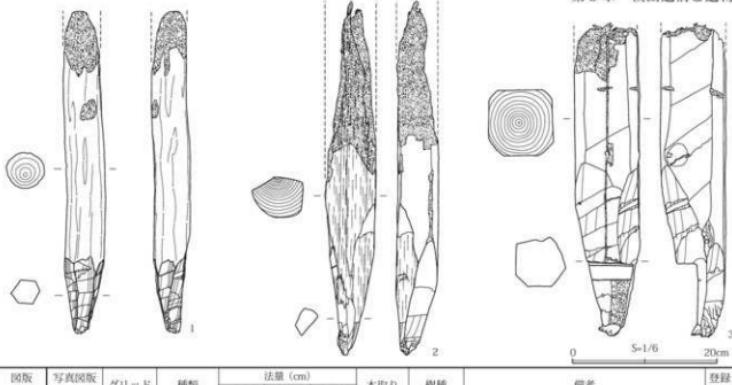
(5) 杭列 (第50・51図、図版24-5)

N1-W12～N2-W13 グリッドにおいて検出した。ほとんどの杭は痕跡を検出したのみで、杭そのものは残存していないものが多いが、6条の列をなして打ち込まれていたものと考えられる。確認した長さ及び主軸方向は、A列 7.84m (10本) 主軸方向 N-55°-W、B列 3.70 m (7本) 主軸方向 N-15°-W、C列 9.21m (10本) 主軸方向 N-23°-W、D列 5.10 m (6本) 主軸方向 N-1°-W、E列 5.59 m (7本) 主軸方向 N-15°-W、F列 5.72 m (9本) 主軸方向 N-17°-W である。検出状況から、これらの杭はV層上面より上から打ち込まれたものと考えられ、北東方向へ傾斜している地形と考え合わせると、IV層を盛り土する際に杭を打ち込んで盛土を安定させる土留めとしての機能を考えられる。

杭跡は6条53点確認され、遺存していた杭は14本である。径5～10cmの丸木材の端部を加工したものや、半割材や分割材の端部を加工しているもの、建築材等の部材を杭に転用したと思われるもの等が見られた。比較的良く遺存していたもののなかで、形が良くわかり加工痕等が観察できる3点を図化した。第50図-1は細めの丸木を利用した杭で、第50図-2は分割材を面取りし、端部を加工して杭にしている。第50図-3は面取りした角材の角を切り落として、先端部を形成した杭である。もともと梁等の建築材を杭に転用したものと考えられ、側面には整形した痕が見られ、先端には木材同士を組み合わせる、幅22mm程の脇を作る際にできたであろう鋸痕が見られる。



第50図 杭列検出地点平面図・標高図

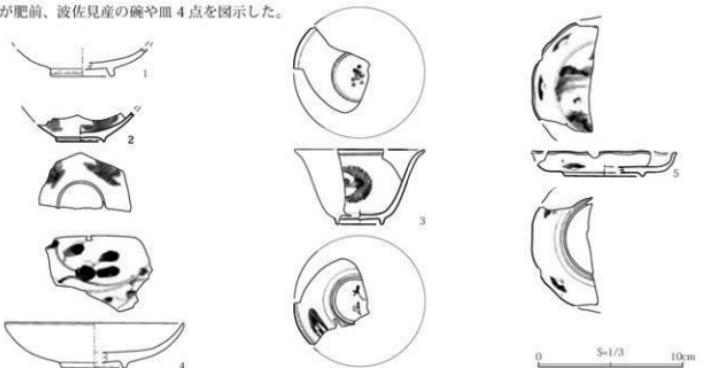


図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm)			木取り	樹種	備考	登録番号
				口径	底径	器高				
1	88-1	N1-W13	木製品	44.6	5.4	5.0	芯持材	アサダ	杭 11 先端部6方向から切り込み	L-1
2	88-2	N1-W12	木製品	48.9	7.0	5.7	分筋材	計葉樹	杭 52	L-2
3	88-3	N1-W12	木製品	43.4	9.0	5.0	芯持材	スギ	杭 48 4方向面取り 鮫あり 塗装部材付組合	L-3

第51図 杭列出土遺物

(6) V層出土遺物 (図52図、図版88-4～8)

V層から、陶器32点、磁器34点、瓦質土器2点、土師質土器7点、瓦41点、石製品2点、木製品14点出土した。陶磁器は概ね17世紀後葉から18世紀半ばのものと考えられる。そのうち、陶器が大槻相馬産の碗1点、磁器が肥前、波佐見産の碗や皿4点を図示した。



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	88-4	S2-W11	陶器	碗	体部～高台	辛苦密	-	4.44	(1.65)	大槻相馬	18世紀代	灰釉	I-6
2	88-5	N1-W12	磁器	碗	体部～高台	辛苦密	-	(3.4)	2.0	肥前	18世紀前葉～	内面：染付若松文	J-4
3	88-8	N1-W12	磁器	小碗	上縁～高台	辛苦密	(9.0)	(3.15)	5.2	肥前	17世紀後葉～	染付圓文 圓腹 高台内に銀「大明」	J-5
4	88-6	N1-W12	磁器	皿	上縁～高台	辛苦密	(12.4)	(4.4)	3.15	波佐見	18世紀末葉～	見込みに梅文 高台に難れ紺付酒	J-6
5	88-7	N1-W12	磁器	輪花皿	上縁～高台	密	(10.0)	(5.4)	2.7	肥前	17世紀末葉～	内面：染付草花文 高台に難れ紺付着	J-7
												外側：染付草文 圓腹	
												内面：染付草文 山水文	

第52図 V層出土遺物

第1節 路線部Ⅰ区

4 IV層上面検出遺構とIV層出土遺物

IV層は、GHQによる暗渠より北側全域で確認される。黒色、黒褐色、黄褐色の砂質シルト主体で、安定せず、多量の礫を含み、比較的短期間に盛上されたものと考えられる。IV層上面で検出した遺構は、L字に走る柱列跡1条、溝跡1条、井戸跡1基、性格不明遺構1基、柱穴1基である。



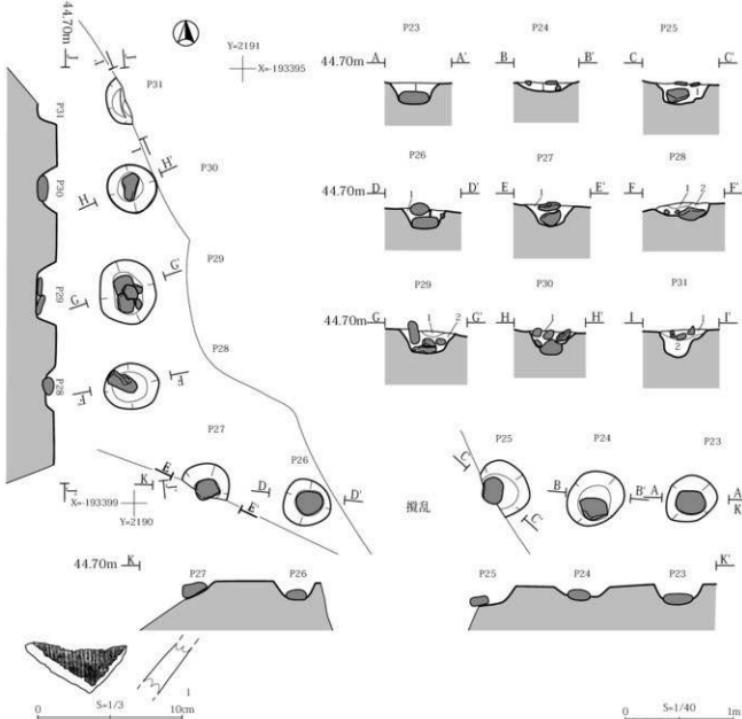
第53図 IV層上面遺構配置図

(1) 柱列跡

1) SA2 柱列跡 (第54図、図版25-1~27-5)

N1-W11・12 グリッドに位置するL字型を呈する柱列跡である。近代以降の擾乱により北端及び東端、南西角、南辺の1基が欠損しているが、東西方向に並ぶP23～P27、南北方向に並ぶP28～P31の9基の柱穴で構成される。確認した規模は、東西 6.96m、南北 4.77m を測り、主軸方向は N-90°-W・N-0°-W を示す。各柱穴の規模は、長軸 44～60cm、短軸 42～53cm、深さ 9～26cm を測る。平面形は概ね橢円形であり、P26、27 では根固め石の上に礫石が、その他は根固め石が検出された。また、P28、29 は礫石の痕が確認された。断面形は逆台形で、堆積土はいずれも黒褐色砂質シルトを主体とする。柱間寸法は東西 6 間、南北 4 間として、東西 1.16m (3 尺 8 寸)、南北 1.19 m (3 尺 9 寸) を測る。内側 (北東側) には同様な柱穴跡は確認できなかった。当遺構は、礫石建物の側柱または崩れの柱穴跡であろうと思われ、礫石が抜き取られた痕跡も確認した。また、位置関係から北東に隣接す

るSEI井戸跡との関係も考えられる。遺物はP29から擂鉢の破片が1点、P30から18世紀代のものと思われる大頭相馬産の灰釉丸碗と焼塙壺の破片各1点と、縄文土器の破片が1点出土した。そのうち、P29出土の在地産の擂鉢1点を図示した。



遺物名	剖面	土色	土質	粘性	しまり	備考
P23	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	少々あり	径10cm粒の円潤薄少量 磨板石あり
P24	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	少々あり	径5~10mmの円潤少量 磨板石あり
P25	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	少々あり	径10cm粒の円潤少量 磨板石あり
P26	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	少々あり	径1~5cm粒の小円潤少量 磨板石あり
P27	1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	少々あり	磨板石あり
P28	1	2.5Y4/1	黄灰色	砂質シルト	少々あり	径1~5cmの円潤少量 磨石痕?
	2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	少々あり	径5~10cmの円潤多量
P29	1	2.5Y4/1	黄灰色	砂質シルト	少々あり	径1~5cmの円潤少量 磨石痕?
	2	2.5Y3/1	黒褐色	シルト質細粒砂	少々あり	径1~5mmの砂涙多量 径15~25cmの円潤多量 2.5Y3/1 黒褐色の質のカットブロック多量 径15~25cmの円潤多量
P30	1	10YR2/1	白色	砂質シルト	少々あり	無
	2	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	少々あり	(径1~5mmの砂涙多量)
P31	1	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	少々あり	(約30cmの平均的な円潤(磨板石?))

図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法面(cm)	産地	時期	備考	登録番号
I	88-9	1層	測器	擂鉢	全体	やや粗	-	(3.5)	在地	鉢輪 内面: 磨打 6本 1単位	17

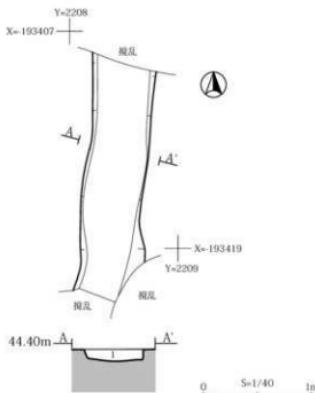
第54図 SA2柱跡平面図・断面図・出土遺物

第1節 路線部Ⅰ区

(2) 溝跡

1) SD5 溝跡（第55図、図版28-1・2）

S1-W10 グリッドに位置する素掘りの溝跡である。南北両端を近代以降の擾乱により削平される。確認した規模は、長さ 2.1m、上端幅 53 ~ 59cm、下端幅 37 ~ 51cm、深さは最大 11cm を測る。主軸方向 N-5°・E を示し、直線的に南北へ走り、底面は平坦で、傾斜は見られなかった。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、水の流れたような痕跡は見られなかった。大小の円礫が投げ込まれて埋められたような様相を呈しており、遺物は出土していない。



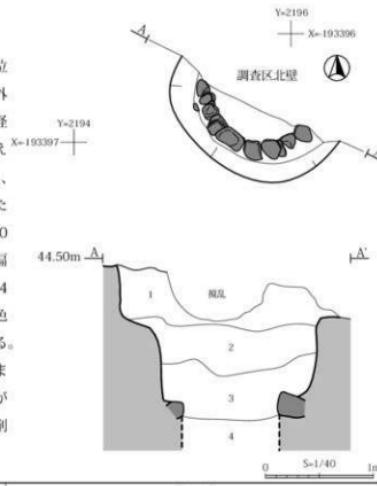
番号	土色	土質	粘性	しまり	参考
1	2.5Y3/2 黒褐色	砂質シルト	あり	空穴あり (径 2 ~ 15cm の) 墓多量	

第55図 SD5 溝跡平面図・断面図

(3) 井戸跡

1) SE1 井戸跡（第56図、図版28-3・4）

N1-W11 グリッド、SA2 柱列跡の北東側に近接して位置する。調査区北壁面の下にあたり、北西側は調査区外へ延びる。石組の井戸で、確認した規模は、石組内径 86cm、掘り方の径 1.6m を測る。平面形は円形と考えられる。近代以降の擾乱により上端は削平されており、検出面から 70cm 程までの石組みが内側へ崩れていたため、確認できたのは 2段ほどであるが、石組は長さ 20 ~ 25cm、幅 15 ~ 20cm、厚さ 10 ~ 15cm の、やや扁平な円礫を円筒形に積み重ねられていた。堆積土は 4 層に分けられ、1 層は黒褐色砂質シルト、2 層は黒褐色砂礫、3 層は黒色の砂礫、4 層は黒褐色砂質シルトである。3 層に石組みの一部であったと思われる円礫が多数含まれる。調査区北壁面直下ということもあり崩落の危険があったため検出面から 1m ほどまでの、4 層途中で掘削を中止した。遺物は出土していない。



番号	土色	土質	粘性	しまり	参考
1	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	あり	あり	径 2 ~ 5cm の) 墓多量
2	10YR3/2 黒褐色	砂礫	なし	あり	径 2 ~ 10cm の) 墓多量
3	7.5Y2/1 黒色	砂礫	なし	あり	径 2 ~ 10cm の) 墓多量
4	10YR2/2 黒褐色	砂質シルト	あり	あり	径 2 ~ 5cm の) 墓少量

第56図 SE1 井戸跡平面図・断面図

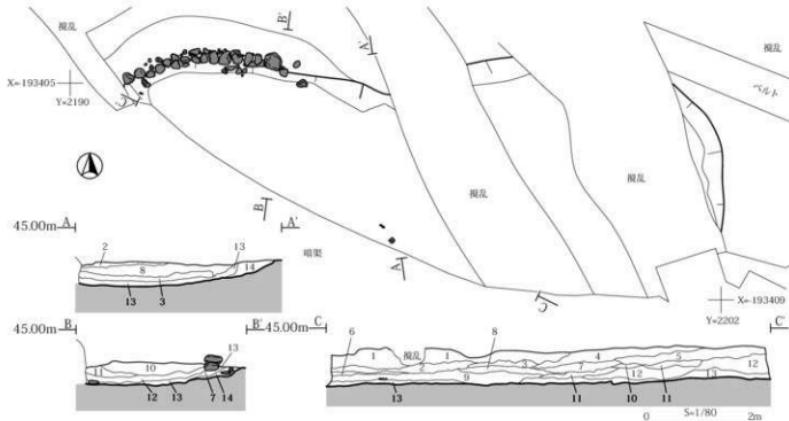
(4) 性格不明遺構

1) SX3 性格不明遺構 (第 57・58 図、図版 28-5 ~ 29-5)

S1-W11 グリッドに位置する池状の遺構である。東側半分を南北に走る近代の擾乱により寸断され、南側を、GHQ による暗渠を含む近代以降の擾乱により削平されている。確認した規模は、長軸 11.34m、短軸 4.28m、深さ 80cm を測る。平面形は不明である。西側で掘り方から 30cm 程内側に、石列が 3m 程弧を描いて検出された。石列は、長さ 20 ~ 30cm、幅 12 ~ 25cm、厚さ 10 ~ 20cm の円礫を 1 段ないし 2 段重ね、隙間に径 5 ~ 10cm のやや小さめの礫と粘土が詰められている。底面は平坦で、断面形は皿形である。当遺構の構造は、地山まで掘削した後、底面に粘土を貼り付け、上端付近に円礫を積み上げ、周囲を廻らせたものと考えられる。堆積土は大別 3 層、細別 14 層に分けられ、下層（13 層）は粘土、中層（6 ~ 12 層）はシルトと中粒砂及び砂礫層の互層、上層（1 ~ 5 層）はシルトと同じような砂質シルトである。

遺物は、下層粘土層中より松の実や木柄の破片等が出土したほか、17 世紀中葉の岸窯産の擂鉢、肥前産の磁器碗や皿、19 世紀頃の大堀相馬産の土瓶等の破片、碇等が出土した。また中層より箸や塗り物の破片が、上層より 19 世紀代の大堀相馬産の土瓶や堤産の甕、瀬戸・美濃産の磁器等の破片が出土した。18 世紀後葉～19 世紀中葉まで機能し、埋められたものと考えられる。

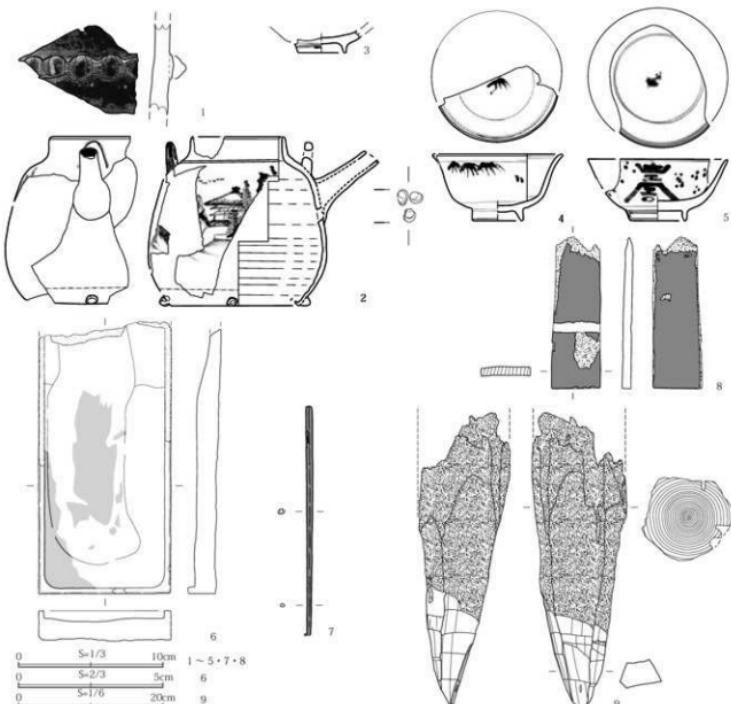
大堀相馬産、堤産の陶器 2 点、肥前産、瀬戸・美濃産の磁器 3 点、石製品、木製品、漆製品 2 点を図示した。



番号	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり
2	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質細粒砂	ややあり	あり
3	5Y4/1	灰色	砂質シルト	ややあり	あり
4	5Y4/2	灰オリーブ色	砂質シルト	ややあり	あり
5	5Y4/2	灰オリーブ色	砂質シルト	ややあり	あり 径 10 ~ 25cm の円礫多量
6	5Y4/1	灰色	シルト	あり	あり
7	5Y4/1	灰色	シルト	あり	あり 10YR3/3 前褐色中粒砂と互層
8	10Y3/3	暗褐色	中粒砂	なし	あり
9	5Y4/1	灰色	シルト	あり	あり 10YR3/3 前褐色中粒砂と互層
10	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂礫	なし	あり 径 5 ~ 20cm の円礫多量
11	5Y4/1	灰色	シルト	あり	あり
12	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂礫	なし	あり
13	5Y4/1	灰色	粘土	あり	あり
14	2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	ややあり	あり

第 57 図 SX3 性格不明遺構平面図・断面図

第1節 路線部 I 区

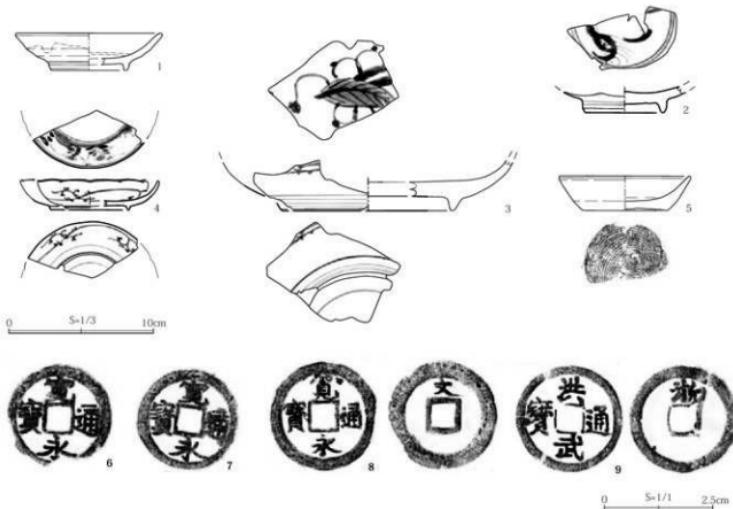


図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量 (cm)			産地	時期	備考	登録番号	
							口径	底径	器高					
1	88-10	2層	陶器	立切	体部	中や粗	-	-	(6.3)	堤	19世紀中葉	鉄輪 突張脚直腹 白釉輪重れ見られる	18	
2	89-1	2層	陶器	土瓶	口縁部～底部	中や密	(6.2)	(7.70)	11.2	大隅相馬	19世紀前葉～中葉	山水模様文 白化粧土	19	
3	89-2	2層	磁器	碗	底部～高台	密	-	3.3	(1.5)	肥前	18世紀前半～	染付團扇文	J8	
4	89-3	8層	磁器	端反碗	口縁～高台	密	(9.0)	3.0	(4.62)	肥前	19世紀前葉	染付团扇文 團扇文	J9	
5	89-4	7層	磁器	端反碗	口縁～高台	密	(9.6)	3.85	4.23	鹿児島・美國	19世紀中葉	染付吉祥文 見込み：染付團扇文	J10	
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量 (cm)			石材			備考			登録番号	
				長さ	幅	厚さ	重量	石材			備考			
6	89-5	9層	石製品	(12.45)	0.1	(1.3)	178.02	粘板岩	観	端部欠損 表面削離 使用痕が左側に集中する	K-1			
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量 (cm)			木取り			樹種			登録番号	
				長さ	幅	厚さ	木取り			樹種				
7	89-7	9層	漆器	15.8	0.5	0.3	分割材	針葉樹	塗着	赤漆			L-4	
8	89-6	9層	漆器	10.5	3.4	0.6	総目	スピ	塗りもの	赤漆			L-5	
9	89-8	13層	木製品	40.6	12.9	12.2	芯持材	モミ属	杭				L-6	

第58図 SX3 性格不明遺構出土遺物

(5) IV層出土遺物 (第59図、図版90-1~8)

IV層からは 267 点の遺物が出土した。その内訳は、瓦 65 点、陶器 64 点、磁器 94 点、瓦質土器 2 点、土師質土器 23 点、石製品 1 点、木製品 9 点、金属製品 4 点、その他 5 点である。瓦はほとんどが平瓦の破片である。陶器は 18 世紀後半～19 世紀代にかけての大堀相馬産が多く、次いで 16 世紀末葉～17 世紀にかけての瀬戸・美濃産の碗や皿が出土している。また、在地産のものが見られるようになる。磁器は肥前産のものが多いが、瀬戸・美濃産の磁器も現れる。ここでは、陶磁器、土師質土器、古銭の 9 点について図示した。



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	面構	部位	胎土	法寸 (cm)	産地	時期	備考	登録番号	
						口徑～底径	底径	器高				
1	90-4	N1-W12	陶器	皿	口縁～高台	やや粗 (11.0)	(5.4)	2.6	志野	16 世紀末～17 世紀初期	灰釉	1-10
2	90-1	N2-W13	磁器	皿	休部～高台	滑	-	5.4	1.8	肥前	染付 高台に難れ紋付着	J-11
3	90-2	N2-W13	磁器	皿	休部～高台	滑	-	11.6	3.45	波佐見	染付唐草文 肩須二種類使用	J-12
4	90-3	N2-W13	磁器	輪花皿	口縁～高台	やや密 (9.6)	(5.5)	2.05	肥前	17 世紀末～18 世紀初期	外面：染付唐草文 内面：草花文	J-13
5	90-5	N2-W13	土師質土器	かわらけ	高台	粗 (0.1)	(5.8)	2.4	在地	江戸時代	ヨコナデ	1-11
図版番号	写真図版番号	グリッド	銭貨名	判読年	法寸 (cm・g)	備考	登録番号					
					外径 穿径 重さ							
6	90-6	N2-W14	寛永通宝 (新)	1697	2.4 0.6 2.01	無背	N-1					
7	90-7	N2-W14	寛永通宝 (古)	1639	2.3 0.5 1.95	無背	N-2					
8	90-8	N2-W14	寛永通宝 (新)	1697	2.5 0.5 3.21	文鏡	N-3					
9	90-9	S1-W10 P19.2 層	洪武通宝	1368	2.5 0.6 2.25	裏面「浙」	N-4					

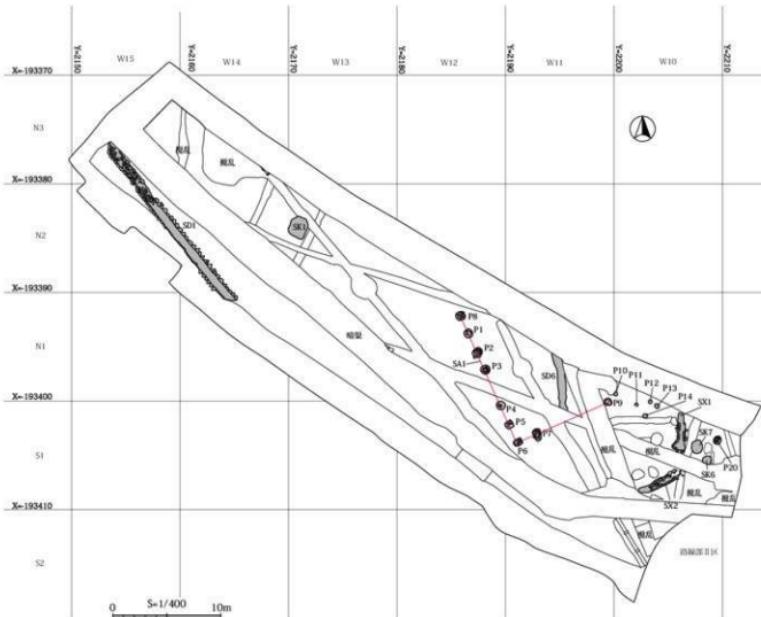
第59図 IV層出土遺物

第1節 路線部Ⅰ区

5 III層上面検出遺構とIII層出土遺物

III層上面は、その上層である第二師団当時の地表面であるII層砂礫層及び盛土層を除去して遺構を検出した面で、近世末期から明治初期頃の地表面であろうと考えられる。明治4（1871）年仙台鎮台が仙台城二の丸に入り、第二師団となって以降、昭和22年にGHQが接収するまで、当該地区は陸軍川内倉庫として使用されている。その間、第二師団は、かなり大規模に切り土、削平、あるいは盛土を行ったようで、GHQによる暗渠以南は、自然堆積層であるVII層を削平して平坦地が形成されている。そのためIII層は、GHQによる暗渠以北で確認され、その上層は黒褐色砂質シルトを主体とし礫を多量に含む。

III層上面で検出した遺構は、柱列跡1条、溝跡2条、土坑3基、性格不明遺構2基、柱穴6基（柱列跡除く）である。



第60図 III層上面遺構配置図

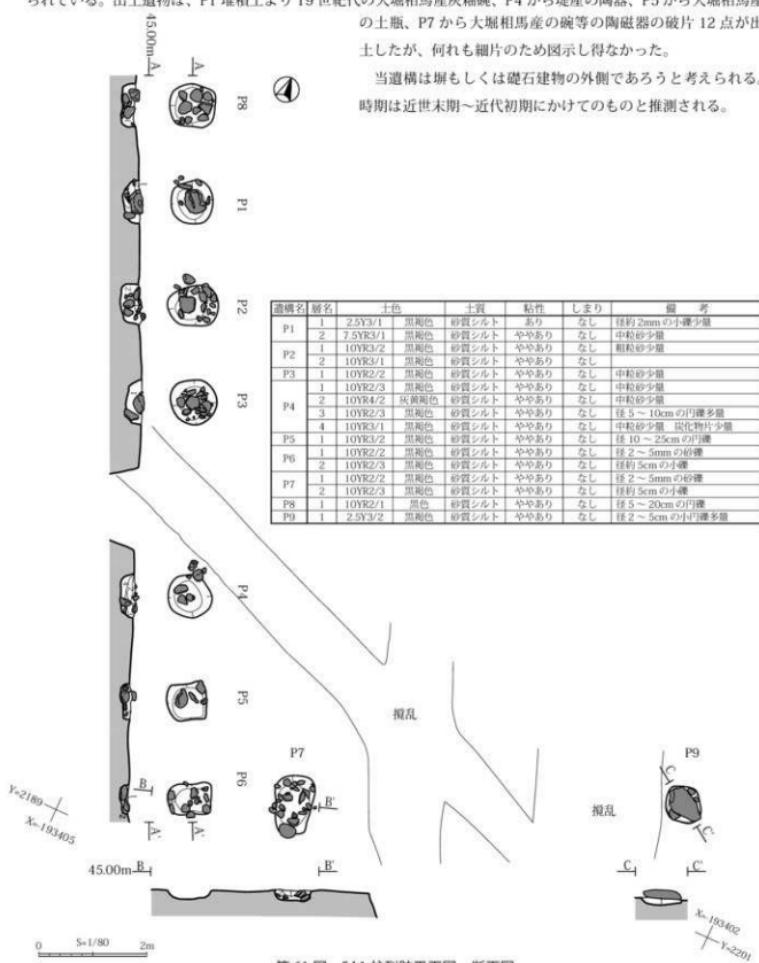
(1) 柱列跡

1) SAI柱列跡（第61図、図版30-1～33-2）

NI-W12～SI-W11グリッドに位置する。P1～P9までの9基の柱穴で構成される柱列跡である。擾乱により南東・北西方向で1基、南西・北東方向の3基の柱穴を欠損する。規模は、検出長12.86m（7間）×9.11m（5間）、柱穴間隔は南西辺のP6からP8まで平均が1.84m、P6からP9の5間は1.82mを測り、何れも約6尺である。

構成する柱穴の規模は長軸 66 ~ 108cm、短軸 56 ~ 80cm、深さ 16 ~ 40cm を測り、平面形は円形や隅丸方形である。主軸方向は N-24°・W・N-66°・E を示す。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とし、各柱穴には径 10 ~ 25cm の円錐の根固め石が詰められ、P1 は径 40 × 30 × 25cm の、P9 は 70 × 44 × 20cm の礎石が中心に据えられている。出土遺物は、P1 堆積土より 19世紀代の大堀相馬産灰釉碗、P4 から堤産の陶器、P5 から大堀相馬産の土瓶、P7 から大堀相馬産の碗等の陶磁器の破片 12 点が出士したが、何れも薄片のため図示し得なかった。

当遺構は辦もしくは礎石建物の外側であろうと考えられる。時期は近世末期～近代初期にかけてのものと推測される。



第 61 図 SA1 柱跡平面図・断面図

(2) 溝跡

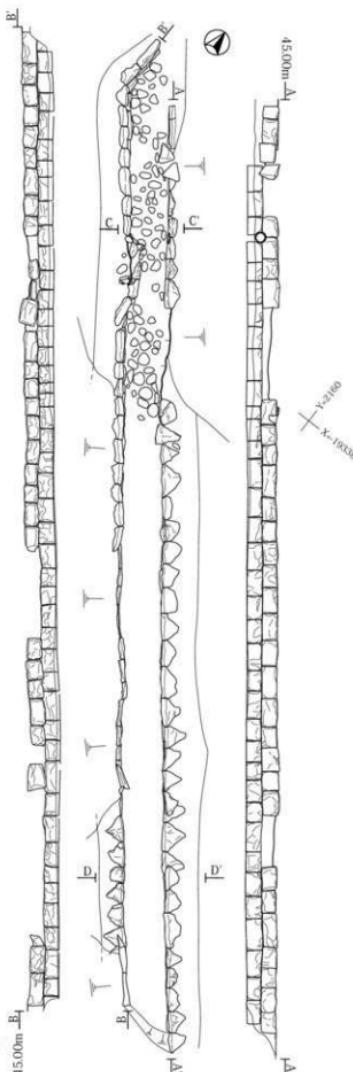
1) SD1溝跡（第62・63図、図版33-3～6）

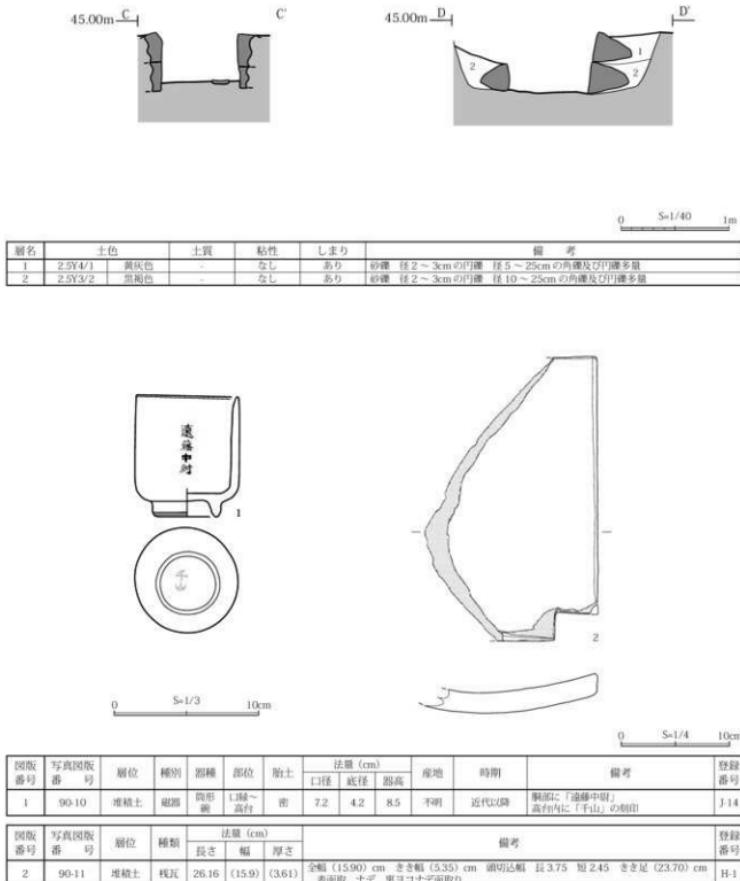
N1-W14～N3-W15グリッドに位置する石組の溝跡である。平面形は調査区西端で北側へ屈折する「く」の字状を呈し、両端は調査区外へ延びる。主軸方向はN-38°W・N-3°Eを示す。規模は、長さ19.06m、石組みの上端幅76～85cm、下端幅は72cm、深さ47～57cmを測り、南東に向かって緩やかに傾斜する。石組の構造は、幅34～62cm、高さ20～32cm、奥行き30～43cmの間知石を内側に面をそろえて2段に積み、裏込めには径10～25cmの円礫が詰められている。断面形は逆台形を呈し、概ね70°の角度をもって外側に開く。底面はほぼ平坦であるが、北西側では長さ20～25cm、幅10～15cm、厚さ5～10cmの扁平な円礫を敷き詰められているのが確認された。振り方は石組み溝内面から外側へ60cm程で振り込まれ、上端幅1.6～1.9m下端幅1.4～1.5m、深さ50～60cmを測る。断面形はやや外傾する逆台形を呈する。堆積土は湧水のため確認できなかったが、シルト質の泥とその上にⅡ層の盛土の瓦礫が堆積していた。溝の南西側はシルト質の岩盤が2mの高さで立ち上がっており、壁面には削ったような痕が見られるので、元来もう少し緩やかな傾斜をなしていた段丘崖の斜面を、平地を広げるために第二師団が削り落として、崖の際に石組溝を築いたものと推測される。溝の石組の隙間に土管が設置されていたほか、堆積土中より陶磁器や瓦の破片が、レンガやガラス片とともに出土した。そのうち第二師団当時使用された磁器製の筒茶碗と桟瓦片各1点を図示した。



写真1 SD1溝跡上の岩盤
削られた面跡が見られる。

第62図 SD1溝跡平面図・立面図





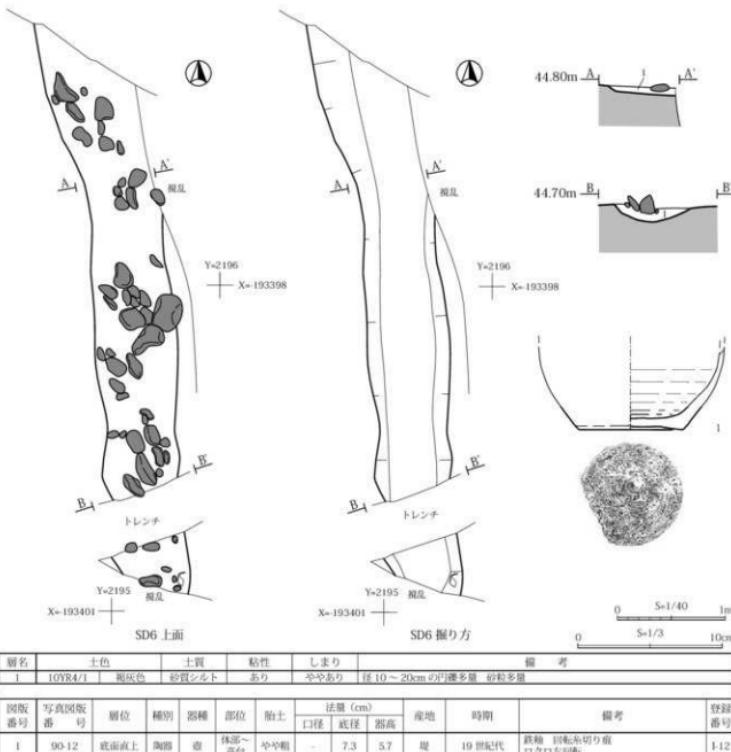
第63図 SD1溝断面図・出土遺物

第1節 路線部Ⅰ区

2) SD6溝跡（第64図、図版34-1～3）

N1・S1-W11グリッドに位置する素掘りの溝跡である。Ⅲ層上面を掘り下げたところで、円碟で埋まった状態で検出した。南側は近代の搅乱によって削平される。北端は搅乱に削平され、調査区外へ延びる。確認した規模は、長さ5.12m、上端幅62～79cm、下端幅30～50cm、深さは8～16cmを測る。平面形は僅かに蛇行しながら南北に走り、北側がやや広く南へ向かって狹まる。断面形は皿形である。主軸方向はN-10°-Wを示す。底面は緩やかに起伏しながら北から南へ向かって傾斜する。堆積土は褐色砂質シルト單層で、表面を径10～20cmの円碟で埋められる。

出土遺物は、南側底面直上で、19世紀代の堤産の陶器壺の胴下半部が出土した他は見られなかった。堆積土あるいは底面からは、水が流れた痕跡は見られなかった。また、円碟が詰められている状況は構造物の基礎等の可能性も考えられるが、溝状の窪みに石を投げ込んで埋めたようにも見られる。



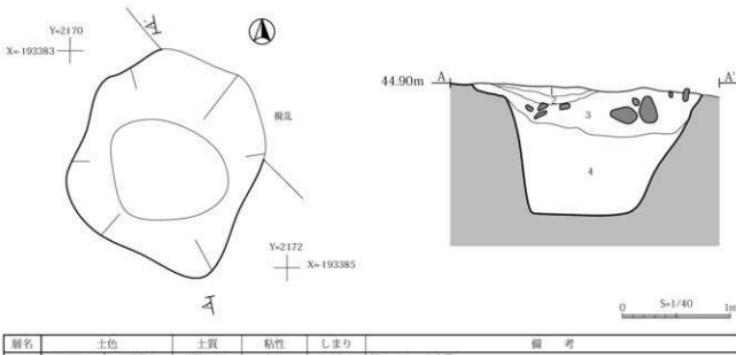
第64図 SD6溝跡平面図・断面図・出土遺物

(3) 土坑

1) SK1 土坑（第 65 図、図版 34-4～6）

N2-W13・W14 グリッドに位置する。規模は、長軸 1.86m、短軸 1.65m、深さ 1.2m を測る。平面形は不整形で、断面形は逆台形である。堆積土は 4 層に分けられるが、堆積土の大半をなす 4 層は径 40～70cm の礫が重なり合っており、礫で埋め戻された上に砂礫。あるいはシルトの土層が堆積したものと推測される。底面は平坦で、自然堆積層であるⅦ層が露出していた。その形状から、戸口として掘削した可能性も考えられる。

出土遺物は堆積土から瓦の破片が 6 点、在地産や大堀相馬産等の陶器等の破片が 3 点出土したほか、板ガラスの破片が少量出土したが、細片のため図示しなかった。掘削時期は近世末期から明治期以降であろうと思われる。



第 65 図 SK1 土坑平面図・断面図

2) SK6 土坑（第 66 図、図版 34-7・8）

S1-W10 グリッドに位置する。規模は、長軸 87cm、短軸 82cm、深さ 22cm を測る。平面形は梢円形で、断面形は皿形である。堆積土は明黄褐色砂礫の単層で、径約 10cm の礫を多量に含む。遺物は出土していない。

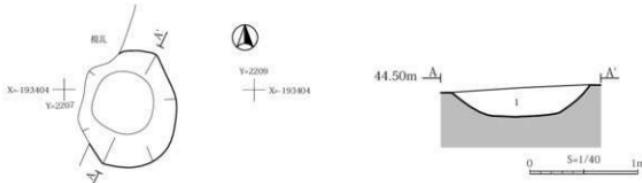


第 66 図 SK6 土坑平面図・断面図

第1節 路線部Ⅰ区

3) SK7 土坑（第67図、図版35-1・2）

S1-W10グリッドに位置する。規模は、長軸1.27m、短軸1.03m、深さ30cmを測る。平面形は梢円形であり、断面形は皿形である。堆積土はにぶい黄褐色砂質シルトの単層で中粒砂と径約10cmの円礫を多量に含む。遺物は出土していない。SK6と似通った形状と堆積土で、同様の性格を有するものと思われる。



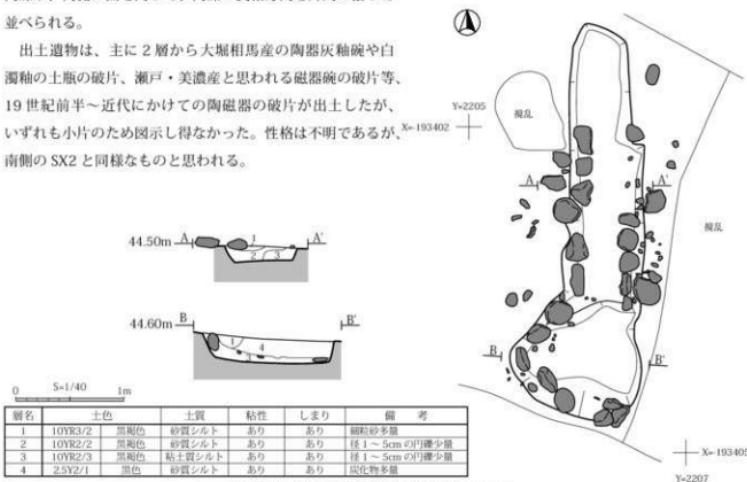
第67図 SK7 土坑平面図・断面図

(4) 性格不明遺構

1) SX1 性格不明遺構（第68図、図版35-3・4）

S1-W10グリッドに位置する、南北に長い石列を配する遺構である。規模は、長さ3.70m、幅66～74cm、南側は最大径1.21mを測る。平面形は南側が不整梢円形の杓子形であり、主軸方向はN0°～Wを示す。断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトで、北側では3層に分けられる。南側は、炭化物を含む黒褐色シルトである。底面は概ね平坦で南側のみ一段下がる。外周には、長径15～30cm、短径12～25cm、厚さ8～15cmの円礫が、内側に面を向けて、円礫の長軸方向を外周に沿って並べられる。

出土遺物は、主に2層から大堀相馬産の陶器灰釉碗や白濁釉の土瓶の破片、瀬戸・美濃産と思われる磁器碗の破片等、19世紀前半～近代にかけての陶器の破片が出土したが、いずれも小片のため図示し得なかった。性格は不明であるが、南側のSX2と同様なものと思われる。

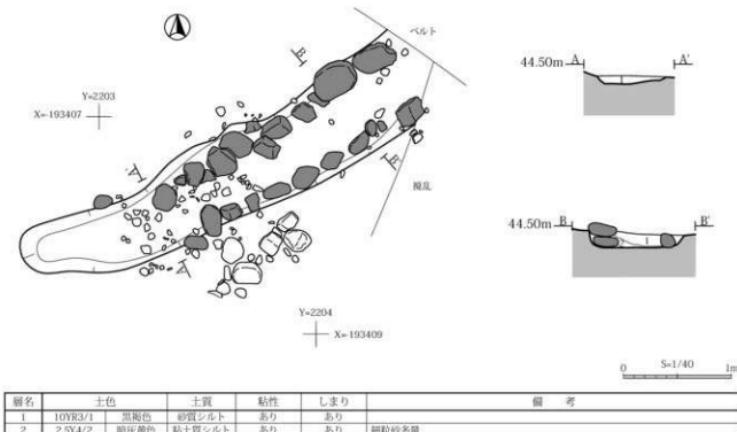


第68図 SX1 性格不明遺構平面図・断面図

2) SX2 性格不明遺構（第69図、図版35-5・6）

S1-W10 グリッドで SX1 の南側に位置し、SX1 と同様に石列を配する溝状の遺構である。北端は近代の擾乱により削平される。確認した規模は、長さ 4.8m、最大幅 83cm、深さ 8cm を測る。平面形は直線状であり、断面形は皿形である。主軸方向は SX1 と異なり、N-65°-E と東方向へ振れる。南端は石列が欠損しているが、SX1 と同様、外周に円礫を巡らせていたものと思われる。堆積土は黒褐色砂質シルトと暗灰黄色粘土質シルトの 2 層に分けられる。

遺物は、堆積土中から土師質土器の破片 2 点と角杭と思われる木質が出土したが、いずれも復元できず図示しなかった。基本層や出土遺物から、SX1 と共に近世末～近代にかけての時期に機能したものと考えられるが、その性格は不明である。



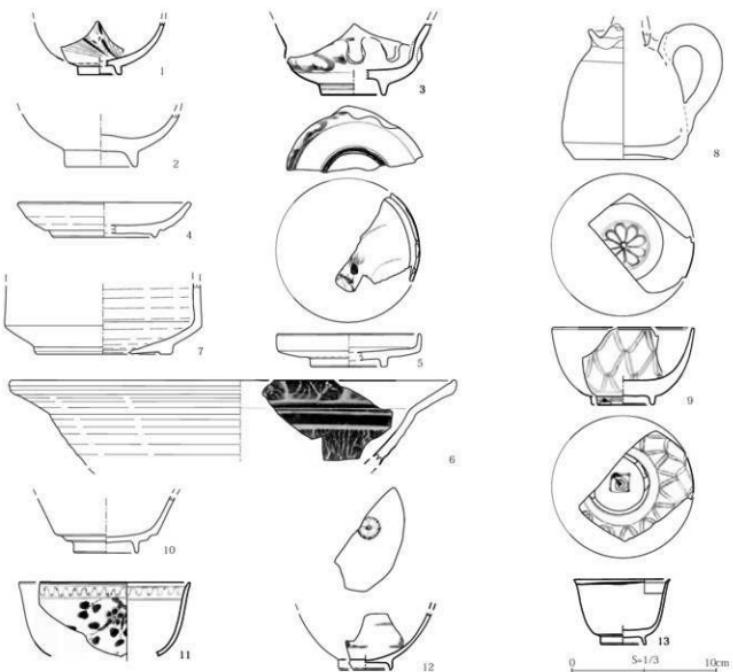
第69図 SX2 性格不明遺構平面図・断面図

(5) III層出土遺物（第70～72図、図版91-1～93-6）

III層から出土した遺物は、接合済みの破片を含めて総数 762 点を数える。内訳は瓦 57 点、陶器 299 点、磁器 320 点、瓦質土器 18 点、土師質土器 54 点、木製品 2 点、土製品 3 点、石製品 3 点、金属製品 6 点、その他 7 点である。瓦は平瓦・丸瓦が多く、棟瓦が比較的少ない。陶器の多くは破片で、産地や器種がわからなかつたものも多い。産地別に見ると陶器は大堀相馬産のものが 35 点と最も多く、次いで瀬戸・美濃産、在地産、堤産と並ぶ。磁器では、肥前産が最も多く、次いで瀬戸・美濃産のものが見られる。陶器の時期は 18 世紀後半～19 世紀代のものが多いが、16 世紀後半～17 世紀初頭の志野皿や、17 世紀代の肥前産の碗や鉢・向付け等が見られる。磁器も 17 世紀中葉の肥前産輪花皿や、17 世紀末～18 世紀代の肥前や波佐見産の碗や皿が出土している。瓦質土器では瓦筋の一部や蚊遣り脚、瓦質の香炉等が出土した。

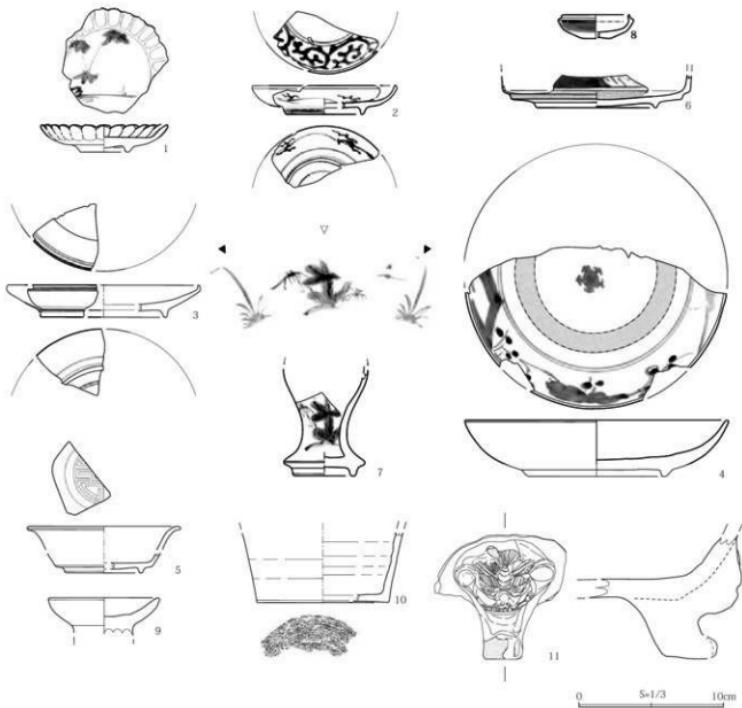
ここでは比較的残りが良く図化し得た遺物 29 点を図示した。

第1節 路線部Ⅰ区



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法徴(cm)	産地	時期	備考	登録番号
1	91-1	N1-W11	陶器	碗	体部~高台	半生粗	口径 (3.0) 底径 (3.6)	京都	18世紀中葉	外輪:灰釉 上輪付有 内面:灰釉 貫入	J-13
2	91-2	S1-W10	陶器	碗	体部~高台	半生粗	口径 (5.0) 底径 (3.65)		肥前	17世紀後半 灰釉	J-14
3	91-3	S1-W10	陶器	向付 汁	体部~高台	半生粗	口径 (9.6) 底径 (4.4) 高さ (5.2)	染付	17世紀後半 染付 高台に難れ付有 体染付	J-15	
4	91-4	N1-W11	陶器	皿	口縁~高台	粗	口径 (12.0) 底径 (7.2) 高さ (2.45)	瀬戸・美濃	16世紀後半~ 17世紀初頭	長石釉 貫入あり	J-16
5	91-5	S1-W10	陶器	皿	口縁~高台	半生粗	口径 (10.0) 底径 (5.1) 高さ (2.3)	大垣相馬	19世紀	貝須鉢草花文	J-17
6	91-6	N1-W11	陶器	鉢	口縁~体部	半生粗	口径 (32.0) 底径 (28.0) 高さ (5.85)	肥前	17世紀後葉	灰釉 内張:打子網毛口	J-18
7	91-8	N1-W12	陶器	香炉	体部~高台	密	口径 (9.2) 底径 (4.8)	大垣相馬	19世紀代	灰釉 ロクロ左回転	J-19
8	91-7	N1-W12	陶器	油壺	体部~底足	半生粗	口径 (6.85) 底径 (9.4)	堤	19世紀代	灰釉 回転系切り痕	J-20
9	91-13	S1-W11	磁器	碗	口縁~高台	半生密	口径 (9.9) 底径 (4.1) 高さ (5.35)	波佐見	18世紀中葉	外輪:二重網目文 高台内に角渦線内面: 見込みに菊花文 高台に難れ付有	J-15
10	91-9	S1-W10	磁器	碗	口縁~高台	密	口径 (9.44) 底径 (4.45) 高さ (3.9)	肥前	18世紀~19世紀	白磁	J-16
11	91-10	N1-W12	磁器	端反 瓶	体部	密	口径 (11.8) 底径 (3.9) 高さ (5.1)	瀬戸	19世紀前葉	染付梅樹文 錐弁文	J-17
12	91-11	N1-W12	磁器	瓶	体部~高台	密	口径 (3.45) 底径 (3.9)	肥前	18世紀末~ 19世紀初頭	染付 見込みに花文	J-18
13	91-12	N1-W12	磁器	猪口	口縁~高台	密	口径 (6.6) 底径 (3) 高さ (4.55)	瀬戸・美濃	19世紀	染付團扇文	J-19

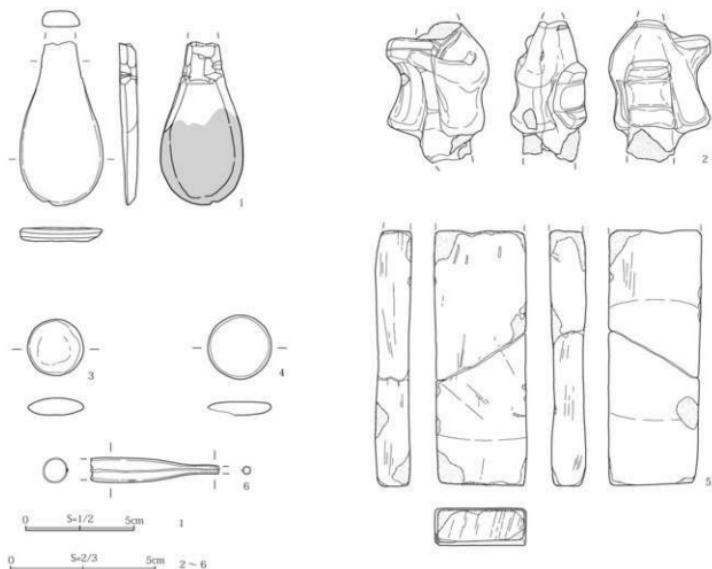
第70図 III層出土遺物(1)



図版番号	写真図版番号	グリッド	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)	産地	時期	備考	登録番号
							口径 底径 器高				
1	92-1	N2-W13	磁器	輪花皿	口縁～底	密	8.8 3.5 1.9	肥前	17世紀中葉	内面：染付竹文 乾の日高台	J-20
2	92-3	N2-W13	磁器	皿	口縁～高台	やや密	(10.0) (5.2) 2.0	肥前	17世紀～ 18世紀前葉	外面：染付唐草文 高台に襷織紋付着	J-21
3	92-4	S1-W11	磁器	皿	口縁～高台	密	(13.4) (8.8) 2.4	肥前	18世紀	染付團扇文 口縫	J-22
4	92-5	N1-W11	磁器	皿	口縁～高台	密	18.34 9.8 3.88	波佐見	18世紀前葉 染付草花文 見込みに五瓣花 コニニギク田割 初叶十瓣割ぎ	J-23	
5	92-2	N2-W13	磁器	皿	口縁～高台	密	(10.6) (5.4) -	肥前・ 美濃	19世紀中葉～後葉	白磁 寿字文盤刻	J-24
6	92-6	S1-W11	磁器	段重	底部～ 高台	-	8.2 2.25	肥前	19世紀後	染付 79と重なるか	J-25
7	92-7	N1-W12	磁器	脚付酒 壺利	体部～ 高台	密	- 4.15 7.35	肥前	18世紀末～ 19世紀前半	染付若松文と竹文	J-26
8	92-8	S1-W11	磁器	合子	口縁～ 底部	密	4.65 2.0 1.65	肥前	19世紀前葉～中葉	染付 琉璃釉	J-27
9	92-9	S1-W11	瓦質 土器	瓦	瓦筋内 皿	やや粗	7.7 (2.3)	在地	江戸時代	油煙付着	J-28
10	92-10	S1-W11	瓦質 土器	瓦	瓦筋内 高台	粗	- 9.1 4.8	在地	江戸時代	回転糸切り痕 続けはじあり	J-29
11	92-11	N1-W13	瓦質 土器	瓦	瓦筋内 瓶型	やや粗	- - (8.5)	在地	18世紀末～ 19世紀	無釉	J-30

第71図 III層出土遺物(2)

第1節 路線部Ⅰ区

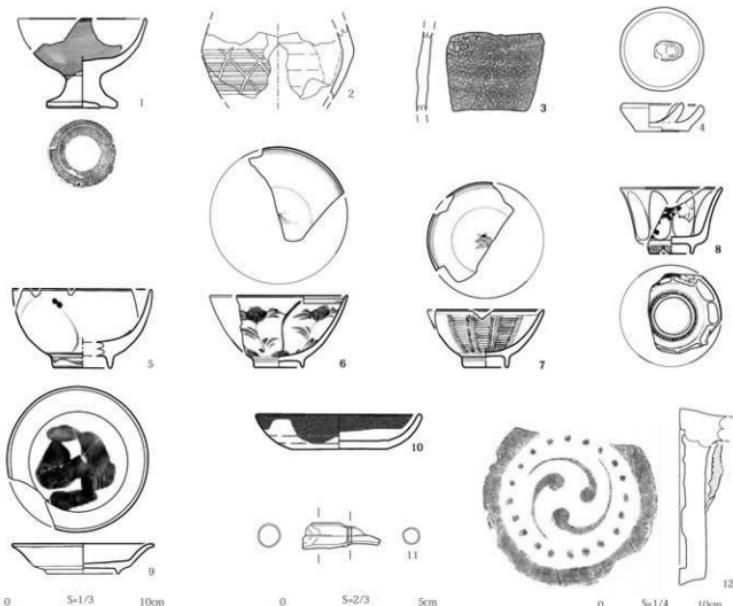


図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm)			木取り	断面	備考	登録番号
				口径	底径	器高				
1	93-1	S1-W10	本製品	7.4	3.7	0.8	板瓦	針葉樹	しゃもじ	L-7
図版番号 写真図版番号 グリッド 種類 法量(cm・g) 備考 登録番号										
2	93-2	N1-W11	土製品	4.9	3.4	2.6	19.6	土人形 女性		P-1
3	93-4	N1-W11	土製品	1.97	1.9	0.6	1.97	砾石 白石		P-2
図版番号 写真図版番号 層位 種類 法量(cm・g) 備考 登録番号										
4	93-5	N1-W11	石製品	2.2	2.18	0.48	3.55	粘板岩 黒石		K-2
5	93-6	N1-W12	石製品	8.7	3.1	1.05	65.58	凝灰質頁岩 灰石		K-3
図版番号 写真図版番号 グリッド 種類 法量(cm・g) 備考 登録番号										
6	93-3	N1-W12	金属製品	4.5	0.85	-	3.09	鐵管(吸口) 最大径0.85cm 最小径0.3cm		N-5

第72図 III層出土遺物(3)

6 II層出土遺物(第73図、図版93-7~94-3)

II層から出土した遺物は、接合済みの破片を含め総数513点を数える。内訳は瓦18点、陶器170点、磁器298点、瓦質土器4点、土師質土器5点、石製品2点、金属製品13点、その他3点である。そのうち近世の遺物と考えられ、且つ、比較的の形状が残っているものについて11点を図示した。



図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	93-7	N3-W14	陶器	伝飯貝	口縁～脚部	やや密	(8.95)	4.85	6.22	大堀相馬	19世紀	白面輪・回転系切痕	1-24
2	93-8	S1-W11	陶器	袋物	体部	やや密	-	-	(5.2)	大堀相馬	19世紀前葉	白面輪・内面：無輪最大径10.5cm	1-25
3	93-9	S1-W10	陶器	器物	体部	やや粗	-	-	(5.45)	不明	近世	外側：墨灰釉・擦肌 内面：鉄輪	1-26
4	93-10	N1-W11	陶器	平仄	口縁	やや密	5.8	3.7	2.1	堺	19世紀	鉄輪	1-27
5	93-11	N1-W11	磁器	碗	口縁～高台	密	(9.7)	(4.1)	5.48	波佐見	18世紀前半	染付草花文	J-28
6	93-12	N1-W11	磁器	碗	口縁～高台	やや密	(9.0)	(3.35)	5.0	肥前	18世紀後半	染付草花文・見込みに染付星虫文	J-29
7	93-14	N1-W1	磁器	碗	口縁～高台	密	0.05	(2.95)	4.0	肥前	18世紀後葉～19世紀初期	染付草木文・見込みに波虫文	J-30
8	93-13	N1-W11	磁器	小杯	口縁～底部	やや密	(7.0)	(3.0)	4.6	瀬戸	19世紀中葉	染付蝶文・樹文	J-31
9	93-15	N1-W12	磁器	皿	口縁～高台	密	9.85	5.25	2.1	瀬戸	19世紀代	見込みに染付鳳凰文・神田 直みおり	J-32
10	94-1	N1-W12	土師質土器	皿	口縁～底部	やや密	11.3	6.5	2.4	在地	近世	ミガキ・油煙炭化物付着 ロウ口回転左	1-28

図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm・g)				備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ	重量		
11	94-2	S1-W10	金属製品	(2.78)	-	0.05	1.33	埋省(現江)最大幅0.85cm 最小幅0.6cm	N-6

図版番号	写真図版番号	グリッド	種類	法量(cm)			備考	登録番号
				長さ	幅	厚さ		
12	94-3	N1-W12	軒丸瓦	-	-	-	文様団径:12.8cm 瓦当径:16.3cm 瓦当厚:2.5cm 脊輪幅:1.7cm 周縁高:0.40cm 外側:型押し成形後指による調削 内面:ヨコナギ 文様:通珠三巴文(左唇)	F-1

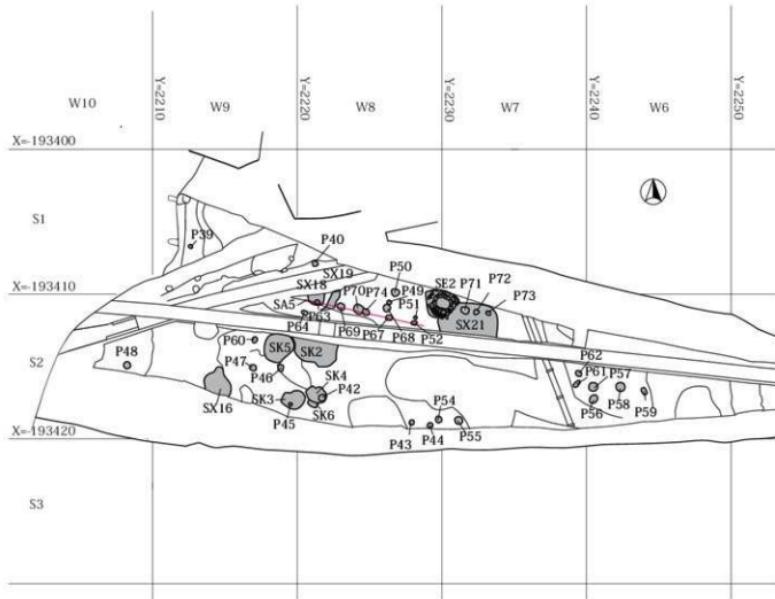
第73図 II層出土遺物

第2節 路線部II区

1 VII層上面検出遺構

路線部II区では、VI層は北西側で僅かに確認されただけで、大部分の範囲でV層の下に自然堆積層であるVII層を検出した。当調査区で見られるVII層上面の地形は、調査区中央から南端にかけてやや高く、東へ向かって起伏しながら緩やかに傾斜する。調査区東側S2-W6 グリッドで 1.5m 程急激に下がるが、この急な傾斜の肩は北西方向へ延びており、調査区北側から迂回路部に向かって一段落ち込む地形が存在するものと思われる。土質はローム質の砂質シルトが北西側で見られ、中央から東側は円錐と砂礫を主体とした礫層である。

VII層上面で検出した遺構は、柱跡路1条、井戸跡1基、土坑5基、性格不明遺構4基、柱穴27基である。

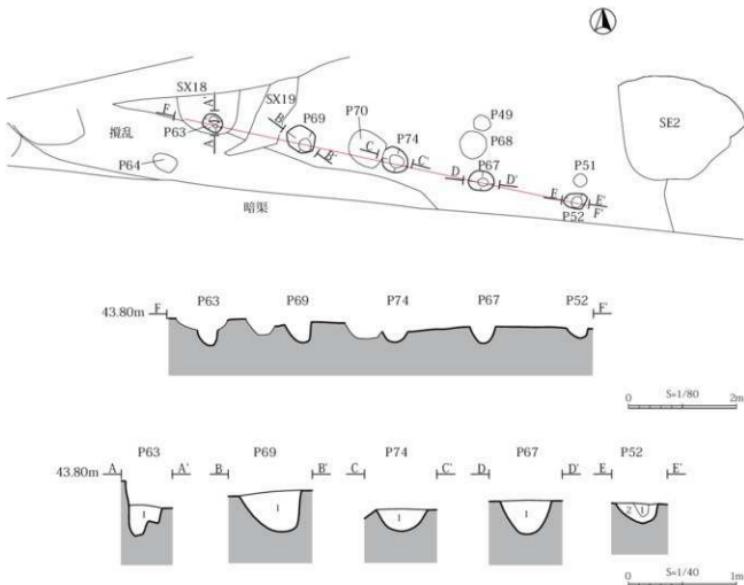


第74図 VII層上面遺構配置図

(1) 柱列跡

1) SA5 柱列跡（第75図、図版36-2～7）

S2-W8 グリッドに位置する柱列跡で、東西方向に並ぶP63、P69、P74、P67、P52の5基の柱穴で構成される。両端とも搅乱で欠損している可能性がある。また、西端のP63は、SX18掻削後にその底面から検出され、中程のP74はP70と重複し、P70より古い、確認した規模は、長さ 6.86m、柱間寸法は西端から 1.70m (5尺 6寸)、1.71m (5尺 6寸)、1.67m (5尺 5寸)、1.78 m (5尺 8寸) を測り、各柱穴の規模は、長軸 37 ~ 57cm、短軸 28 ~ 44cm、深さ 18 ~ 51cm を測る。主軸方向は N-77°W を示す。各柱穴の平面形は橢円形であり、断面形は半円状や階段状である。堆積土はオリーブ黒色砂質シルトの単層で、P52のみ2層で、黒色粘質シルトに黑色シルトが柱状に堆積する。遺物は出土していない。



遺構名	編名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P63	1	SY3/1	オリーブ黒色	砂質シルト	少やあり	径 5 ~ 10mm の砂礫多量
P69	1	SY3/1	オリーブ黒色	砂質シルト	なし	径 5 ~ 10mm の砂礫多量
P74	1	SY3/1	オリーブ黒色	砂質シルト	なし	径 5 ~ 10mm の砂礫多量
P67	1	SY3/1	オリーブ黒色	砂質シルト	なし	径約 5mm の砂礫多量
P52	1	10YR2/1	黒色	砂質シルト	あり	ロームブロック少量
	2	10YR1/7/1	黒色	粘質シルト	なし	径約 5mm の砂礫少量

第75図 SA5 柱列跡平面図・断面図

(2) 井戸跡

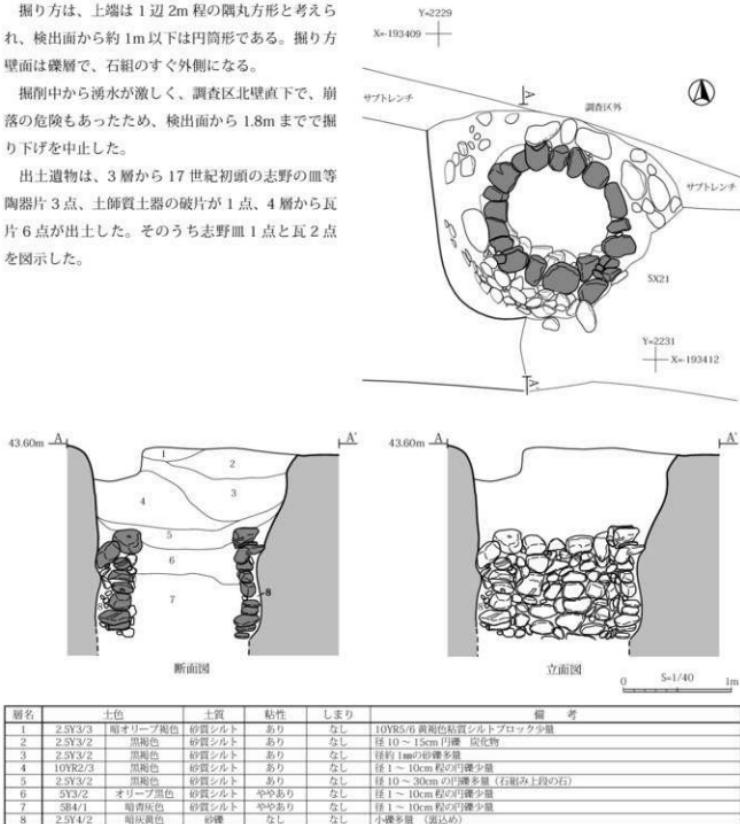
1) SE2 井戸跡 (第76・77図、図版37-1～5)

S1-W7・W8・S2-W7・W8 グリッドにまたがって位置する石組の井戸である。東側で、SX21と重複し、SX21より古い。検出面から約80cmまでの石組は崩れて井戸枠内側へ堆積していた。規模は、石組内径95cm、深さ1.78mを測る。石組は、長さ20～30cm、幅15～30cm、厚さ10～15cmのやや扁平な円礫を積み上げ、裏込めには直径約5cmの小円礫やVII層である礫層の礫が詰められる。堆積土は8層に分けられ、1層から7層までは人為的な埋め土と思われる。廃棄した際に、6・7層を埋めた後、壁面の円礫が崩されて埋められ(5層)、その上に、砂質シルトを主体とした土が堆積している。

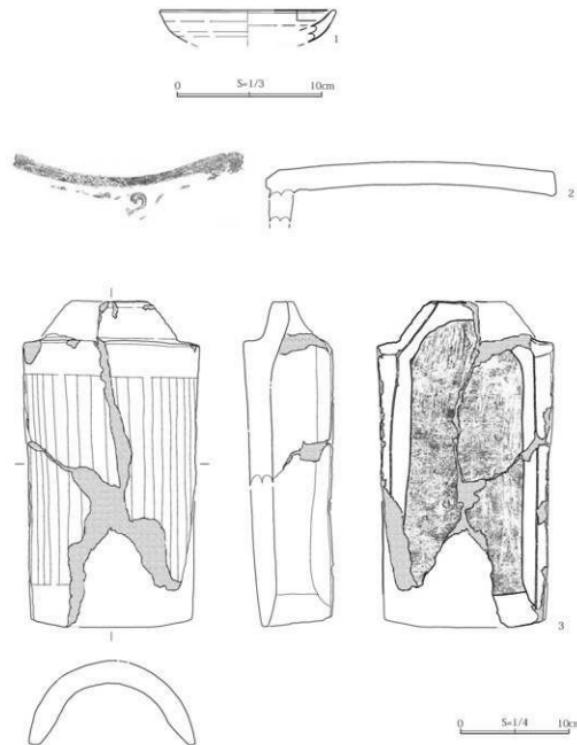
掘り方は、上端は1辺2m程の隅丸方形と考えられ、検出面から約1m以下は円筒形である。掘り方壁面は礫層で、石組のすぐ外側になる。

掘削中から湧水が激しく、調査区北壁直下で、崩落の危険もあったため、検出面から1.8mまで掘り下げを中止した。

出土遺物は、3層から17世紀初頭の志野の皿等陶器片3点、土師質土器の破片が1点、4層から瓦片6点が出土した。そのうち志野皿1点と瓦2点を図示した。



第76図 SE2 井戸跡平面図・断面図・立面図



図版番号	写真図版番号	層位	種類	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	94-6	3層	陶器	皿	口縁～全体	粗	(12.2)	-	(2.2)	瀬戸・美濃	16世紀末～17世紀初頭	長石袖 内面：鉄絞	I-29
図版番号													
2	94-5	4層	平瓦	268	239	2.0	法量(cm)			備考			登録番号
3	94-4	4層	丸瓦	29.9	16.3	2.1				瓦内幅：(21.3) cm 文様文幅：(17.6) cm 幅(外輪)：(3.65) cm 周輪幅：(0.8) cm 瓦当高：(7.75) cm 文様区高：(3.05) cm 瓦当厚：(2.6) cm 強度：2.8cm 強表面：全体にスリット有 高さ：8.32 外面：ヘラ切り ヨコナデ 内面：ヘラ切り後ヨコナデ コビキB 布目庄			G-1 F-2

第77図 SE2 井戸跡出土遺物

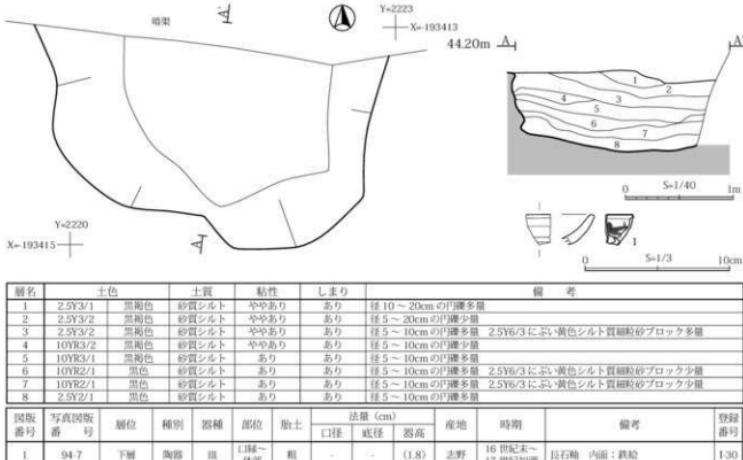
第2節 路線部II区

(3) 土坑

1) SK2 土坑（第78図、図版38-1・2）

S2-W9・W10グリッドに位置する。北側がGHQが設置した暗渠で削平され、南側半分程しか調査できなかった。確認した規模は、長さ3.25m、幅1.82m、深さ75cmを測る。平面形は不明である。底面は概ね平坦で、壁は直線的に立ち上がり、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色及び黒色の砂質シルトで8層に分けられ、いずれの層も径5～20cmの円礫を多量に含む。

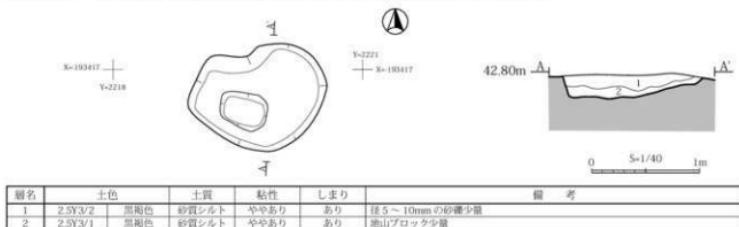
遺物は堆積土中より16世紀末葉～17世紀初頭のものと思われる瀬戸・美濃産の志野皿の破片が1点、土師質土器の破片が1点出土した。そのうち、志野皿1点を図示した。



第78図 SK2 土坑平面図・断面図・出土遺物

2) SK3 土坑（第79図、図版38-3・4）

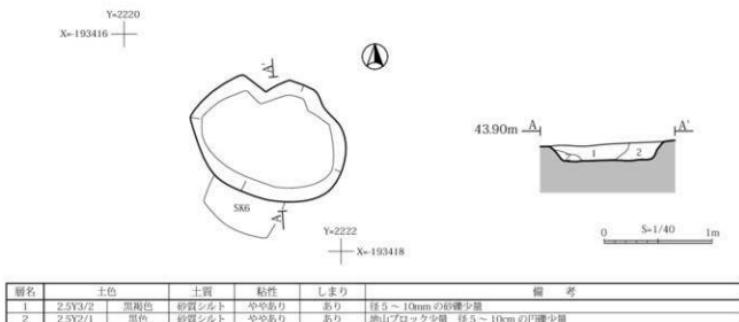
S2-W8・9グリッドに位置する。規模は、長軸1.69m、短軸1.27m、深さ24cmを測る。平面形は不整形、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体として2層に分けられる。底面は北から南へ向かって緩やかに傾斜し、中央部分で一段窪み、縁辺で急に立ち上がる。遺物は出土していない。



第79図 SK3 土坑平面図・断面図

3) SK4 土坑 (第 80 図、図版 38-5・6)

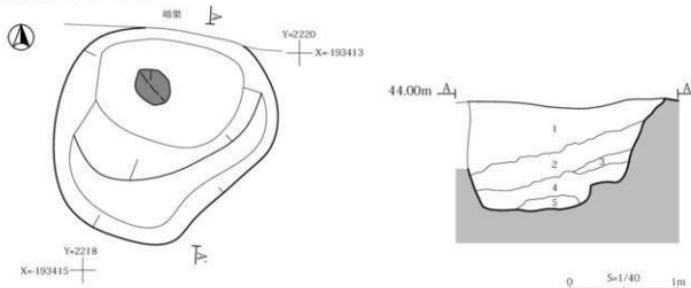
S2-W8 グリッドに位置し、南側で SK6 を重複し、SK6 より新しい。規模は、長軸 1.48m、短軸 1.12m、深さ 19cm を測る。平面形は、主軸方向 N-71°-W を示すやや歪な橢円形であり、断面形は逆台形である。堆積土は黒褐色及び黒色の砂質シルト主体で 2 層に分けられ、遺物は出土していない。



第 80 図 SK4 土坑平面図・断面図

4) SK5 土坑 (第 81 図、図版 38-7・8)

S2-W9 グリッド、SK2 の西隣に位置する。北側の GHQ による暗渠で一部削平されている。確認した規模は長軸 2.20m、短軸 1.85m、深さ 1.02m を測る。平面形は主軸方向 N-48°-E を示す不整橢円形で、断面形は階段状を呈し、南側壁面にはテラス状の段が見られる。底面は平坦で、中央で長さ約 40cm、幅約 28cm、高さ約 25cm の礫が 1 点検出された。礫板石かとも思われたが判然としない。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体とし、5 層に分けられる。遺物は出土していない。

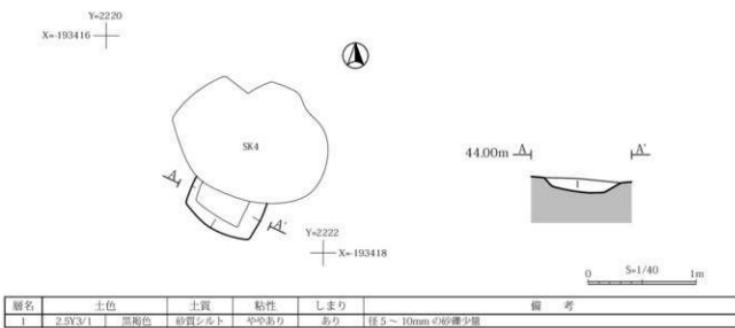


第 81 図 SK5 土坑平面図・断面図

第2節 路線部II区

5) SK6 土坑 (第82図、図版38-5)

S2-W8 グリッドに位置する。北側でSK4と重複し、SK4より古い。全体の形状は不明であるが、隅丸の方形あるいは長方形を呈するものと思われる。確認した規模は、検出長70cm、幅36cm、深さ13cmを測る。断面形は皿形であり、堆積土は黒褐色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。

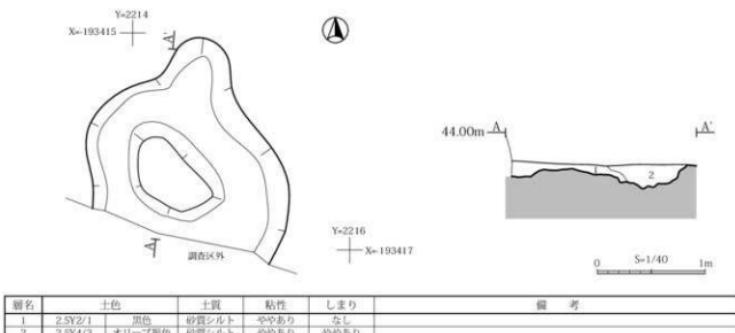


第82図 SK6 土坑平面図・断面図

(4) 性格不明遺構

1) SX16 性格不明遺構 (第83図、図版39-1・2)

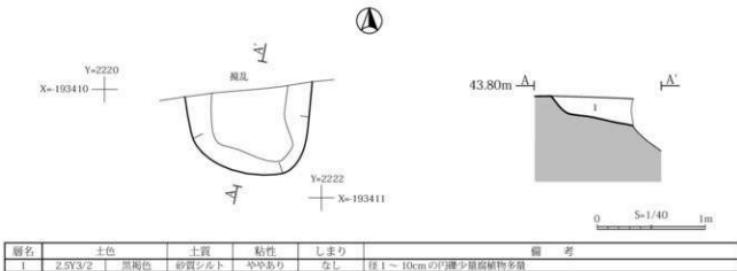
S2-W9 グリッドに位置し、南側は調査区外に広がる。確認した規模は、長さ1.96m、幅1.90m、深さ26cmを測る。平面形は、主軸方向N-3°-Wを示す不整な楕円形で、一部北側に突出する。断面形は、中央部が盛り上がった浅いW字形である。上端幅50～70cm、下端幅30～50cm、深さ20～26cmの溝が環状に廻るような形状である。堆積土は黒色とオリーブ褐色の砂質シルト2層に分けられる。形状から植栽痕と考えられる。遺物は出土していない。



第83図 SX16 性格不明遺構平面図・断面図

2) SX18 性格不明遺構 (第84図、図版39-3・4)

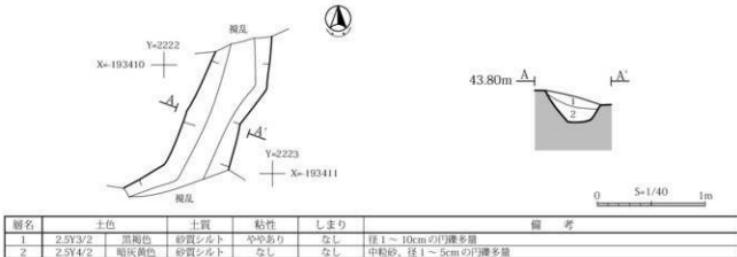
S1～2-W8 グリッドに位置する土坑状の遺構であり、北側は擾乱により欠損する。SA5P63と重複し、SA5P63より新しい。確認した規模は、長さ 1.16m、幅 95cm、深さ 27cm を測る。平面形は不明で、底面は北へ向かって傾斜する。断面形は逆台形であり、壁面は外傾して立ち上がる。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、径 1～10cm の小礫が少量含まれる。しまりがなく腐植物が含まれるので、植栽痕の一部である可能性も考えられる。遺物は出土していない。



第84図 SX18 性格不明遺構平面図・断面図

3) SX19 性格不明遺構 (第85図、図版39-5・6)

S1～2-W8 グリッドに位置する溝状を呈する遺構である。わずかに蛇行しながら南北に走り、両端は擾乱により欠損する。確認した規模は、長さ 1.8m、上端幅 50～57cm、下端幅 18～30cm、深さ 25～30cm を測り、主軸方向は N-22°-E を示す。断面形は逆台形で、堆積土は黒褐色砂質シルトと暗灰黄色の 2 層に分けられる。遺物は出土していない。



第85図 SX19 性格不明遺構平面図・断面図

4) SX21 性格不明遺構 (第86図、図版40-1～5)

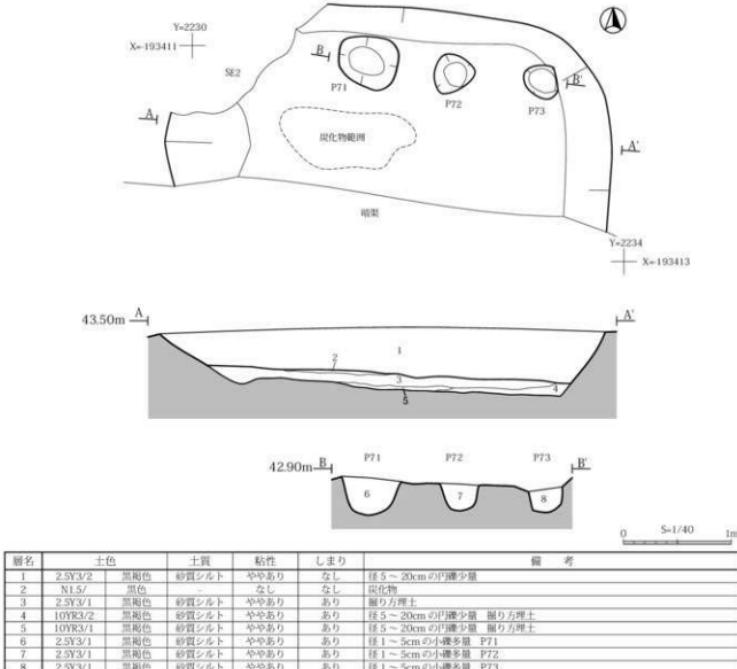
S2-W7～8 グリッドに位置する土坑状の遺構である。南側を GHQ による暗渠に削平され、全体の形状は不明である。確認した規模は、長さ 4.09m、残存幅 1.79m、深さ 40cm を測る。平面形は、主軸方向 N-86°-W を示す側丸長方形である。底面は、検出面から約 40cm 下がり、概ね平坦で東へ向かってわずかに傾斜する。底面上では薄い炭化物の層の堆積が確認された。掘り方底面も平坦で、東へ向かってわずかに傾斜し、P71～P73 の柱穴状の

第2節 路線部II区

掘り込みが3基、東西に並んで検出された。堆積土は黒褐色砂質シルトを主体に5層に分けられる。当遺構は、機能していた当時は3層上面が底面をなしており、廃棄されて1層が堆積したものと考えられる。

掘り方底面で検出された3基の掘り込みは、その形状から柱穴と考えられるが、SX21北壁に沿って並び、主軸方向N-83°-Wを示す。柱間寸法は、西から84cm(2尺7寸)、80cm(2尺6寸)を測る。各柱穴の規模は、長軸34~55cm、短軸30~49cm、深さ24~46cmを測る。平面形は不整格円形であり、断面形はU字形である。また、検出できなかったが、西側にもう1基程柱穴が存在した可能性も考えられ、SX21の施設の一部であると思われる。

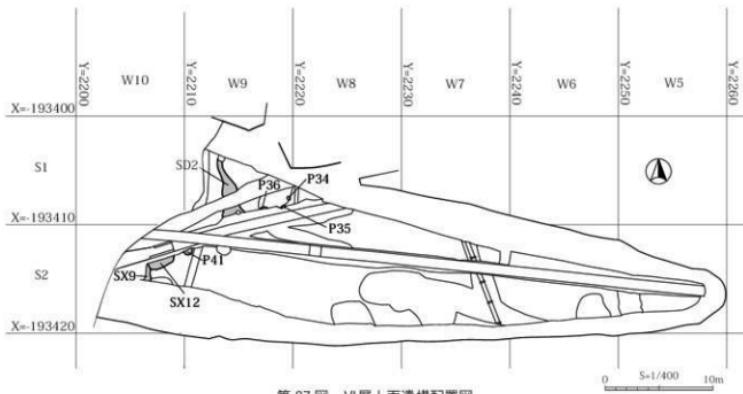
SX21北西隅はSE2と接しており、SX21検出時にはSE2に切られていると考えられたが、掘り下げたところSX21と接する範囲のSE2の石組が欠損していることから、SX21を掘削する際にSE2の石組を壊したものと推測される。SE2と接する範囲の形状は確認できなかった。遺物は出土していない。



第86図 SX21性格不明遺構平面図・断面図

2 VI層上面検出遺構

VI層は調査区の西側で確認され、中央部では確認できなかった。VI層上面において検出した遺構は、溝跡1条、性格不明遺構2基、柱穴4基である。



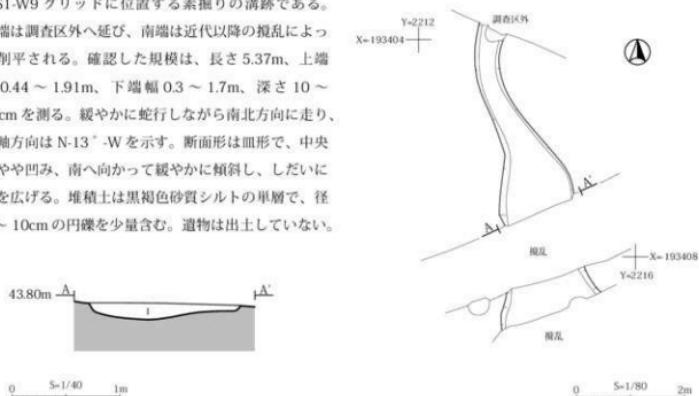
第87図 VI層上面遺構配置図

(1) 溝跡

1) SD2 溝跡（第88図、図版41-2・3）

SD2 溝跡はW9グリッドに位置する素掘りの溝跡である。

北端は調査区外へ延び、南端は近代以降の擾乱によって削平される。確認した規模は、長さ5.37m、上端幅0.44～1.91m、下端幅0.3～1.7m、深さ10～15cmを測る。緩やかに蛇行しながら南北方向に走り、主軸方向はN-13°-Wを示す。断面形は皿形で、中央がやや凹み、南へ向かって緩やかに傾斜し、しだいに幅を広げる。堆積土は黒褐色砂質シルトの単層で、径1～10cmの円礫を少量含む。遺物は出土していない。



編名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y3/2	黒褐色 砂質シルト	ややあり	なし	径1～10cmの円礫少量

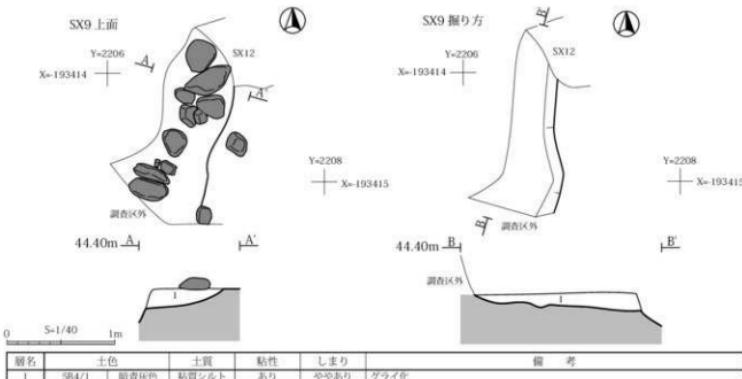
第88図 SD2 溝跡平面図・断面図

第2節 路線部II区

(2) 性格不明遺構

1) SX9 性格不明遺構 (第89図、図版42-1・2)

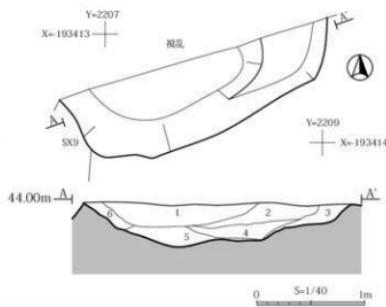
S2-W10 グリッドに位置し、南北に延びる石列を有する遺構である。西側は搅乱により削平され、南側は調査区外へ延びる。北側でSX12と重複し、SX12より古い。確認した規模は、長さ 1.72 m、残存幅 90cm、深さ 7cm を測る。堆積土は暗青灰色粘質シルトの単層で、グライ化しているものと考えられる。堆積土の上面に、長さ 14 ~ 50cm、幅 9 ~ 21cm、厚さ 8 ~ 25cm の円礫が、やや雜然と列をなして検出された。当遺構はその形状から池等の縁辺などと推測できるが、判然としない。遺物は出土していない。



第89図 SX9 性格不明遺構平面図・断面図

2) SX12 性格不明遺構 (第90図、図版42-3・4)

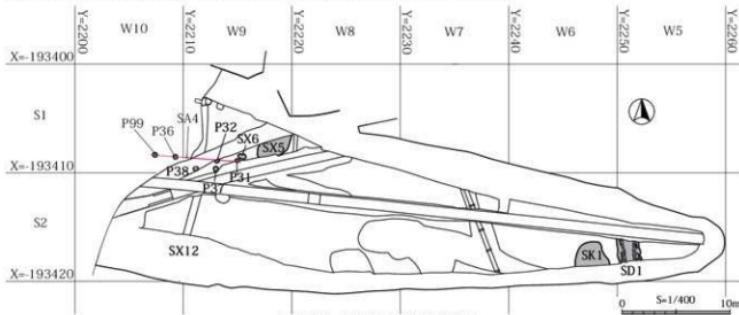
S2-W10 グリッドに位置する土坑状の遺構である。北側は搅乱により削平され、西側でSX9と重複し、SX9より新しい。確認した規模は、長さ 2.56m、幅 77cm、深さ 41cm を測る。平面形は主軸方向 N-72°-E を示す梢円形と思われ、断面形は皿形である。底面は凹凸が見られ、東側でテラス状を呈して一段高くなる。壁面は内溝しながら立ち上がる。堆積土は黒褐色及び黒色の砂質シルトを主体とし、6層に分けられる。1・2層には多量の円礫が含まれる。遺物は出土していない。



第90図 SX12 性格不明遺構平面図・断面図

3 V層上面検出遺構とV層出土遺物

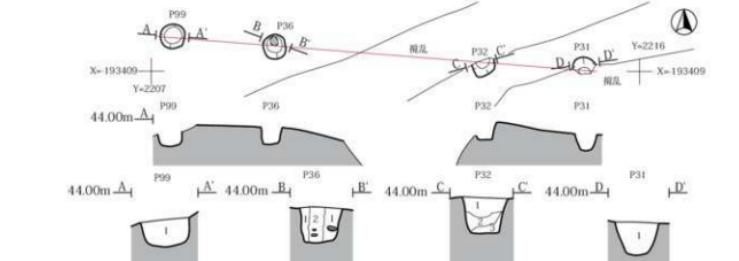
V層は調査区の東側及び西側において確認され、中央部では確認されなかった。V層上面において検出した遺構は、柱列跡1条、溝跡1条、土坑1基、性格不明遺構2基、柱穴2基である。



(1) 柱列跡

1) SA4 柱列跡（第92図、図版43-2～45-2）

S1-W9・W10 グリッドに位置する。I区のP99・P36、II区のP32・P31の4基の柱穴によって構成される柱列跡である。中央を近代以降の搅乱により削平されており、柱穴が1基欠損しているものと思われる。確認した規模は、長さ7.6m、柱間寸法は西から1.88m(6尺2寸)、3.84m(12尺7寸)、1.88m(6尺2寸)を測り、欠損した柱穴1基を補うと4間で、1間の距離が6尺2寸～6尺3寸となる。各柱穴の規模は、長軸42～45cm、短軸40～45cm、深さ28～34cmを測る。各柱穴の平面形は楕円形もしくは隅丸方形と考えられ、断面形は逆台形である。P36のみ柱痕が確認された。主軸方向はN-86°-Wを示す。堆積土は砂質シルトが主体で、量の多少はあるが小礫を含む。南側に平行してP37・P38が並ぶが関係は確認できなかった。遺物は断瓦の破片が1点と磁器の破片が1点出土したが、細片のため図示しえなかった。



遺構名	別名	土色	土質	粘性	しまり	細 考
I区P99	1	SY7/2	黒褐色	砂質シルト	あり	径2～5cmの礫少細SY6/3オーリーブ褐色砂質シルト微細
I区P99	1	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	径3～5cmの礫少細
I区P99	2	10YR2/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	径約6cmの礫少細
I区P99	3	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	細
II区P36	2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	径約5cmの礫少細
II区P36	3	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	径約5cmの礫少細
II区P31	1	10YR3/3	暗褐色	シルト	あり	砂礫多量

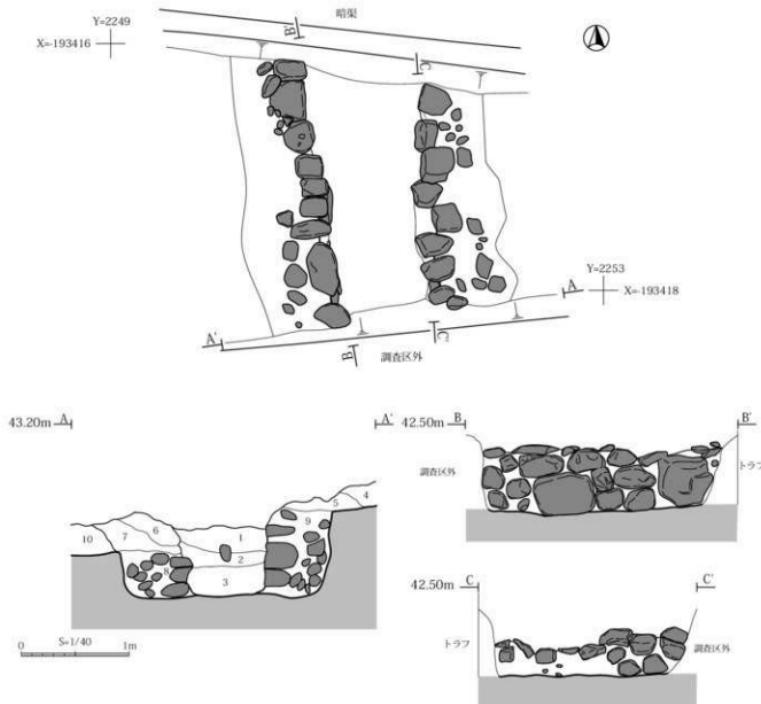
第92図 SA4 柱列跡平面図・断面図

第2節 路線部II区

1) SD1溝跡（第93・94図、図版45-3～46-2）

S2-W5・W6グリッドに位置する石組の溝跡である。直線的に南北に走り、南側は調査区外へ、北側はGHQによる暗渠の下へ延びる。確認した石組の規模は、長さ2.11m、幅71～93cm、深さ約70cmを測る。また、主軸方向はN-5°-Wを示し、断面形は方形を呈する。

石組は、長さ19～40cm、幅15～30cm、厚さ14～23cmの円礫や亜円礫を、2段から3段垂直に積み上げ



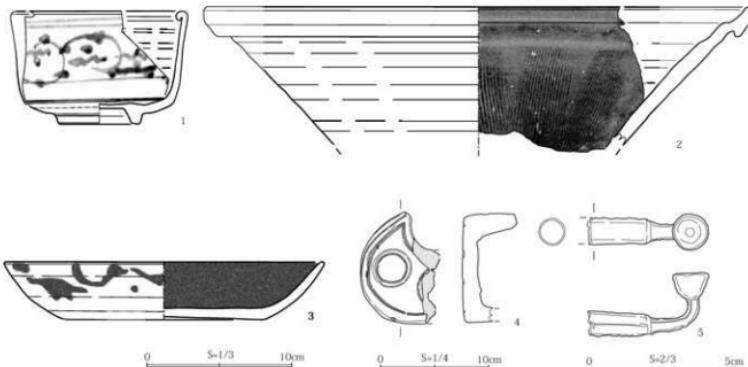
層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	2.5Y3/1	黒褐色	中粒砂	なし	ややあり SD1堆積土
2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり ややあり	中粒砂との互層 種2～10cmの礫多量 SD1堆積土
3	10YR4/4	褐色	砂礫	なし	種2～10cmの礫多量 SD1堆積土
4	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	あり	あり
5	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	なし	ややあり 種約1cm程の礫及び中粒砂多量 石組奥込み
6	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり
7	10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	種2～10cmの礫少量
8	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	なし	ややあり 種5～10cm程の礫及び中粒砂多量 石組奥込み
9	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	なし	ややあり 種5～10cm程の礫及び中粒砂多量 石組奥込み
10	10YR3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり 種5～10cmの礫

第93図 SD1溝跡平面図・断面図

て築造されている。石組の裏込めには径6~10cmの円礫が使用されている。底面はほぼ平坦で、南へ向かって僅かに傾斜する。溝内の堆積土は3層に分けられ、下層から褐色砂礫、黒褐色砂質シルト、黒褐色中粒砂が堆積する。掘り方は、上端幅2~2.2m、下端幅1.65~1.9m、深さ約80cmを計り、石組裏込め部分が溝底面より若干下がる。

出土遺物は、溝内堆積土下層の砂礫層から土師質土器皿、17世紀後葉~末葉の肩付の煙管の破片等、中層から上層にかけて18世紀前半の波佐見産陶胎染付の香炉、肥前産の陶器碗、瀬戸・美濃産擂鉢等陶器4点、肥前産磁器碗の破片3点、鬼瓦の破片1点を含む瓦3点、瓦質土器の破片1点等が出土した。出土遺物の時期は概ね17世紀後半~18世紀前半であり、当該時期に当溝跡が機能していたものと考えられ、18世紀中~後葉に埋められたものと考えられる。そのうち、波佐見産の香炉、瀬戸美濃産の擂鉢、かわらけ、瓦、煙管各1点を掲載した。

周辺地形は、この溝を境に東側が1段下がり、石組の高さも南端西側では約76cmに対して、東側では38cm程度である。本遺構はその規模や形状から、迂回路部で検出された石組の溝SD3に繋がるものと推察され、区画施設の一部と考えられる。



図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			产地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	94-8	8層	陶器	香炉	口縁~高台	密	(12.2)	(5.4)	7.85	波佐見	18世紀前半	染付模写文 内面:無釉 陶胎染付	1-31
2	94-9	8層	陶器	擂鉢	口縁~底部	やや粗	(38.1)	-	(9.55)	瀬戸・美濃	17世紀末~18世紀初頭	鐵釉 内面:櫻目 18本 1単位	1-32
3	94-10	底面直上	土師質土器	かわらけ	口縁~底部	粗	(22.3)	(14.0)	4.02	在地	近世	すす付着 ロクロ左回転	1-33
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)			備考					登録番号	
				高さ	幅	厚さ							
4	95-1	9層	鬼瓦	(10.32)	(7.36)	(5.0)	粘土石微鑿 外面:ヘラ工具による文様成形 ゴコナデ 内面:ヘラ工具による成形 ナデ 力摩文?					H-2	
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm・g)			備考					登録番号	
				長さ	幅	厚さ	重量						
5	95-2	9層	金属性製品	4.15	-	0.1	4.96	複管(複管) 最大幅1.3cm 最小幅0.9cm					N-7

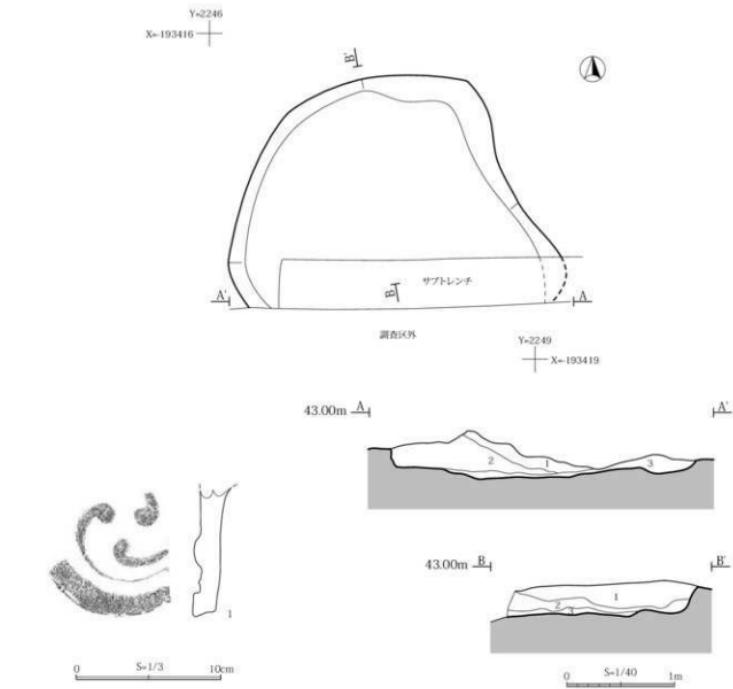
第94図 SD1溝跡出土遺物

第2節 路線部II区

(3) 土坑

1) SK1 土坑 (第95図、図版46-3・4)

S2-W6 グリッドに位置し、南端は調査区外へ延びる。確認した規模は、長さ 3.19 m、幅 2.14 m、深さ 31 cm を測る。平面形は梢円形あるいは不整形と考えられる。底面は凹凸が見られ、壁面は垂直に立ち上がり、断面形は逆台形である。堆積土は砂質シルトを主体とし、黒褐色、にほい黄褐色、暗褐色の3層に分けられる。堆積土から出土した軒丸瓦の破片1点を図示した。



編名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1 2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	ややあり	径 10 ~ 20cm の小漂浮物	
2 10YR4/3	にほい黄褐色	砂質シルト	ややあり	径 1 ~ 5cm の小漂浮物	
3 10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	ややあり	径 1 ~ 5cm の小漂浮物	
図版番号	写真図版番号	層位	種類	法量(cm)	備考
				長さ 幅 厚さ	登録番号
1	95-3	2層	軒丸瓦	外側：型押し成形機による調整 内面：ヨコナデ 文様：三巴文（左巻） F-3

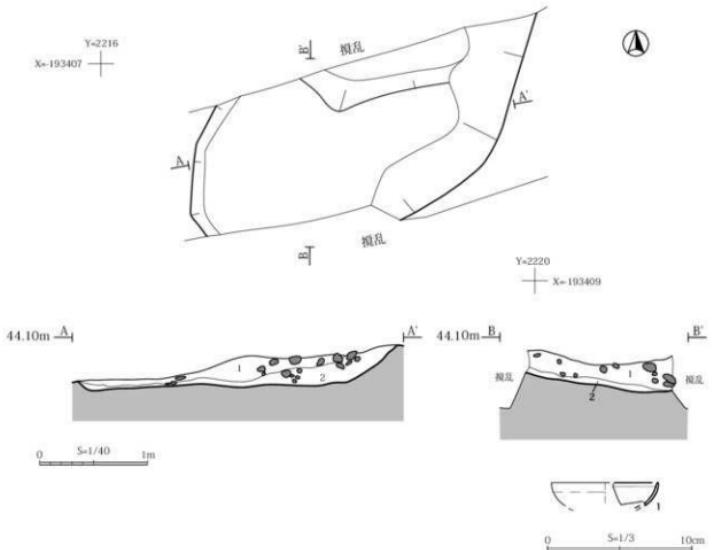
第95図 SK1 土坑平面図・断面図・出土遺物

(4) 性格不明遺構

1) SX5 性格不明遺構 (第96図、図版47-1・2)

S1-W9 グリッドに位置する土坑状の遺構である。南北を近代の搅乱により削平されており、全体の形状は不明である。確認した規模は、長さ 3.53m、幅 1.78m、深さ 30cm を測る。底面は概ね平坦で、北西に向かって緩やかに傾斜し、北側は一段下がる。壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿状である。堆積土は 2 層に分けられ、1 層は礫を多く含む黒褐色砂質シルト、2 層は暗灰色シルトである。

遺物は上層から 16 世紀末葉～17 世紀初頭の中国産の磁器碗の破片が 1 点出土したほか、平瓦の破片が 1 点出土した。そのうち、磁器碗 1 点を図示した。



層名	土色	土質	粘性	しまり	備考
1	10YR3/2 黒褐色	砂質シルト	あり	あり	径約 10cm の礫多層
2	N3/ 暗灰色	シルト	あり	あり	

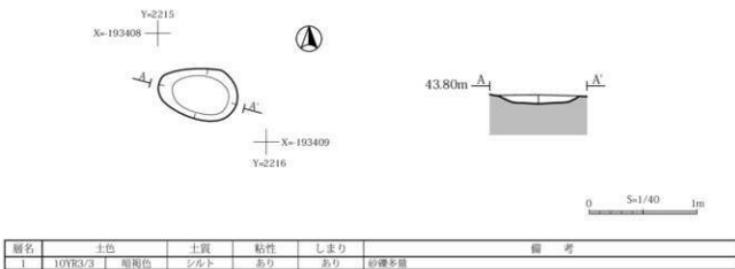
図版番号	写真図版番号	層位	種別	器種	部位	胎土	法量(cm)			産地	時期	備考	登録番号
							口径	底径	器高				
1	95-4	3層	磁器	皿	口縁～ 底部	密	(7.4)	-	(1.6)	中国	16世紀末～ 17世紀初	透明釉 内面：染付 圖案	J-33

第96図 SX5 性格不明遺構平面図・断面図・出土遺物

第2節 路線部II区

2) SX6 性格不明遺構 (第97図、図版47-3・4)

S1-W9 グリッドに位置する土坑状の遺構で、西側でSD2と重複し、SD2より新しい。規模は、長軸74cm、短軸48cm、深さ8cmを測る。平面形は、主軸方向N-76°Wを示す東西に長い楕円形である。底面はわずかに起伏があるが概ね平坦で、壁面は緩やかに立ち上がり、断面形は皿形である。堆積土は暗褐色シルトの単層である。



第97図 SX6 性格不明遺構平面図・断面図

(5) V層出土遺物 (第98図、図版95-5・6)

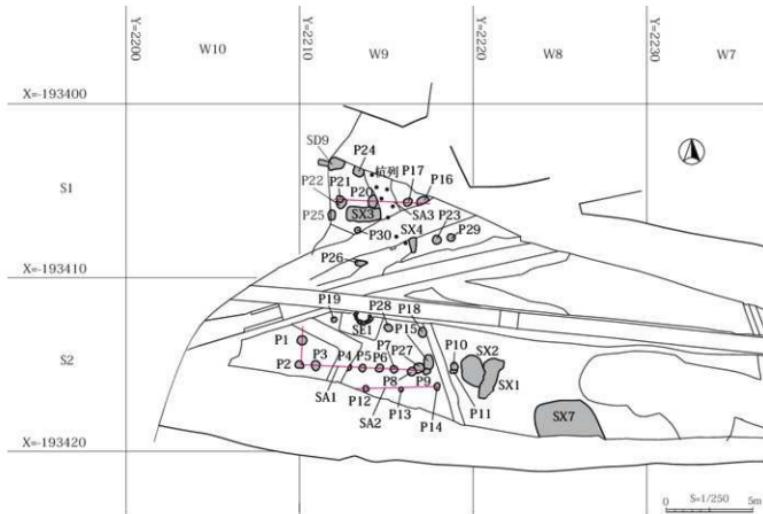
V層から出土した遺物は、総数50点を数える。内訳は、陶器は肥前産、瀬戸・美濃産、小野相馬産、在地産等21点、磁器は肥前産、瀬戸・美濃産等16点、土師質土器7点、木製品の杭が6点である。このうち志野皿1点、杭1点を図示した。



第98図 V層出土遺物

4 IV層上面検出遺構とIV層出土遺物

路線部II区におけるIV層は、全体的に薄く、壁面では東端から西端まで確認できたが、面的に検出できたのは西側及び東側SD1の上面周辺のみである。そのうち西側のS1-W9・S2-W8～10グリッドで遺構を検出した。検出した遺構は、柱列跡3条、井戸跡1基、性格不明遺構5基、柱列跡柱穴13基である。



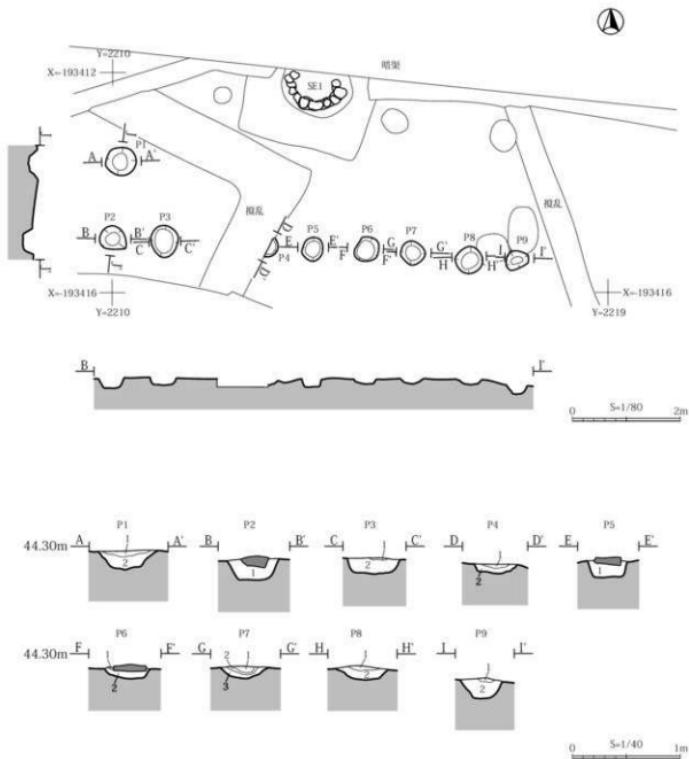
第99図 IV層上面遺構配置図

(1) 柱列跡

1) SA1 柱列跡（第100図、図版48-1～50-6）

S2-W9・10グリッドに位置する南北1間、東西8間のL字形に並ぶ柱列跡である。南北方向にP1・P2、東西方向にP2からP9までの8基、計9基の柱穴で構成される。搅乱により、中程のP4の西半分と柱穴1基を欠損すると推測される。規模は、長さ南北1.43m、東西7.36mを測る。柱間寸法は、西から94cm(3尺1寸)、191cm(6尺3寸:2間)、78cm(2尺5寸)、95cm(3尺1寸)、83cm(2尺7寸)、105.4cm(3尺4寸)、84.6cm(2尺8寸)を測る。柱穴の規模は長軸39～58cm、短軸33～51cm、深さ9～19cmを測り、平面形は概ね梢円形で、断面形は逆台形である。主軸方向はN-3°-E及びN-87°-Wを示す。各柱穴の堆積土は砂質シルト主体で、概ね1層または2層で、P7のみ3層に分けられる。P2、P5、P6からは礎石と思われる、径24～30cmの円礫が検出された。また、P1、P4、P7、P8、P9については礎石が取り除かれて埋まったような堆積が観察される。出土遺物はP2から肥前産磁器の破片が1点出土しているが、細片のため図示し得なかった。

調査区北側SA3と繋がってSE1井戸跡を囲う構造物と考えられるが判然としない。

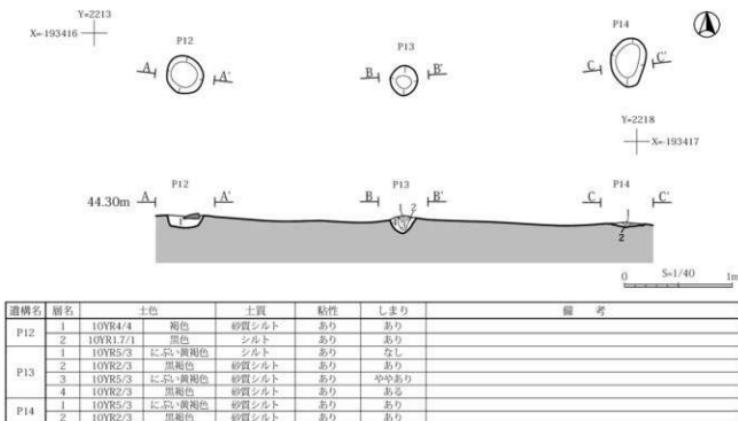


透構名	剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P1	1 2.5Y3/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	複多層
	2 10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	10YR4/4 黄褐色砂質シルトのラミナ状
P2	1 10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	あり	径約 5cm の礫少量
	2 10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	なし	
P3	1 10YR4/2	灰黄褐色	砂質シルト	あり	あり	
	2 10YR5/3	にじく黄褐色	砂質シルト	あり	なし	
P4	1 10YR5/3	にじく黄褐色	砂質シルト	あり	なし	
	2 2.5Y6/2	灰褐色	砂質シルト	あり	あり	
P5	1 2.5Y6/2	灰褐色	砂質シルト	あり	なし	小礫少量
	2 10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	
	3 10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	なし	2.5Y6/2 灰黄色細粒砂とラミナ状
P6	1 2.5Y6/2	灰褐色	砂質シルト	あり	あり	
	2 10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	
	3 10YR3/1	黒褐色	砂質シルト	あり	なし	小礫少量
P7	1 2.5Y6/2	灰褐色	砂質シルト	あり	あり	
	2 2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	あり	なし	
	3 10YR3/1	暗褐色	砂質シルト	あり	あり	2.5Y6/2 灰黄色細粒砂とラミナ状
P8	1 2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	あり	なし	
	2 10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	あり	小礫少量
P9	1 10YR5/3	にじく黄褐色	砂質シルト	あり	あり	ロームブロック少量
	2 10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	あり	複少量

第100図 SA1柱跡平面図・断面図

2) SA2 柱列跡 (第 101 図、図版 48-1・50-7～51-4)

S2-W9 グリッドに位置する東西方向に並ぶ柱列跡である。P12・P13・P14 の 3 基の柱穴で構成され、P14 より東側では関連する柱穴は検出できなかったが、西側は調査区外へ延びる可能性が考えられる。規模は、長さ 4.11 m、柱間寸法は、西から 2.01m (6 尺 6 寸)・2.07m (6 尺 8 寸) を測る。柱穴の規模は、長軸 28 ~ 45cm、短軸 25 ~ 33cm、深さ 5 ~ 16cm を測る。主軸方向は N-88°-W を示す。各柱穴の平面形は、P12・P13 が円形、P14 が梢円形を呈し、断面形は P12 が逆台形、P13 が U 字形、P14 が皿形である。堆積土は黒色または黒褐色砂質シルトを主体とし、P12、P14 は上下 2 層に、P13 は 4 層に分けられた。P12 から礎石または根固め石と思われる、径 16cm 程のやや扁平な円碟が検出されたほか、P13、P14 においても石が取り除かれた痕に堆積したような土層が見られる。遺物は出土していない。



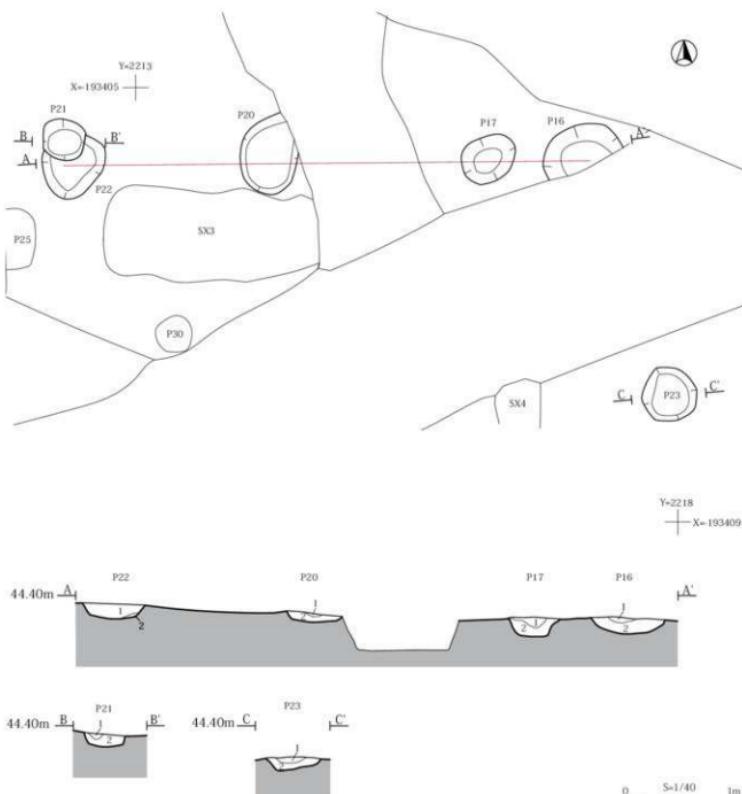
第 101 図 SA2 柱列跡平面図・断面図

3) SA3 柱列跡 (第 102 図、図版 48-1・51-5～52-4)

S1-W9 グリッドに位置する。東西に並ぶ P16・P17・P20・P21・P22 の 5 基で構成され、P21 と P22 は重複し、P21 が新しい。P22 より西側は、路線部 1 区となるが、関連する柱穴は検出していない。東端及び中程にある P17 と P20 の間は擾乱により欠損している可能性が考えられる。また、P20 と P21・P22 の間は精査したが検出できなかった。規模は、検出長 4.86m を測り、柱間寸法は西から 1.90m (6 尺 3 寸)・1.97m (6 尺 5 寸)・87cm (2 尺 8 寸) である。柱穴の規模は長軸 37 ~ 75cm、短軸 37 ~ 59cm、深さ 10 ~ 18cm を測る。主軸方向は N-87°-W を示す。各柱穴とも平面形は概ね梢円形で、断面形は逆台形及び皿形である。堆積土は黒褐色の砂質シルトを主体とし、それぞれ 2 層に分けられる。遺物は出土していない。

当柱列跡は南側で検出された SA1 と同じ主軸方向を示し、調査の際は、P16 の南側で検出された P23 も含めて、SA1 と繋がり、一棟の建物になる可能性を推測していたが、判然としない。

第2節 路線部II区



遺構名	剖名	土色	土質	粘性	しまり	備考
P16	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	目約1cm以下の砂礫少量
	2	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	目約5cmの角礫少量
P17	1	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	目約2cmの礫少量
	2	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	10YR2/1 黒褐色シルトのラミナ状
P20	1	10YR3/3	暗褐色	砂質シルト	あり	無粘性多量
	2	10YR3/3	黄褐色	砂質シルト	あり	目約5～20cmの礫多量
P21	1	10YR5/6	黃褐色	砂質シルト	あり	目約1cmの礫少量
	2	10YR2/2	黒褐色	砂質シルト	あり	目約2cmの礫多量
P22	1	2.5Y3/2	黒褐色	シルト	あり	目約15～20cmの礫多量
	2	10YR2/3	黒褐色	砂質シルト	あり	目約10cmの礫多量
P23	1	10YR4/2	灰黃褐色	砂質シルト	あり	10YR5/6 黄褐色シルトと 10YR4/2 灰黃褐色中粒砂のラミナ状 団塊多量
	2	10YR2/1	黒色	砂質シルト	あり	

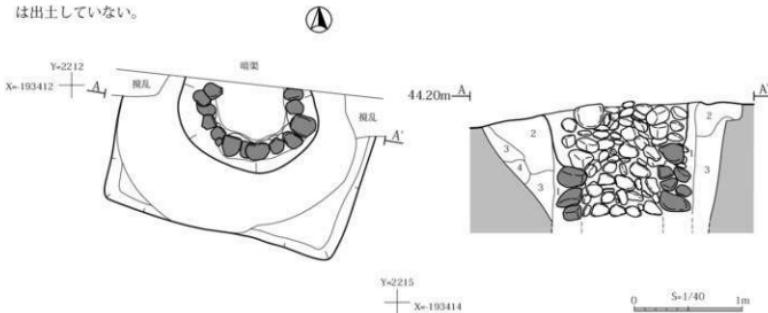
第102図 SA3柱跡平面図・断面図

(2) 井戸跡

1) SE1 井戸跡 (第103図、図版52-5～8)

S2-W9 グリッドに位置する石組の井戸である。北半分が調査区中央を東西に走るGHQによる暗渠に削平される。また、暗渠に影響するため、検出面から1mの深さまで掘削を中止した。規模は、石組内径74cmを測る。壁面の石組は長さ15～30cm、幅12～25cm、厚さ10～20cmのやや扁平な円礫を積み上げ、隙間及び裏込めに径5～10cmの礫を詰めている。石組内には、円礫が投げ込まれたようにして埋められていた。上端には、1辺約2.3m、深さ約15cmの方形の掘り込みが検出され、その底面から掘り込まれる。掘り方の規模は、上端径2.2m、下端径1.46mを測り、平面形は円形と思われ、断面形は逆台形である。堆積土は、黒色・黒褐色・にぶい黄褐色の砂質シルトの3層が雑然と堆積する。上面の方形を呈する掘り込みは、井戸の上部構造の痕跡であろうと考えられる。

当遺構はSA1及びSA3の柱列跡に囲まれる中心に位置しており、何らかの関連があるものと推測される。遺物は出土していない。



第103図 SE1 井戸跡平面図・断面図

(3) 性格不明遺構

1) SX1 性格不明遺構 (第104図、図版53-1・2)

S2-W8 グリッドに位置する集石状の遺構である。南東側が一部削平され、西側でSX2と重複し、SX2より新しい。規模は、長さ2.46m、幅1.08m、深さ18cmを測る。平面形は、主軸方向N-21°-Eを示す南北に長い不整形で、断面形は逆台形である。堆積土は黒色砂質シルトの単層で、径0.5～1cmの礫を多量に含む。上面に長さ15～34cm、幅10～21cm、厚さ5～15cmの円礫が並ぶ。円礫は、西側及び南側で、比較的大きな石が外側に長軸方向をそろえて並び、その内側にやや小ぶりな石が詰められる。北側は大ぶりの石がまばらになり、小礫が広がる。

本遺構は、その様相から構造物の基礎等の一部と推測されるが判然としない。遺物は出土していない。